

境界線を越えた先にあるもの

?クロス?

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔法世界を救った勇者は神に危険な考えを持つ転生者の始末という使命を与えられとある魔術の禁書目録の世界へ転生させられた。

新しき生で彼女は何を聞き、何を見、何を感じるのか。

そんな彼女と出逢った未元物質と呼ばれる少年はどのような選択をし、どのような未来を歩むのか。

チートとチートが交差する時、物語は苛烈を極める。

妹達編から始まります

# 目次

設定集

人物設定集

作中人物の使用した魔法、魔術の詳細

設定集

旧約の始まり

第一話

勇者、転生する

第二話

勇者、電撃姫と模擬戦す

る

第三話

勇者、いろいろあつて暗部

落ちする。

第四話

勇者、ヒーローの世話をす

る

61

第五話

勇者、デートする。

73

間話1

垣根、照らし出された新

たな道に行く。

第六話

垣根、不純物と初戦闘する

間話2

勇者、100人の不純物と

戦う

第七話

勇者、初登校する

第八話

垣根、踏み入れし新たな領

域

第九話

勇者、悪魔の母と対峙する

148

128

119

98

87

82

第十話 勇者、全てを打ち明ける。

172

第十六話 残骸争奪戦 turn

ing point 266

第十一話 勇者、魔法を教える。

第十七話 残骸争奪戦 Beac

184

on of the fight

第十二話 垣根、最終試験に臨む

278

192

第十八話 残骸争奪戦 The t

動き出した異世界からの来訪者達

ruth in fog 286

第十三話 勇者、スカウトされる。

第十九話 残骸争奪戦 The F

220

reeshooter 293

第十四話 残骸争奪戦 prol

第二十話 残骸争奪戦 Lethal

ogue 236

Weapon 301

第一五話 残骸争奪戦 Saint

第二十一話 残骸争奪戦 rank

rough stone 256

SSS 315

第二十二話 殘骸争奪戰 Adult r

e s p o n s i b i l i t y , t h e

r e s p o n s i b i l i t y o f

t h e c h i l d

# 設定集

## 人物設定集

如月 樹

I T S U K I      K I S A R A G I

職業    元勇者

好きなモノ    ヒーロー、甘い物、ジトアニマル(ジト目の動物のキャラクター)、翼、

嫌いなモノ    退屈、虫、幽霊、茄子、暑さ

高校    上条当麻と同じ高校

武器    勇者時代に集めた武器類、魔法、自身の身体能力 e t c …

特殊能力    魔法、魔法世界の天使の力

【使用可能な魔法の種類】

炎魔法

水魔法

大地魔法

樹木魔法

雷魔法

大気魔法

陣術

結界術

光魔法

闇魔法

音魔法

錬金術

時空魔法

無属性魔法

精神魔法

e t c :

【容姿】

しみ一つないスラツとした白く綺麗な長い足、くびれた腰、そこそこ大きな形の良い胸、アホ毛が跳ねている赤い長髪、炎のように赤い眼、整い過ぎた顔の絶世の美少女。

【補足】

料理スキルは五和以上で転生特典のありとあらゆるものの知識により、全世界の全ての料理が作れる。



アツクアを軽く越える身体能力に莫大な量の魔力を持つ。

聖人並の幸運の持ち主。

前世のこともあり、殺人に対しては全く躊躇わない。

(だからといって殺人が良いものだとは思っていない、罪の意識はある)

一方通行並の分析力と頭の回転の早さを持つ。

基本的に友人のことは名前ではなく、渾名で呼ぶ。

オリキャラ紹介集

分類：不純物<sup>イレギュラー</sup>

軍人のような男

名前：歳宇治 禅 ZEN SAIUZI

身長：185cm

身体年齢：25歳

身体的特徴：迷彩柄の服を着ている、眼が鋭く顎髭を生やしている。

転生特典：ONE PEACEの武装色の覇気と見聞色の覇気、身体能力の底上げ。

前世の職業：軍人

現世の職業：暗部組織『フレーム』の隊長

初登場回：第六話

忍者のような男

名前：霧隠 絡繰                    K A R A K U R I   M U O N

身長：182cm

身体年齢：23歳

身体的特徴：忍び装束で全身を覆っていて外から見えるのは口元と目、鼻のみ。

転生特典：N A R U T O の氷遁忍術と螺旋丸と変わり身などの基本的忍術、身体能力の底上げ。

前世の職業：暗殺専門の殺し屋

現世の職業：暗部組織『フレイム』の構成員

初登場回：第六話

金髪の子の少年

名前：金切金色                    K O N Z I K I                    K A N A K I R I

身長：165cm

身体年齢：16歳

身体的特徴：童顔系イケメン

転生特典：超能力

能力名：【唯我独存】オンリーワン

能力強度：Level 5

能力詳細：自身の受けたダメージを自身から分離し、他に押し付ける能力。

前世の職業：学生

現世の職業：暗部組織『フレイム』の構成員

初登場回：間話2

銀髪の子の少年

名前：金切白銀      HAKUGIN      KANAKIRI

身長：170cm

身体年齢：16歳

身体的特徴：王子様系イケメン、緑と赤のオツドアイ

転生特典：超能力

能力名：相互力場フォースフィールド（能力の総称）

能力強度：Level 4

能力詳細：引力と斥力を操る能力。

前世の職業：学生

現世の職業：暗部組織『フレーム』の構成員

初登場回：間話2

SPのような黒スーツの男

名前：渋柿 宗真      S O M A      S H I B U G A K I

身長：178cm

年齢：21歳

身体的特徴：黒髪黒眼で目つきが悪い、常に眉間に皺が寄っている。

転生特典：超能力

能力名：想像現象  
オールフェノメノン

能力強度：Level 5

能力詳細：既存、未存問わず、想像した現象を発生、操作する能力。

前世の職業：SP

現世の職業：ローマ正教暗部所属の原石

初登場回：第八話

分類：天然不純物  
ネイチャー

名前：リリス

身長：173cm

年齢：unknown

身体的特徴：綺麗な茶髪のセミロングに碧眼でエルフのようなとんがった耳に端正な顔立ちをしている。ボンツキュッポンのエロエロボデー！。

能力の種類：魔術、魔法

職業：AO（アンチオリジン）幹部構成員

初登場回：第九話

分類：正式転生者

名前：聖 守羅 SYURA HIJIRI

身長：165cm

年齢：19歳

身体的特徴：肩まで届く薄い赤の混じった白髪に淡い紫の瞳の少女。掌から少し溢れる程度の胸。

ピンクの柄Tシャツに淡い紫のカーデイガンを羽織り、淡いピンクのチェック柄のスカートを履いている。

転生特典：空間操作能力

能力詳細：空間と空間を繋げたり、転移するだけでなく、空間を消滅させたり、制御空間領域内にある万物の操作も可能。

世界を渡ることすら可能。

前世の職業：高校生兼魔術師

現世の職業：大学生兼如月樹親衛隊参謀長

初登場回：第十三話

補足：前世で培った魔術を使うことはできるが、とある世界の魔術同様、使うと全身の血管や組織にダメージを負うことになるという副作用が存在する。

魔法名はsplendid702。

意味は闇を照らし導く者。

樹に助言を貰った後、同じく樹に救われた二人と共に如月樹親衛隊を設立し、樹を影ながら支え、助けている。

名前：橘優月 Y U D U K I T A T I B A N A

身長：165cm

年齢：15歳

身体的特徴：ボーイッシュな茶色の短髪の少女。巨乳。

顔立ちはカッコイ寄りの可愛い系。

能力：流れを操る能力

能力詳細：あらゆる流れを操れるが、???

初登場回：残骸争奪戦中編5

補足：てんぱりやすい。少々天然。甘党。???

分類：差異によって生じた原作には登場しない者たち

名前：インデペンデンス      I N D E P E N D E N C E

身長：250cm

身体年齢：?歳

身体的特徴：神父服を着た筋骨隆々の白銀の長髪をオールバックにした神父。

能力：なし

補足：脳筋の殻を被ったインテリの皮膜を被った脳筋。

努力だけで物理限界を越える筋肉を手に入れた究極の脳筋野郎。???

初登場回：第七話

名前：木原 双極                    S O K Y O K U                    K I H A R A

身長：188cm

身体年齢：28歳

身体的特徴：ジーパンに上は緑と赤のチェック柄のシャツ一枚だけという格好の筋肉質な大柄の男。

金髪で後ろに流れるようなツンツンヘア。

能力分類：超能力

能力名：念動掌握サイコキネシス

能力強度：Level 5

能力詳細：念動力で対象を掴むようにして操る能力。  
補足：『闘争』を司る『木原』。

初登場回：間話2

全身に一定間隔で光が走るラインの入った白衣の男

名前：木原科学



身長：181cm

身体年齢：22歳

身体的特徴：黒を基調としたヴィジュアル系の服装の上に白衣を着ている。

身体中に光の走るラインが入っている。

補足：『木原』でも最上位の『木原』

初登場回：間話2

名前：木原 無音      MUON      KIHARA

身長：165cm

身体年齢：17歳

身体的特徴：unknown

補足：隠密行動に長ける。

初登場回：間話2

名前：劉凱

身長：181cm

年齢：24歳

身体的特徴：引き締まった筋肉質な身体に白を基調とし、青色の蓮の花柄で飾った

中華服を着崩した中国系の黒髪黒目の男。  
チャイニーズ

魔法名：???

能力：エネルギーを変換、操作する能力（名称なし）

能力詳細：エネルギーを他のエネルギーに変換したり、操作することができる。

エネルギーを消すことも増大させることも可能だが、無から生み出すことはできない。

しかし、手を振った運動エネルギーを熱エネルギーや光エネルギーに変換して照射することなどは可能。

職業：傭兵

初登場回：残骸争奪戦 前編

補足：聖人と原石の性質を併せ持つ。魔術を使えば当然副作用でダメージを負うが、挙動による運動エネルギーを生命エネルギーに変換することで治療するため、副作用はあつてないようなもの。

分類：召喚体

名前：騎士王 KNIGHTS OF KNIGHT

身長：193cm

身体的特徴：全身を銀色の甲冑で包み隠している。

腰には刃渡り180cmの伸縮自在のロングソードを差している。

種族：人間

称号：騎士王

能力分類：魔法、ユニークスキル

ユニークスキル：KNIGHTS OF KNIGHT

能力詳細：全世界線の既存の騎士の能力を行使する能力。

一つの能力は最大3分が限界。

24時を過ぎれば再使用が可能になる。

ランクXXX(試験時ランクSSS)

初登場回：第十一話

名前：ゼフィロスIIアークヒルズ

身長：190cm

身体的特徴：後ろに流れるようなツンツンヘアで、サイドは少し長めのエルフにすら勝る美形。

服装は基本的に吸血鬼が良く着ているようなマント姿。

種族：ヴァンパイアロード

称号：不死者の王、剣帝、魔道を極めし者、

能力分類：死霊術、魔法、結界術、陣術 e t c :

ユニークスキル：限界突破

能力詳細：物事の限界を取っ払い、無限にする能力。

ゼフィロスはこれにより、魔力量や才能、身体能力の上昇値などを無限にしている。その気になれば自身の可能性を無限にすることで魔神の真似すら可能。

無限にしたものを解除し、元に戻すことも可能。

ランクXXX

初登場回：第十三話（名前のみ）

アクセルキャット

体長50cmほどの猫型の魔物。

（乗用車の高速道路を走っている際の平均時速は約80km）

走ると、初速時速100kmからドンドンと加速していき、最高で時速3500kmに達する。

鋭い爪とその圧倒的速度で敵を切り刻む。

ランクA

アダマンタートル

体長5mほどの亀型の魔物。

動きは鈍いが体表は下級ドラゴンの鱗にも匹敵するほどの硬度をもっている。

甲羅に至っては中級ドラゴンの鱗をも凌ぐ硬度で、口から強力な魔砲弾を撃つてくる。

ランクA

ベルコリーの触手

ベルコリーという魔界に生息する肉食植物の触手を召喚する。

触手を覆う粘膜には麻痺効果がある。

天使の力

テレスマ

や光属性の魔法に弱い。

ランクA

魔物の強さの度合い

魔物の強さはランクで表され、以下のようになっている。

尚、冒険者のランクは相当ランクの魔物を討伐出来るということが基準となっている。

例) Fランクの冒険者なら十全の装備を用いければ拳銃を持ったスキルアウトを撃破できる。

Xランク以上は特別ランクで、そのランクの魔物を倒すか捕獲するかタイムした場合のみ冒険者ギルドより与えられる。

魔法世界で歴史上人間が人間のままXランクの領域に至ったものはほんの数人で、XXランクに至ったものは1人だけ

Fランク≡拳銃を持ったスキルアウト一人

Eランク≡通常の銃を持ったスキルアウトの小組織

Dランク≡最新の銃(演算銃器など)を持ったスキルアウトの大組織

Cランク≡フル装備の暗部組織ブロック

Bランク≡パスワードスーツ×100

Aランク≡暗部組織の戦闘タイプレベル4四人

Sランク≡Level 5女性陣一人

SSランク≡Level 5男性陣一人

SSSランク≡Level5 七人全員

XXランク≡大天使ガブリエル（フルパワー）

XXランク≡フィアンマ、オツレルス

XXXランク≡魔神、level6又はそれ以上

原作強化キャラ

名前：餓狼天牙      T E N G A      G A R O

身長：175cm

年齢：21歳

身体的特徴：ボサボサ茶髪の青年

能力：絶対等速<sup>イコールスピード</sup>

能力詳細：

?level3?

投げたものが壊れるか能力を解除するまで遮蔽物があるうと破壊しながら一定の速

度で進み続ける能力。

しかし、速度は大したことはない

射程は自身から半径50m

重量制限は手で投げられる範囲のもの

? level 4?

上記に加え触れたものに能力を付加することが可能に。

自身の身体に能力を付加すると殴打や蹴りの一つ一つが防御不可能かつ一撃必殺になる。

自分の好きなタイミングで能力を発動することが可能になったため

速度の問題はなくなった。

射程は視界に映る距離

重量制限はなし。

初登場回：残骸争奪戦中編5

補足：首にチョーカー型の外部演算補助装置であるEqu. acceleratorをつけている。

Equ. accelerator使用時はlevel 4相当になる。

初登場回：第十九話



補足：常にEqu. acceleratorの電池を最低十本（五十分分）持ち歩いている

## 作中人物の使用した魔法、魔術の詳細設定集

### 【炎魔法】

#### 【デフェールフラム】

直径1 m～30 mの炎球を作り出す炎魔法。

その効果は最低威力のものでも半径10 mが溶解し、その周囲半径40 mが爆風と音で吹き飛ぶ。

フルパワーで発動すれば、その光だけでも体の水分がどんどん蒸発していき、干からびるほどほど。

使用者：如月

### 【水魔法】

#### 【アイシクルレイン】

大量の水柱を降り注がせる水魔法。

水柱は最大で直径8 m長さ15 mとなり、最小で直径5 cm長さ30 cmとなる。

使用者：如月

【大地魔法】

【モテリング】

大地属性の造形魔法で、周囲の鉱物を用いて様々な物を作ることができる。

使用者：如月

【樹木魔法】

【雷魔法】

【雷ホルテックスの複射矢】

最大500発の雷の矢を放つ魔法。

使用者：垣根

【大気魔法】

【シユメルツェンヴェッター】

全てを溶かし尽くす超高熱の嵐を発生させる大気魔法。

使用者：如月

【エアクエイク】

大気に拳を打ち付けて空震を発生させる大気魔法。

その威力は地震のマグニチュード8とほぼ同じほど。

使用者：如月

## 【光魔法】

## 【レイディアントシユラーク】

天から光の衝撃波を降り注がせる光魔法。

使用者：如月

## 【ヘヴンズフォール】

極楽浄土の無限快樂の牢獄へと繋がる黄金の扉が現れ、その扉の中から飛び出す黄金の鎖により対象を拘束し、無限快樂の牢獄へと投獄する封印術。

この牢獄に投獄された者は無限の時を快樂漬けて過ごすことにより、快樂中毒となり、やがては廃人となる。

使用者：如月

## 【レイ】

厚さ20cmの鋼鉄を軽々と貫くレーザー光を打ち出す光魔法。

威力を調節すればレーザーポインターとしても使用できる。

使用者：如月

## 【フルケア】

癒しの光で負傷した部分を包み、治癒する回復魔法。

あくまで傷を治癒する魔法であるので欠損した部位を再生する力はない。

使用者：如月

【シャオ・バルガルド】

何億何兆もの光の矢を一つに束ねて放つ。

その光の矢は一発一発がビルの一階から三階までを丸ごと吹き飛ばす程の威力を持つている。

しかし調節すれば、本来威力に回るはずのエネルギーを爆発の瞬間の光と音に回すこともできる。

使用者：如月

【闇魔法】

【グラビティ・コア】

指定座標を中心点として超強力な重力を発生させる闇魔法。

使用者：如月

【アンチ・グラビテーション】

指定範囲を無重力状態にする闇魔法。

使用者：如月

【インビジブル】

指定物の姿を見えなくする闇魔法。

あくまで見えなくするだけだから実体は存在する。

使用者：如月

【サープラス・グラビトン】

強力な重力をかけて押し潰す闇魔法。

最大で1000G、最小で2Gの重力をかけられる。

使用者：如月

【フェアティルゲン・アツペティート】

黒や茶色、紫という暗色をこちゃ混ぜにしたような色合いの泥の濁流が万物を呑みこ

んでいく暴食の泥波。

使用者：リリス

【血剣】

術者の血を用いて剣を構築する。

術者の血でできているので魔力で操ることができる。

固体の状態だけじゃなく、液体、気体にもできる。

使用者：リリス

【血反吐吐く叫び】

死者の叫びを放つ。

ただの音による衝撃波ではなく、憎しみや怨念などの負の感情が物理法則を歪めてしまふほど籠められているので真空状態にして防いでも、衝撃波は防いでも負の感情の塊によるダメージは防げない。

使用者：リリース

### 【錬金術】

### 【結界術】

### 【シャットアウト】

六つの柱を支柱として空間を断絶させる光の結界を展開する術。

結界の外と内とは次元が違うため、現実世界<sup>三</sup>の人間<sup>次</sup>が画面上のアニメ<sup>二</sup>の世界<sup>元</sup>に干渉できないように、ありとあらゆる力の干渉を受け付けない。

使用者：如月

### 【ボックス】

指定空間に無色透明の四角形の結界を構築する。

無色透明だけじゃなく、いろいろな色にすることができてる。

強度は籠められた魔力量に比例する。

使用者：如月

## 【太陽の煉獄】

巨大な太陽が真紅の空に浮かび、辺り一面炎やマグマだらけという灼熱地獄の世界を展開する固有結界魔法。

空に浮かぶ巨大太陽にはその熱量で敵を焼き殺すという役割だけでなく、騎士王の全能力を底上げし、その上再生能力や騎士王に太陽の性質付与などすら与える役割を持つ。

さらにそれらによる熱エネルギーには太陽が持つオカルト的な力も多分に含まれるため、科学の力だけで防ぐことは困難。

騎士王が調節すればその役割の on、off も可能。

騎士王と本物の太陽の騎士以外は使用することはできない。

使用者：騎士王

## 【陣術】

## 【チェイン・エクस्पロージョン】

自信の手元に展開した爆裂性魔法陣を高密度の魔力を纏った拳を叩きつけることによつて起爆し、起爆源の魔法陣に連なるように展開していた爆裂性魔法陣を伝って対象の周囲に展開していた大量の爆裂性魔法陣を連鎖爆発させる術。



連鎖するばするほど威力が上がる。

使用者：如月

【時空魔法】

【ゲート】

点と点を一本の線で結び、繋げる時空魔法。

簡単に言えば座標Aと座標Bをワームホールで繋ぎ、そこを通過して移動することができるというもの。

使用者：如月、リリス

【テレポート】

指定物を座標Aから座標Bへ転移させる時空魔法。

転移時にヒュン！と風を切るような音がする。

最大重量10tまで転移可能。

転移先に物がある場合はそれを押しつけて転移される。

使用者：如月

【アリート】

青い膜で範囲指定をして、その内側のモノを消滅させる時空魔法。

単純な形状だけでなく複雑な形状でも展開できる。

使用者：如月

【カンナギ神薙】

大気を薙刀を持つようにして掴み、そのまま薙ぎ払うことで触れたもの全てを消滅させる斬撃を発生させる時空魔法。

さらに、空間が消滅することで真空状態になった影響で、たとえ避けられたとしても引き寄せられ、斬撃の影響で発生した空間断層に巻き込まれて碎かれる。

使用者：如月

【召喚】

野生にいる魔物や精霊界の精霊をテイム又は契約し、使役する魔法。

魔物や精霊だけでなく人を召喚することもできる。

召喚された者は殺されても死なずに術者の固有空間内に戻るだけ。

しかし殺されるとそれから24時間使用不可能となる。

ただし、召喚したのが人である場合は、召喚体として正式契約していない限り上記の通りにはいかず、そのまま死ぬ。

召喚獣の身体の一部のみを召喚する部分召喚というものも存在する。

使用者：如月、リリス

【無属性魔法】

【スリープ】

対象を深い眠りへと誘う無属性魔法。

脳に直接作用するので幻想殺しでも防ぐことはできない。

幻想殺しの場合には眠る前に頭に触れると打ち消すことができる。

使用者：如月

【フィジカルスベック】

身体能力を強化する魔法。

最大で通常時の3〜5倍まで上昇可能。

魔力量や魔力適性により個人差がある。

【フィジカルグレード】

身体強度を上昇させる魔法。

最大で通常時の2〜3倍。

魔力量や魔力適性により個人差がある。

【精神魔法】

【ミスディレクション】

指定した事柄に意識がいかないように他の事柄へと誘導する精神魔法。  
頭に触れない限り幻想殺しの打ち消しは意味をなさない。

使用者：如月

【魔力操作技術】

〔サーチ〕

魔力操作技術の一種。

魔力を探知したい方向へ放出し、自身と接続状態にある魔力が当たった際に生じる特有の異物感によって地形を把握することができる。

しかしその性質上、魔術師や魔法、魔術を使う不純物には魔力の出処を逆探知されるというリスクもある。

使用者：如月

【特殊属性魔法】 複数の属性を合成することでできる魔法

【夜空の煌めき】

光と闇の属性を合成することで発動することが可能な特殊属性魔法の一つである宇宙魔法の一つ。

夜空に輝く星々の光を無数の光弾として射出する。

その威力は最大で光弾一発で小隕石クラスの破壊力を持つ。  
使用者：垣根

『ユニークスキル』 一個人のみが使える能力

【参照】

全世界線に存在する、もしくはわ存在した全騎士の能力を行使する騎士王のみが使える固有魔法。

同時に複数の能力を使用可能だが、参照した能力は最大3分で効果が切れて使用不可になり、24時を過ぎるとまた使用可能になる。

使用者：騎士王

【ヨハネの黙示録第一の騎士】

騎士王が参照した能力の一つ。

周囲にあるありとあらゆるものを射出することができる。

大地を土槍として射出したり空気を弾丸のように射出することを始め、宇宙空間にある隕石までも射出可能。

## 【ヨハネの黙示録第二の騎士】

騎士王が参照した能力の一つ。

未元物質さえも焼き尽くす破壊の炎を操る。

竜の息吹きさえも焼き尽くすことができる。

## 【ヨハネの黙示録第三の騎士】

騎士王が参照した能力の一つ。

目視したものを制限する能力。

小隕石ほどの威力のある光弾の雨でさえ、その威力を制限することで無力化することが可能。

## 【ヨハネの黙示録第四の騎士】

騎士王が参照した能力の一つ。

死の霧を操り、それに触れたありとあらゆるモノに死を与える。

霧が触れたからと言って、その他の部分まで侵食されるわけではなく、その触れた箇所のみが死滅する。

## 【太陽の騎士】

騎士王が参照した能力の一つ。

その名の通り太陽を司り、その力を行使することができる。

『魔術』

【血脈の宿命】

発動者の血を飲ませることで対象と契約し、男なら8日、女なら20日間操るという術式。

さらに発動者と婚姻関係にない男の血も飲めばその者の運命を一生操ることができる。

使用者：リリス

【命の水】

水さえあればいくらかでも再生ができるが魔力の消費が激しい。

使用者：リリス

# 旧約の始まり

## 第一話 勇者、転生する

「ううん…、あれ？どこだろうこい。」

目が覚めると私は魔王城の謁見の間ではなく、綺麗な湖畔にいた。

いやいや、意味わかんないから！何その超展開!?

と、取り敢えず思い出してみよう。

—————

私達は勇者として魔族の軍勢と戦い、遂に魔王がいる魔王城謁見の間にて、魔王を倒すことに成功したのだった。

仲間の命と引き換えに。

「レイン、セレン、バツシユ。」

私…：勝ったよ。

あの魔王に…：ヒグツ…：勝ったよ。

だから…：安心して…：エグツ…：もう、この世界は…：平和だからね」



私は謁見の間で三人の遺体を抱きしめながら泣いた。

啼いて、泣いて、哭いた。

時間の感覚も忘れて泣いていると、私の意識は何時の間にかなくなっていた。

うん、なんの脈絡もないね。

ていうかそもそも魔王城からただの湖畔に至る経緯なんてあるのか？

ということとは、ここは一風変わった天国？ ってことでいいのかな？

私もかなり重傷だったし、あのまま死んじやったのかな？

それなら一応辻褄が合うし。

「いや、ここは『狭間』と呼ばれる空間だ。

世界と世界の狭間の空間とでも解釈してくれりゃあいい」

「うわっ！」

湖畔で足を湖につけてばちやばちやしながら考え事をしていると、突然私の目の前に白いスーツ姿の金髪碧眼イケメンが現れた。

こう……、パツと。

にしてもびっくりした。いきなり目の前にイケメンが出てくるなんて思わないもの。

「いきなり驚かせて済まねえな。

俺の名はトールだ。

このまま話さないと話が逸れそうだからいきなりだが話を始めるぞ。

まず、お前がここに來た理由だが、お前がさつき推測した通り怪我が原因でお前は死んだ。

で、それは俺の部下の天使のミスなんだ。お前は本来あの場で死なずに世界を救った英雄として天寿を全うするはずだったんだ。

だけど、俺の部下の天使がお前の死について書かれた書類にコーヒーを零しちゃったんだ。

その影響をモロに受けて、お前は死んだってわけだ」

ということとは、私はそのクソ天使のせいで死んじやったと。

「ねえ、そのクソ天使はどうなったの？ぶち殺したいんだけど」

私は満面の笑み（目が笑っていない）を浮かべながらイケメン神に問う。

すると、イケメン神は汗（冷や汗）をダラダラ垂らしながらも教えてくれた。

そんな暑いかな？

「あ、あいつなら俺がぶつ殺したからもう存在しねえ。悪いな」

そっか、死んだのか。

まあいいや。それよりも聞きたいことがある。

「私はどうしてここに連れてこられたの？」

普通死んだら三途の川を渡って冥界に行くものじゃないの？」

私は率直な疑問を投げかけた。

「お前をここに連れて来たのはとある世界へお詫びを兼ねて転生させるためだ」

私は首を傾げる。

「とある世界って？」

「とある魔術の禁書目録っていうライトノベルの世界だ。

正確に言えば、その世界に酷似したパラレルワールドだな。

お前にはそこで不純物イレギュラーと呼ばれる不正なルートを使って転生した危険な転生者をす

べて倒して欲しい。

あ、先に言っておくけど全ての転生者が不純物イレギュラーってわけじゃねえからな。

中には正規ルートで転生したお前みたいなのも数人いる」

「どうしてその不純物イレギュラーつてのを消さなきゃならないの？」

「今、天界では転生者をいろんな世界に送ってその生き様を見たりちよつかいを出したりするのが流行っているな。」

それ自体は特に問題はないんだが、近頃一部のバカ共が調子に乗ってバカみたいな数

の転生者を一つの世界に送り込みやがったんだ。

それも対象者の善悪の判断もせず、不正なルートまで使ってたな」

「で、そうすると世界のバランスが崩れて崩壊するからその前に転生者を消せってことだね？」

でもどうして私がそんな神様の雑用みたいなことをしなさいといけないの？」

「そうだ。察しが良くて助かる。

原則、天使や神はその世界の森羅万象に直接干渉できないんだ。

だから転生者を消すならこちらでも転生者を送り込むしか方法がないって訳なんだ。

それに、これはお前にとっても良い話だと思うぞ。

お前の本来の次転生先はムカデだったからな」

ムカデ?! 私……、世界を救った英雄なのに……。

……。ムカデになるくらいならその世界に行つて新しい人生を歩むついでに神の雑用をしたほうがいいかな。

「わかった。その世界に行くよ。

ムカデにはなりたくないし」

「そうか！なら早速転生特典を付けようと思うんだが何が欲しい？」

能力、容姿、武器なんでも良いぞ」

転生特典かあ。

身体能力は元勇者だから必要ないし、自分で言うのもなんだけど容姿には自信があるから…：そうだなあ…：。

よし！決めた！

「じゃあ特典は原作や他世界の知識と前世の能力と容姿と武器の引き継ぎと無限の金の三つで良いよ。性別はもちろんこのまま女で」

「了解だ。金については向こうの世界のお前の口座に10億振り込むからそれを引き出して使ってくれ。金が無くなってきたらまたこつちで勝手に振り込んでおくからもし金が億以上ある状態でさらに金が必要になったら言ってくれ。俺に繋がるよう念じれば俺と通信できるからよ。」

他にも何か困ったことがあったらなんでも言ってくれ。

基本お前への手助けとなる範囲ならなんでもできるからよ

あと、相手が不純物イレギュラーかどうかを見極められるようにしとくから。

じゃ、その湖に飛び込んだら転生できるからな。

楽しい転生生活を楽しんでくれ」

私はいってらっしゃいという風に手を振っているイケメン神に頑張ってくるね〜と  
言い、湖に飛び込んだ。

「行つたか……」

………頼むから不純物達イレギュラーをなんとかしてくれよ。

不純物イレギュラーはほぼ全員が単独で世界を制することができるとの力を持っている危険な存在なんだ。

お前がなんとかしてくれないと原作通りにはいかないからな。

## 第二話

## 勇者、電撃姫と模擬戦する

八月十四日

うう〜ん。ここどこ？

どうやら何処かの部屋にいるみたいだけど。

ん？何か翼を象った装飾が施された大きな箱と手紙がある。

まずは手紙から読むかな。

なになにく？

『これを読んでいるということは無事に転生出来たみたいだな。

早速だが、説明に入ろう。

その部屋はとある高校の学生寮で、上条当麻の隣の部屋だ。

角部屋から順に如月、上条当麻、土御門元春というふうな部屋順となっている。

お前の転生特典である『知識』によって既知ではあると思うが一応説明しておく、上条当麻とは『とある魔術の禁書目録』の主人公である【幻想殺し】を宿したツンツン頭の少年で、土御門元春はその友人として登場する『陰陽博士』とも呼ばれた元天才陰陽

師だ。

今は学園都市への潜入捜査の為に能力開発を受けてその莫大な力は失ったも同然だが、彼は「肉体再生」のLEVEL0だから一度や二度程度なら無理をすれば使えないことはない。

さて、話を戻そうか。

如月っていうのはこの世界でのお前の名だ。

この世界ではお前の名は発音も文字化もできないからな。

ちなみにフルネームは如月 イツキ 樹だ。

必要な物はこの手紙と一緒に置いておいた箱の中にあるから使ってくれ。

学校には夏休みが終わった9月1日から転入することになってるから、その間に家具などを買い揃えておくといい。

あと、能力名は幻想具現イマジンドラッグのLEVEL4ってことにしておいた。

能力詳細は想像した物体、現象を現実に引きずり出すって感じだ』

まさか主人公の隣の部屋とは…。

こりや十中八九巻き込まれるな。

まあ、不純物イレギュラーによる原作の崩壊を阻止する為に好都合っちゃ好都合だけだね。

取り敢えずちゃんと引き継げてるか確かに鏡見にいこつと。



私は服を全部脱いで風呂場へ向かい、そこにある全身を映せる程の大きさの鏡を見る。

そこには、しみ一つないスラツとした白く綺麗な長い足、くびれた腰、そこそこ大きな形の良い胸、アホ毛が跳ねている赤い長髪、炎のように赤い眼、整い過ぎた顔の絶世の美少女がいた。

いや、我ながら素ん晴らしい容姿だね。私が男だったら絶対惚れてるわくって危ない危ない。

もう少しで自分に惚れるところだった。ついでにシャワーでも浴びようかな。

ふう、サツパリした！

さて、そろそろ家具買いに出掛けようかな。

私は箱の中に入っていた（箱の中には制服と通帳とその暗証番号が書かれた紙とブラックカードが入っていた）とある高校の制服を着て、ポケットに財布を入れて出かけた。

私は銀行にお金を引き出しに来ていた。

取り敢えず10万程引き出したら十分かな?」と思いATMで引き出していると、突然3人組の男がトラックで銀行に突っ込んで来た。

そのせいで何人かが轢き殺されそうになっていたから私は時空魔法でその人達を安全な場所へと転移させた。

「急げ半蔵! さっさとATMかっぱらって逃げるぞ!」

「分かってる!」

半蔵と呼ばれた男と金髪のチンピラが手作り感満載の工具でATMを取り外してトラックに運びこんだ。

って私の通帳入ったままなんですけど!?

急いで取り返さない!!

私は走り去って行くトラックを追走した。

S I D E 浜面

「これでしばらくは大丈夫だな!」

俺はトラックを運転しながら二人に話しかける。

だけど、二人からは反応が返ってこなかった。

どうしたんだと二人を見てみると助手席にいるバンダナをした半蔵は空いた窓から頭を出して後ろを向き、ゴリラのような大男の駒場はルームミラーで車の後ろを見てい

た。

どうしたんだ二人とも?と悪い俺もサイドミラーで後ろを見てみるとそこにはトラックを追走してくる赤髪の美少女がいた。

つてハア!?!なんで走って車に追いつけるんだよ!?

するといきなり少女の姿が消えた。

「通帳返せ。この三下アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「「ギヤアアアアアアアアアア!!」」

怪物少女はトラックを飛び越えて前にまわってトラックをアッパーで殴り飛ばした。

トラックは縦に回転しながら地面に激突した。

ヤバイヤバイヤバイ!!早く逃げねえと何されるかわかったもんじやねえ!

俺たちは引っ繰り返ったトラックから這い出て逃げようとする。

「逃がさないぞお、この悪ガキ共」

怪物少女はいったいどんな力を使ったのか一瞬でトラックを消し去って笑顔でこちらに向かって歩み寄ってきた。

まさかこいつテレポーターか!?

いや、だとしたらあの化物じみた速さや力の説明が出来ねえ。

それにこの威圧感。逃げられる気がしねえ。

ちくせう、汗で前が霞んでボヤけやがるぜ。

「さて、お仕置きタイムだ」

S I D E 如月

「ジャツジメントですの！」

貴方を能力無断使用及び傷害罪で拘束しますの」

私が悪ガキ共をとつちめてATMから通帳を奪い返したところで常盤台中学の制服を着た中学生が決めセリフを言った。

この子は確かLEVEL4の空間移動能力者の白井黒子だっけ？

じゃ、パンダちゃんでもいいや。

ていうかいきなり風紀委員に遭遇するとか私運ないなあ。ハア。  
ジャツジメント

「まあまあ、その人は強盗を捕まえた良い人ってことでいいじゃない」

左側にあつた公園からパンダちゃんと同じ制服を着た短髪——御坂美琴ことみこつちちゃんが二人の少女と共に現れた。

片方の少女はセーラー服を着た梅の髪飾りが特徴の佐天涙子、もう片方は頭に花畑を作つた少女——初春飾利だ。

あ、みこつちちゃんがビリビリしながらこつち来た。

「それよりもあんた強そうね。私と勝負しなさい！」

お前は戦闘民族か！

みこっちゃんが喧嘩売るのでヒーローだけじゃなかったのか。

まあ、売られた喧嘩は買うけどね。

「良いよ。受けて立とうじゃない」

「ちよつと待つてくださいまし！」

能力の無断使用はダメですよ！」

「ならパンダちゃんが審判役としてついてきたらいいんじゃない？」

「誰がパンダちゃんですよ！」「じゃいくよー『ゲート』無視しないで欲しいですよ！」

私は『ゲート』で空間移動用のワームホールを作ってその中に私とみこっちゃんとパンダちゃん（無理矢理引きずり込んだ）が飛び込んだ。

「河川敷か。ベストチョイスね」

私達は第七学区某所の河川敷に来ていた。

この河川敷はみこっちゃんとヒーローが近い未来戦う（イチヤつく）場所でもある。知識掘り起こすだけでも砂糖吐きそう。

「それじゃ早速始めましょうか。」

審判役お願いね。パンダちゃん」

「もう好きにしろですの」

パンダちゃんは肩を落としながらも腕を上げた。

「……始めですの」

パンダちゃんが気の抜けた声と共に腕を振り下ろした瞬間、みこっちゃんが電撃の槍を放った。

「この程度じゃ私には傷一つつかないよ」

私は大気魔法で周囲を真空にして電撃の槍を横に逸らす。

「なッ！電撃が横に逸れた!?!」

電流は大気中より真空中の方が通り易いからね。

「じゃ、次はこっちからいかせてもらうよ」

私が地面を思いつき踏み踏むと地面が大きく砕けてその内小さい破片がみこっちゃんを襲った。

私の攻撃はそこで終わらず、『アンチ・グラビテーション』であたりを無重力状態にしてみこっちゃんと地面の大きな破片を浮かす。

そして『グラビティ・コア』でみこっちゃんを中心に莫大な重力をはたらかせてそれに引き寄せられた地面の破片で直径10m程の塊を形成し、川へと叩きつけた。

ドツボオオオオオオオントツ!!!

「お姉様!」

「安心しなよ。パンダちゃん。」

「貴女のお姉様はこの程度じゃ死なないからさ」

その瞬間、川が爆発してみこっちゃんが上がってきた。

「随分とやってくれたじゃない。」

咄嗟に土中の砂鉄で膜を張らなきや死んでたわよ」

「あはは!ごめんごめんちよつとやり過ぎた?」

「笑い事じゃないわよ!まったく。」

こうなったら私の必殺技つてのを見せてあげるわ」

そういつてみこっちゃんハスカートのポケットからコインを取り出して構える。

みこっちゃんの二つ名でもある超電磁砲レールガンを撃つつもりかな?

ならこっちゃんもそれなりのモノを用意しないとね。

「来い。ジュワユーズ」

私は虚空に右手を突っ込んでアイテムボックスこから魔王を共に倒した愛剣ー聖剣ジュワユーズ

ズを引きずり出した。

みこっちゃんが指でコインを真上に弾いて、落ちてきたところで私の方に向けて射出

した。

こちらへ向かい来る殆ど溶けて衝撃波となった超電磁砲に合わせて私は衝撃波の下から斜め上に向かつてジュワユーズを振った。

すると、ジュワユーズからでた金色の斬撃が溶けたコインと衝撃波を消し飛ばして、そのまま雲をも斬り裂いて夕焼けで紅くなった大空に消えていった。

「そこまでですのー！」

私がコインを消し飛ばした直後に制止の声がかかる。

「…そうね。はつきり言ってあんたには勝てる気が全くしないわ。」

私の超電磁砲レールガンを軽く防いだのはアンタ以外にも一人だけいるけど、そいつよりもぶっ飛んでるわねアンタの能力は」

そりゃ、これでも全世界線を破壊できる魔王をギリギリ相討った元勇者ですから。

まあでも、

「みこっちゃんも強かったよ。」

ただ、戦闘に関する応用力がまだまだかな？

今はまだそれでも良いかもしれないけど、それじゃこれから先、大切なモノを護りきることは難しいよ」

みこっちゃんは神がくれた原作知識によるとこれから先いろんな強敵と戦ったり、い



ろんな陰謀に巻き込まれるからね。

今からでも強くなるきつかけを作つとかないとね。

「ふん、言つてくれるじゃない。」

「……まあでも、確かにあんたの言う通りね。」

「ああああ！、私ももつともつと強くなるなくちや！」

「うんうん、みこつちやんならこれからもつともつと強くなるだろうから楽しみにして  
るよ。」

「あ！そうだ。」

「ねえ、みこつちやん。」

「連絡先交換しようよ！」

「いいわよ」

「よし！初連絡先ゲット！」

「ねえねえパンダちゃんも交換しようよ！」

「パンダちゃんって呼ぶなですの！」

「つと言いながらもなんだかんだで連絡先を交換したパンダちゃんであった。」

「ところで、そろそろ帰らなくていいの？」

「常盤台って門限厳しくなかったっけ？」

「あっ！」

「ああああああああああああああああああああ（ですの）  
!!!!!!」

二人とも完全に忘れてたみたいだね。

おつちよこちよいだなあ〜（笑）

さて、私もそろそろ帰ろうかな。

私は『ゲート』で現在地と家を繋いで、ワームホールに飛び込んだ。

あつ、家具買い忘れた。

……………今から買いにいくかな。

「門限を無断で過ぎるとは良い度胸だな。

当然覚悟はできているんだろうな？」

その夜、第七学区某所にある常盤台寮からグキツ！という嫌な音とともに二人の少女の断末魔が響いたという。

## 第三話 勇者、いろいろあつて暗部落ちする。

八月二十一日

河川敷でみこっちゃんとバトルした日から数日後の夜、私は暇潰しに行っていたゲムセンターから帰宅するために自宅に向かつて歩を進めていた。

すると、いきなり遠くの方がピカツと光った。

あれはみこっちゃんの電撃かな？

ということは今は絶対能力進化計画のところだったのか。

……不純物が現れるかもしれないから行ってみようかな。  
イレギュラー

私はマツハ3の速さで今夜の実験場である操車場へ向かつて走った。

操車場なう。

今、私は闇魔法『インビジュアル』で姿を隠してコンテナの上からウサギさん（一方通行）  
アクセラレーター  
とヒーロー（上条当麻）のバトルを観戦してる。

今のところ特に異常はないかなあ。

あ、ウサギさんがやられた。

と同時にヒーローも倒れちゃったな。

かなり重傷みたいだし治してあげよつと。

私は『インビジブル』を解除してコンテナの上から華麗にジャンプしてヒーローの側に着地した。

「な！なんであんたがここにいるのよ！」

着地後のカックイイポーズをキメているとみこちゃんがまるでカツアゲをする輩のように掴みかかってきた（笑）

「なんでも何も、散歩してたら轟音が聞こえたから寄つてみただけだよ。

いやあく暗部の隠蔽工作も大したことないね！こういうことに関しては素人と大差ない私でも侵入できるなんて！（まあ、態とって可能性もあるけど）」

私はヘラヘラと笑いながらみこちゃん腕を解いて、ヒーローの傷を右腕に注意して『ヒール』で治しながらそう返した。（だから右腕は傷だらけのまま）

「あんた…一体何者？」

学園都市の暗部のことを知ってるし、今思い返してみたらあんたが使ってた能力も震脚だけで地面を砕くほどの身体能力、重力操作、光輝く剣を空間から引きずり出す、金色の飛ぶ斬撃つてな風になんの共通点もなくまるで多重能力デュアルスキルみたいだったし」

なにかの拍子にヒーローの右手が頭に触れたのかな？

河川敷での戦闘の時にかけておいた “ある事柄に注意がいかなくなるようになるようになる” 精神魔法『ミステイレクション』が解けてるみたいだし。

「私はただの学園都市の闇にちよつとだけ詳しい女子高生だよ。

今風に言うならJKってとこかな？

能力はLEVEL4の幻想具現イマジンドラッグについて “想像した物体、現象を現実に取り出す” 極々平々凡々な能力だよ。

ちなみに震脚で地面を砕いたのはただの身体能力で能力は使っていないからね」

「いやいやどこが平々凡々な能力よ！そんな能力見たことも聞いたこともないしチート過ぎるでしょ！しかも身体能力も人間離れしてるし！暗部について知ってることもどうせちよつとじゃないんだろうし！

そんな奴がただの女子高生であつてたまるか!!」

とみこつちちゃんが叫んだ。

まあ、／（・・・）それは（／・・・）／置いといて、

「とこでそこにいる人。

いい加減出てきたらどう？」

と言ひ、私はヒーローの治療を続けながら右斜め後ろに視線を向けずに、瞬時に召喚

したナイフを投げつける。

音速を軽く越える速度で投げられたナイフはコンテナ群を粉々にした。

私はそこから出てきた少年に視線を向ける。

みこっちゃんは急に現れた少年に驚いていた。

「!?、あんな何者？」

私の電磁ソナーに引つかからないなんて」

「つたく、危ねえことすんなあ。」

俺は垣根帝督。

学園都市第二位の未元物質を操る超能力者だ。よろしく」

「第二位!? 一方通行の次に強い超能力者!？」

「いや、戦闘能力だけなら彼の方が強いかもしれないよ。」

いや、厄介って言った方が適当かな？

とにかくここは危ないからみこっちゃんはヒーローとシスターズを連れてさがつて」

みこっちゃんはさすがにヒーローとシスターズの一人をおいておく訳にはいかないと思つたのだろう。二人を連れておとなしく退つた。

「で、第二位が何の用？」

「偶々近くを通りがかったから寄ってみただけだ。

しっかし、この計画については前々から知っていたが…

まさか、クソツタレの第一位が無能力者に負けるとは欠片も思っただけだったな」

「第一位を倒した無能力者を殺すつもりはあるの？」

「ねえよ。俺はここに紛れ込んだクズを殺すついでに寄っただけだからな」

「と言いついていとくん（垣根）は私の斜め後方に羽を飛ばしてコンテナ群を爆破した。」

すると、そこから一人の少年がでてきた。

17歳ぐらいでシンプルな服装に身を包んだ黒髪の男の子だ。

「クソツ！しっこいんだよ!!」

もう主要人物だろうが関係ねえ！死ぬ！

ゲート・オブ・パピロン  
「王の財宝！」

少年は背後に黄金に輝く空間の歪みを発生させて、そこから数えきれないほどの膨大な量の武器を射出した。

ていとくんはその無数に降り注ぐ武器をその背から現出させた3対の翼をもって防ぐ。

だが、射出された武器はていとくんの翼を破壊し、ていとくんの肉体を貫いた。

「ハッ、こんなものか第二位！」

「こんなものか、クズ」

何時の間にか少年の背後に周り込んでいたイトくんが少年の胸を純白のドリルで貫いた。

って、どうして!?

さつきまで地面に立ってて剣やら槍やらに貫かれて死んだはずなのに!?

再度、地面に横たわるとイトくん（垣根）の死体を見ると、そこにはやはり剣や槍が突き刺さったイトくんの死体があった。

どゆこと?!

「な……んで……、死んだはずじゃ……」

「簡単なこと。そこにある死体は俺の未元物質で作られたダミーだったってことだ!」  
もうそこまで進化してたの!?

やっぱり酷似したパラレルワールドだから原作とは違うところもあるのか。

ていとくんはドリルを引き抜いた勢いそのままにドリルを瞬時に刀に変化させて背を切り裂いた。

少年は背中から大量の血を吹き出して絶命した。

戦闘が始まった瞬間みこっちゃん達を『スリープ』で眠らせて良かった。

こんなのみこっちゃんが見たら絶対イトくんに喧嘩売るだろうからね。



「そこのお前」

ていとくんが指差してきた。

って私!? 何の用だろう?

「この現場を目撃した以上、眠ってた無能力者や超電磁砲は大丈夫だろうがお前は暗部落ちするだろうな。」

その時はスクールに入れ。そうすりやできる限り力を貸してやる。

俺のせいで暗部落ちさせちまったようなもんだからな」

と言いつつ残してていとくんは透明になって何処かへ消えた。

ですよねえ〜（苦笑）

ハア、やつぱりこんな場面見ちゃったら消されるか暗部落ちするかはわからないよね。

まあ、もともとスクールに入る予定だったし良いか。

とりあえず、グッスリ眠ってる4人をカエルドクターのところに放り込んで家に帰ろうと。

私は4人を『レポート』でカエルドクターのいる病院へ送った後、家へ帰った。

家に着くと、スマートフォンが鳴った。

どうやら誰かから電話がかかってきたみたいだ。

誰からかも話の内容も大体の見当はつくけどね。

私は通話ボタン（スマートフォンのはこれはボタンと呼ぶのだろうか？）をスライドして電話に出る。

「こんばんは、如月樹さん。

私は暗部組織スクールの制御役です。

こちらにも忙しい身なので単刀直入に言わせて頂きますね。

暗部に落ちてスクールの構成員となるか、消されるか、どちらでも好きな方をお選び下さい」

「もちろん前者で。

ただどここれだけは覚えておいて」

私は少しの間を開けてこう言った。

「……私の大切なモノを傷つけようとすれば、私はどんな手を使ってでも貴方達を捻り潰すから」

私は相手の返事を聞かずに電話を切った。

さあて！ デザート食べて寝よ！

## 第四話 勇者、ヒーローの世話をする

八月二十四日

絶対能力進化実験から三日後、私はお昼時の公園を歩いていた。

すると、ツツツ頭の高校生上条当麻ことヒーローが自販機の前で騒いでいた。

「不幸だああああああ!!!」

どうしたんだろ？

…取り敢えず面白そうだし、話かけてみようかな。

「ねえ、どうしたの？」

私と話かけるとヒーローは沈んだ顔で振り返って話し始めた。

「実はこの自販機に金を飲み込まれたんだよ」

「幾らほど？」

「……諭吉さんが一人」

ププッ！

まさか一万円も飲み込まれたなんて、どれだけ不幸体質なんだか。

「笑うな、笑つちやダメ、笑わないでください三段活用！」

「いや、できてないし。」

「そうだなあ、あまりにも可哀想だからなんか奢つてあげるよ。」

「ちようどお昼時だしどつか食べに行く？」

「いやいや、さすがに初対面のそれも女の子に奢ってもらうというのは男の子として情けないというかいけないというか…。」

「それにそんなことされてもなんのお返しもできないし」

「でもお金ないんですよ。」

大丈夫、こう見えて私はお金持ちだからご飯代ぐらいどうつてことないよ。

それにお返しが欲しくてしてる訳じゃないしね」

「いや、でも…」

「人の善意は潔く受け取るものだよ。」

ほら、行こー！」

私が有無を言わず、言い淀んでいたヒーローの手を握つて引つ張つて行くと、後ろ

で「この幸運は一体どんな不幸の前触れなんだあああ!？」っていう声が聞こえた。

いくら不幸体質だって言つても気にし過ぎでしよ。

ところ変わって私達はファミレスに来ていた。

前世にはファミレスなんてなかったからファミレスについては知識しかなくて実際に来たことはなかったんだよねえ。

ああ、涼しいい。

私達は店員に案内された席でメニューを見ていた。

ちなみに私が通路側でヒーローが窓際に座っている。

「どれにする？」

遠慮せずバンバン頼んでいいよ」

「そう言われてもな。うーん、じゃ俺はこのおろし大根の和風ハンバーグとアイスコー

ヒーにしようかな」

「じゃ、店員呼ぶね」

私は呼び鈴を鳴らして店員を呼んだ。

すると、数秒してから店員が来た。

「おろし大根の和風ハンバーグAセット一つとロイヤルステーキAセット一つとアイスコーヒーとオレンジジュースください」

「畏まりました。少々お待ちください」

と言い、店員は去っていった。

向かいの席に座るヒーローの方へ視線を戻すとそこには顔が青褪めたヒーローがいた。

なんで顔面蒼白？

「どうしたの？」

「ど、どうしたもこうしたもありませんかのことよ!？」

さつき頼んでたロイヤルステークって一つ一万五千円もするファミレスのメニューとは思えない超ぼったくりステーキなんだぞ!？」

そう言われても……。

私の現全財産10億だから、そんなに？」って感じなんだよねえ。

「言ったでしょ。お金なら腐る程持つてるって。」

それに、値段が高ければ高い程満足度も高いって相場が決まってるしね」

「確かにそうだけど普通1万五千円もの大金をポンつと出すか？」

もしかしてお前って高位能力者？

制服からして俺と同じ高校みたいだけど。」

「まあ、高位能力者って言えば高位能力者なのかなあ。」

私の能力はLEVEL4の幻想具現。イマジンドラッグ

頭の中で想像した物体、現象を現実に引きずり出す能力だよ。

ちなみに高校は君と同じで、夏休み明けに登校する予定」

まあ、能力に関する情報は魔法を隠すためのダミーだから本当は能力者ではないんだけどね。

どっちかっていうと魔術サイドなのかなあ？私って。

「君の能力は？」

「俺はLEVEL0の幻想殺しだ。」

異能の力ならたとえ神の奇跡だろうと打ち消すって能力だ。

この能力のせいで上条さんはいっつも不幸なんですよねえ」

とヒーローは渴いた笑い声を上げ、不幸だつと小さく息を吐くように言った。

そこで店員が料理を運んで来た。

ヒーローは運ばれてきたハンバーグを前にして目を輝かせている。

この様子じゃあずいぶんと長い間肉料理を食べてなかったんだらうなあ。

ホント、不憫だね。

「おお、久し振りの肉だ！

では、有難く戴かせて頂きます！」

私達は手を合わせて頂きますつと言い、食べ始めた。

数十分後、料理を食べ終えた私達はまだ自己紹介をしていなかったことに気づいたの

で、互いに自己紹介を始めた。

ホント今更だよね。

「俺は上条 当麻だ。よろしく」

「私は如月 樹。よろしく、ヒーロー」

「えっ、なんでヒーロー？」

「……秘密だよ（——）——☆」

私は可愛くウインクしてごまかした。

ふいー危ない危ない。

もうちよつとで私の原作知識がバレるところだった。

神様にはバラすなどは言われてないけど、こういうのは秘密にするものだって相場が決まってるもんね。

今度からはみこつちちゃんとバトツた時みたいに精神魔法で注意が向かないようにしないかね。

聞かれたらボロ出ちやいそうだし。

それにアレイスターが滞空回線アンダーラインで見てる中で未来のことを知ってるからでえす☆なんて言えないしね。

それにしても、さつきよりヒーローの顔が赤くなってる気がするけど、やっぱりファ



ミレスの中といえど男の子にしたら暑いのかなあ？

それとも私の魅力に落ちたか？ムフフフフ♪

……つてないか、あの鈍感ヒーローだもんね。

「顔赤いけど大丈夫？」

「えっ、ああ、大丈夫大丈夫。」

問題ありませんのことですよ。

ハハ、ハハハハ」

もの凄くぎこちない笑い声だね。

まあ、大丈夫なら良いんだけど。

本当に大丈夫なのかな？

……ん？なんだろうあの白いの？

「ねえ、ヒーロー。」

あれヒーローの知り合い？」

ヒーローが私が指差した方を向くと一気に顔をひきつらせた。

そこには女の子がしてはいけないような表情をした白い修道服を身に纏った少女が鬼気迫る表情で涎を垂らしながらファミレスの窓ガラスにへばりついていていた。

ああ、そう言えばあれって大罪シスターことインデックスか。

シスターなのに暴食、怠惰、嫉妬、憤怒、の4つもの大罪を犯したことで有名なうん、お前本当にシスター？

とか考えていると何時の間にか大罪シスターはファミレスの中へ入って来て、ヒーローの横に座ってヒーローに『当麻はどうしていつもいつも気がついたら可愛い娘と一緒にいるのかな!』とか『一人だけお肉を食べてるだなんて許せないだよ!』などと文句を言っていた。

「で、その娘は一体何者？」

「こいつは俺のところに居候してるイギリス清教のシスター、インデックスだ。

…ああ、イギリス清教とか言ってもわかんないか。

まあ、細かいことは気にしないでくれると助かる。

そして唐突だが今現在上条さんには財布にも銀行にもお金がなく、全財産28円です。

そして、次の奨学金が入るのは約1週間後です」

と、一旦区切り、ヒーローは突然席を立てて勢い良くジャパニーズDO☆GE☆ZAをした。

おおお、これがジャパニーズDO☆GE☆ZAか！

生で見れるとは思わなかったな。

と、私が謎の感涙をしていると、ヒーローは、

「ド厚かましいことこの上ないですが、どうかこの上条めに食べ物を恵んでください！

お願いします!!」

もうね……。なんとというか……。不憫だね……。

「ヒソヒソ（ねえねえみんな見て。あそこの席のカップル女王様プレイなんてしてるとて訳よ）」

「ヒソヒソ（若さ故の超過ちというやつですね）」

「ヒソヒソ（というか彼女さんはすごく可愛いのにどうして彼氏さんはイケてないのかしら）」

「ヒソヒソ（結局あんなの遊びに決まってるって訳よ。

たぶん本命はすっごいイケメンね!）」

「ヒソヒソ（だよね、釣り合ってるないしww）」

「ヒソヒソ（私はそんな報われない彼氏さんを応援してる）」

ヒーローが不憫過ぎて泣けてくるね。

ていうか周りからの視線という名のデスビームが痛い!!

「わかったから早く顔上げて！」

これじゃ私が女王様プレイしてるみたいでしょ!!」

「ありがたきあわせでございばす」

と、涙ボロボロ状態で席に戻った。

「ていうか急にどうしたの？」

大罪シスターが来た途端あんなったけど」

大罪シスターじゃないんだよ!!

と言う戯言が聞こえたが無視する。

七つの大罪の内の怠惰、暴食、嫉妬、憤怒の4つを犯してるシスターを大罪シスター

と呼ぶしてなんと呼ぶ!!

「いや、こいつの顔見た瞬間現実に戻されたっていうか、お金がない現実を突きつけられ

たっていうか……不幸だ」

成る程、そう言うことだったのか。

現実に戻されたっていうことは私との時間は幻想みたいだったってことなのか？

それはまあ、嬉しいかな。

「それよりもご飯くると嬉しいな」

「ハイハイ、好きなのいくらでも頼んでいいよ」

「ホント!? ありがとうなんだよ赤髪!」

「私の名前は赤髪じゃなくて如月 樹ね」

私はそれからすぐに、先ほどの発言がどれほど愚かで浅はかな発言だったかを思い知った。

なぜなら、ファミレスに嵐が訪れたからだ。

インデックスは食べながらもさらにどんどん注文していつて店員はあっちへ行つてこつちへ行つての大忙し。

厨房では大量の皿洗い、調理で大忙し。

お金なら全然大丈夫だけど、私は決めた。

店員の為にも、もうこんな愚かなる発言は決してしないと……。

「お会計39万9847円となります」

店員が若干引きつった営業スマイルでそう告げる。

あんなことがあったにも関わらず若干引きつりながらも営業スマイルを浮かべるその精神……感服するよ。

勇者である私ですら無理だもん。

私は財布からブラックカードを取り出してそれで払った。(その際ヒーローが横で『ぶぶぶブラックカード!? ヒエエエエ!!』とかいろいろ騒いでいたが無視した)

そしてこの時、私の中で『大罪シスター』でできる限り関わらない』という鉄則ができた。

ファミレスから出た後の会話の流れで自宅が隣同士だと分かった私達は一緒に帰宅していた。

そして、これまた会話の流れで夏休みの宿題を手伝うことになった。

ヒーローは一体どれだけ私にお世話させる気だ？

## 第五話

## 勇者、デートする。

八月二十八日

私が暗部落ちしてから一週間が経ち、この一週間で私は既に十数回暗部の任務を終えている。

ちなみに上条家でご飯を作るのはあれから3日で終わった。

理由は学園都市から『お前が第一位ぶつ飛ばしたせいで騒ぎが起きて危ねえから旅行にでも行つてろ』的な事を言われて強制的に外部へ旅行に行かされたからだ。

そして、私は暗部の仕事でいとくんとのお合同任務になることが多いので大事な親友と呼べるほどに仲が良くなった。(最初は暗部組織に馴れ合いはいらねえんだよクソツタレとか言ってたけどプライベートでもいろいろ付き纏つてたら心を開いてくれまたまる)

八月二十八日の今日は朝っぱらからスクールの制御役から『第七学区某所にある廃ビルにて、大規模なテロ計画を練っているスキルアウトを消してください』と任務の連絡がきて第七学区某所にある廃ビルの前に来ていた。

今回は私だけの単独任務だ。

ここは入り組んだ路地裏を進んだ先にあり、周りには人っ子一人いない。

まあ、スクールの下部組織の連中が人払いをしたってのもあるけど。

とりあえずちやつちやと終わらせませるか！

「範囲指定『廃ビル』」

私が右手を空中で左から右へスライドさせると廃ビルが長方形の青色の結界に囲われた。

「『デリート』」

私が指をパチンツ！と鳴らしたのを合図に廃ビルは中にいた武装無能力集団スエキルアウトもろとも跡形もなく消滅した。

「お仕事しゅウりよオっと♪」

「お前の能力は相変わらず出鱈目だな」

私が絶対能力進化実験第9982次実験の時一方通行がやっていたもののモノマネをしていると背後の曲がり角からいとくんがやってきた。

つかあんたの能力も充分出鱈目でしょうが。

「どうしたの？今日は私だけの単独任務だったと思うけど。」

まさかこれから二人で合同任務に行きまーす？なんて言わないよね」



私が食蜂操祈のモノマネをしながらそう言うのと、ていとくんはニヤツと笑って言う。  
あ、なんだろう何だか嫌な予感がする。

「察しが良いな。これから直ぐつてわけじゃねえが今夜9時頃から妹達にちよつかいを  
出そうと画策してやがる研究所の破壊とその研究所で実験動物モルモットにされてるガキ共を助  
けに向かうから準備しとけよ」

……ハア。

妹達のためなら仕方ないか。

彼女達はただでさえ過酷な運命の元生きてるんだから余計な障害は少しでも多く取  
り除いてあげたいからね。

なにより、友達の危機を黙って見過ごすほど私は薄情ではないつもりだしね。  
実験動物モルモットにされてる子供達も放っておく訳にはいかないし。

でもだからといって不満がないと言ったら嘘になる。

9時からドラマを見ようと思つてたのに…。

よし！この憂さはていとくんを荷物持ちにすることで晴らそう！

「じゃ9時まで私に付き合つてもらおうからね」

「は？突き合う？お前…何急に下ネタ言つて」

ていとくんがくだらない戯言を吐き切る前に私は両拳に高密度な魔力を一瞬だけ

纏つてその一瞬で全てを終わらせた。

ていとくんは体の痛めてもさして支障のない箇所を全て感覚的にはほぼ同時に殴られて吹き飛び、壁に減り込んだ。

「ちよつと…した…冗談…だったのに…」

ていとくんは壁に減り込んだまま気絶した。

とりあえず叩き起こして連れて行こうつと。

私はていとくんを壁から出して、そのまま襟首をつかんで引きずりながらセブンスミストへと向かった。

「なんで俺がこんなことをしなきゃなんねえんだよ」

「いろいろ理由はあるけど…、まあ…しいて言うならていとくんしか荷物持ちになつてくれるような人がいないからかな」

私とていとくんは今セブンスミストでショッピングをしていた。

ていとくんは能力を使って正方形の純白の車輪付きケースを創つて、そこに今まで買った大量の荷物を入れてケースに付いている紐を引っ張りながら私の横に並んで歩いている。

その表情はどこか疲れ気味だけど楽しんでるような気がする。

疲れてなんだかんだけ言いながらもついてきてくれるていとくんは本当に優しいね。

こんなこと恥ずかしくて本人には絶対言えないけど。

「まあ、いつものことだし良いけどよ。」

「ていうかお前って俺以外に友達いねえの？」

「友達ぐらいたあくさんいますよ」

「言ってみろよ」

「ていとくんのくせに信じやがらないとは生意気な！」

「良いよ言ってみろよ！」

ヒーローに青<sup>シスコン軍曹</sup>に土御門にみこっちゃんに白井<sup>パンダ</sup>に妹達<sup>シスターズ</sup>にていとくん！

ほら！総勢9974人も友達がいるよ！」

私は両手を腰に添えて胸を張って威張った。

「妹達つってもお前の知り合いの妹達は4人しかいねえから実質俺含めて10人しかい

ねえじゃねえか」

「( ; ; ; ) ウツ」

そういうのはさ、分かってもさ、黙っておくものじゃないのかな？

ていとくんだって友達少ないくせに。

「そう言うていとくんだったて友達少ないでしょ？」

「まあ、確かにそうだな。お前と上条と土御門と心理定規ぐらいだな」

「(・、ω・) ドヤア」

「勝ったつてドヤ顔すんのは良いけどお前がやっても可愛いだけぞ」

「なに？口説いてるの？やゝらしゝ」

なっ!!か、かか可愛いつて。

ううゝ嬉しいけど恥ずかしい。

「そういう割には嬉しそうな顔してるけどな。

顔、ニヤついてんぞ」

ていとくんが私の顔を笑いながら指差した。

私は慌てて顔に手をやった。

うにやつ!?!顔に出てた!?

「ニヤついてなんかないんだから！」

私は嬉しくてニヤついてる顔をていとくんに見られるのが恥ずかしかったから見られないように走った。

すると、噴水のある広場にあつたオシャレなアクセサリーショップであるものを見つけた。

あー！これ良さそう！

「はいー！いとくんにプレゼント♪」

私は店内に入ってショーウィンドウの中にあつた太陽を象つたネックレスと月を象つたネックレスを即購入した後店を出て、店の外にあつた噴水近くのベンチに座つて待つていたいとくんに先程買った二つのネックレスの内、月の方をプレゼントした。

「これらは俗に言うペアネックレスというものだ。

「なんで俺なんだ？」

「そういうのつて恋人同士とか仲のいい女友達とでやるもんじゃないのか？」

「う、うん、…そうだけど。」

「その…、今日のはていとくんの誕生日でしょ？」

「だからその…、えーと…これは大事な親友への誕生日プレゼントつてことで！」

「……受け取つてくれる？」

私が両掌の上に乗せたネックレスを差し出しながら「いとくんを見つめるといとくんは耳まで真っ赤にしながらかも受け取つてくれた。」

「仕方ねえから受け取つてやるよ。」

でもなんで俺の誕生日が今日だって知ってたんだ？

「教えた覚えはねえんだが」

「一週間前の始めて会った時に能力を使って調べたのだ！えっへん！」

「そおかよ。もうお前のチート加減に慣れてきてる自分が恐ろしいわ」

「ねえ、嬉しい？」

「もちろん、嬉しいに決まってる。ありがとうな、樹」

と言っていていくくんは私の頭を優しく撫でてくれた。

「えへへ、おめでどう、ていとくん」

などと話しているうちに時刻は既に8時59分、任務開始時刻まで一分を切っていた。

だが二人にとってこれはいつも通りなのだ。

任務開始時刻ギリギリまでなんだかんだ言いつつ二人で遊び、そして『ゲート』で目的の地まで移動する。

他の暗部組織からしたら異常の一言と共に目を剥くだろう。

実際垣根自身も最初はあきれていたほどだ。

だが、近頃はこの表の世界を如月と共に満喫するのも悪くないと考えていた。

それは二人の関係性が大きく影響しているのだろう。

如月が垣根をその明るい性格で照らし、それによつて垣根は暗い闇の中から救い出され、自身も光となることができた。

そういう意味では二人は月と太陽の關係に本当に良く似ていた。

そして二人はいつも通りに『ゲート』で研究所まで移動した。

# 間話 1 垣根、照らし出された新たな道を行く。

8月26日

SIDE垣根

ここ最近、俺はある人物に付き纏われている。

そいつの名は如月 樹。スクールの正規構成員の一人だ。

まるで二次元の世界から飛び出してきたかのような整い過ぎた顔と炎のように鮮やかで流麗な赤髪が特徴で俺と同等かそれ以上の応用性を持つ能力者だ。

別に誰かに付き纏われること自体はたいして問題じゃねえ。

問題なのは俺だけでも目立つような容姿をしていて注目されがちなのにこいつが一緒にいるせいでその視線が通常の二倍にも三倍にもなりやがることともう一つ……こいつの性格だ。

こいつは裏の住人になりたてとはいえ裏の住人には変わりねえ。

なのにこいつはまるで表の奴等みてえに接してきて、暗部の間には必要のない馴れ合いを積極的にしやがる。



馴れ合いなんぞしても、既に少なからず人を殺した俺たちは表の世界で生きることができねえつてのによ。

なのに何でこいつは俺に付き纏う？ そんなことぐらい暗部落ちして日が浅いこいつでも分かっているはずだ。

にも拘らずこいつは今も俺に付き纏って俺の横を太陽みたいな笑顔で歩いている。

「……何でお前はそんな風に、表の世界の人間みたいに笑えるんだ？」

暗部落ちして日が浅いといつてもお前も既に少なからず人を殺してるだろ。なのにどうしてそんな風に振る舞える？」

俺がそういうと、こいつは太陽の光のように優しく、朗らかに微笑んで、当たり前のこと子供に言い聞かせるように言った。

「それはていとくと一緒にいるのがすっごく楽しいからだよ！」

一緒に散歩して、一緒にクレープ食べて、一緒にファミレスで駄弁って、そんななんでもない日常が堪らなく楽しいからだよ！

そこに表の人間だの裏の人間だのは関係ない。

別に今までしてきたことを忘れてのうのうと生きろって言ってるんじゃないよ。

今までしてきたことを忘れず胸に刻み込んで、その十字架を一生背負いながら生きる。

そして困っている人がいたら迷わず助ける。

「……俺は過去にそうやって他人と積極的に関わって、その関わった奴等全員を地獄の底に叩き落としたことがある。」

原因は多種多様だ。

俺の能力の暴走に巻き込まれたり、大切なモノを失った時パーソナルリアリティ自分だけの現実になんか影響が出て、能力にはどのような変化が見られるのかっていう暗部のクソつたれな実験の生贄にされたり、俺に精神的ダメージを与えるためにスキルアウトの連中に散々弄ばれた挙句殺されたり、本当にいろいろある。

……これまでの罪をどれだけ償ったって俺に関わる奴等がこうなるって事実はなににも変わらねえ。

だから……」

「なら、今よりももつともつといろんな意味で強くなれば良い。」

自分の大切なモノ全てを護りきれるほどの強さを、誰かに頼ることのできる強さを、仲間を心の底から信頼して背中を預けることができる強さを、手に入れればいい。

少なくとも、私はどんなことがあっても、ずっとずっといとくんの味方でい続けるよ。

それにさ……」

如月は小走りで俺を追い抜いて俺の前で振り返った。

そうして見えた表情は、表の人間よりも輝いた笑顔だった。

「こうやって笑顔の方が自分も周りの人達も気持ちが良いでしょ！」

少なくともそうやって仏頂面でいるよりは良いと思うよ！」

と言い、如月は俺の口端を指で左右に引き伸ばした。

「ほらっ！ニッコツって！」

……確かに、こいつの言うとおりかもしれないな。

俺は怖がって逃げてただけだ。

罪を背負いながら生きることから、他人から様々な感情を向けられることから、人と

接することで、傷つけてしまうことから……。

でもそれじゃだめだってことをたった今こいつに教えられた。

だから俺はもう二度と逃げるなんて無様な真似はしねえ。

これからはこいつみたいにカッコ良く生きてやろうじゃねえか。

なにより、こいつにはもう俺のカッコ悪い姿は見たくねえしな。

俺はフツと微かに笑んで思いつき両頬を引っ張ってやった。

すると樹は俺の口端につけていた両手を離してその手で両頬を引っ張る手をタップ

した。

「いふあい！いふあいおへいほくん！」

俺は頬から手を離して、右手で頭を撫でながら言った。

「お前の言うとおり、表の人間らしく生きるのも悪くねえかもしれねえな」

俺はその時、今までで最高の笑みを浮かべていただろう。

笑うことで狭まった視界には、微かに頬を赤く染めた大事な仲間がいた。

## 第六話 垣根、不純物と初戦闘する

私達は研究所に着いてからそれぞれ別行動で任務に当たっていた。

私は研究所に結界を張って外部との通信の切断及び逃走経路の封鎖をした後表口から研究所を襲撃してこちらに注意を引き、それによって警備が薄くなったところできいとくんが裏口から侵入してこの研究所の地下で実験体にされている置き去りチャイルドエラーを救出するって手筈となっている。

これは捕われている子供達を安全に救出するために考えた策だ。

そして、私はついさつき結界を張り終え、今から研究所に襲撃を仕掛けるところだ。

「さて、私は注意を引かないといけないし、特大級のを喰らわせますか！一置き去り《チャイルドエラー》は研究所の地下深くにいるみたいだから遠慮はいらないし！」

私は研究所の上空10 m付近で右腕を真上に上げて詠唱を始めた。

「世界を照らす始まりの炎よ。

その大いなる聖火は恵みを齎す反面災厄をも齎す。

それはこの星の生命を誕生させ、育んできた始まりの炎であり、この世のありとあらゆるものを燃やし尽くし、灰塵と化す終わりの炎でもある。

終末の炎よ、今ここに顕現し、その大炎をもつて敵を焼き尽くせ!!

『デフェールフラム』!!』

詠唱開始と共に私の掌の上に炎球が生まれ、それは詠唱が進むにつれて大きくなり、詠唱が終わる頃には直径10mの大きさにまで膨れ上がっていた。

周囲はそれが発する膨大な光によりまるで真昼かのように明るくなっており、地上にある草木がチリチリと焦げていた。

私は上げていた右腕を研究所の方へと振り下ろしてその小さな太陽を研究所の表口へと落とした。

大炎球はそのまま重力にしたがって研究所に着弾し、その莫大なエネルギーを解放した。

瞬間、辺りは光に飲み込まれ、それだけでも破壊兵器となり得る程の音の衝撃波が後から襲ってきた。

着弾地点にあつたものは全て例外なくその超高温で蒸発し、爆風による土煙すらその超高温の熱波により焼失していた。

研究所地上部の3分の2が焼失し、残ったのは熱風によりとところどころ溶け、音の衝撃で崩れたりしている瓦礫の山と、融解し、ドロドロになった研究所だったものだけだ。

「ちよいとやり過ぎたかな……(苦笑)」

私は研究所地上部のあまりの惨状に乾いた笑い声を上げた。

とそこで耳に付けている通信機からいとくんの声がノイズ混じりに聞こえた。

『ジ……ジジ……研究所が崩落しない程度でやれ!!ジ……のバカが!!』

だいぶお怒りのようである(笑)

と、おふぎはこれぐらいにして私も地上に出てきたここを護っている暗部組織の相手をしないかね。

情報通りなら彼等は暗部組織『フレイム』っていう木原数多率いる『ハウンドドッグ猟犬部隊』みたいな体系らしいね。

総数は100人で武器は刀や銃か。

ま、この程度なら直ぐ終わるかな。

SIDE垣根

まったく、あのバカは加減って言葉を知らねえのか？

さっきの炎球の衝撃のせいで研究所が崩落すると思っただぞ。

まあ良い。陽動としてはちゃんと役割を果たしたみたいだし、あの攻撃じゃあ地上部にいた研究者も殲滅できただろうしな。

俺もさっさと地下に收容されているガキ共を助けるとするか。

俺は壁と天井のところどころに罅が入った地下階段を下りて行った。

確かガキ共は地下7階に収容されてんだっただか。

俺は地下7階へ向かい、未元物質でグミのような素材を作って靴の裏を覆い、音が鳴らないようにして階段を駆け下りていた。

そして地下5階に下りてきたところで唐突に壁が吹き飛んだ。

飛んできた爆風や瓦礫は未元物質で防ぐことができたが、階段は瓦礫で埋まり、通行不能となっていた。

まあ、敵に見つかった以上コソコソと階段で地下へ行く必要はなくなったんだが。

「学園都市第二位垣根帝督、悪いがここで死んでもらうぞ」

壁が吹き飛んだ時に舞った土煙の向こうから人影と共に声が聞こえてきた。

瞬間、人影の方を向いていた俺の背を途轍もない衝撃が襲い、土煙の中にある人影の方へと吹き飛ばされる。

「ガハッ！（俺に気づかれずに背後に忍び寄っただど!」

いや、それよりもなんで常時展開してる未元物質のシールドを突き破ることができたんだ!?

あれは通常の物理法則による攻撃ではそれこそ第一位ぐらいじゃねえと突破できない物だぞ!（



「そんなものか？未元物質!!」

土煙の中にいた男が拳で殴りかかってくる。

俺はそれを背に展開した三対の未元物質の翼で防ぐが、またも突破され、男の放った拳は未元物質の翼を殴り砕いて俺の腹へ直撃した。

「ゴハッ!」

男はそのまま俺の横腹へ回し蹴りを極めて吹き飛ばす。

俺は翼をはばたかせて態勢を立て直し、地面に着地する。

そして、土煙の中から二人の男が現れた。

片方の男は忍者の格好をした男でもう片方は軍人の格好をした男だった。

こいつらの攻撃の雰囲気は以前操車場で戦った奴と同じだ。

樹が言うには不純物イレギュラーとか云う特別な力を持った異世界からの転生者だったか。

たくっ! 厄介な奴等が出てきやがって!!

「拍子抜けだな。資料ではもう少しやりごたえのある奴だと思ったんだがな。

所詮戦場のことを知らないただの子供ということか」

軍人は俺を見下すような目で見てきた。

ちっ! 舐めやがって!

「ハッ、そんなにやりごたえが欲しいってんならお望み通り全力で潰してやるよ」

俺は一对の翼を敵に向かって高速で打ちつける。

それは20階建てのマンションを縦に粉碎するほどの威力だ。

だが敵はそれを拳で殴り碎き、その隙を狙ってもう一人の男が忍者のような走り方で高速接近する。

俺は翼を再構成する暇も無く迫ってきた男に向かって残りの翼全てを刃状にして忍者を切り裂くが、切り裂いた忍者は氷塊へと姿を変えると同時に忍者を切り裂いた翼は凍りついて粉々に粉碎された。

「終わりだ」

前からは軍人が黒くなった拳で、背後からは回り込んだ忍者が掌に小さな台風のような球体状のエネルギーを発生させて襲いかかってくる。

……計算通り。

二人は突如床から突き出した純白の槍に貫かれた。

忍者は純白の槍が胸に刺さって即死だったが、軍人は腹に刺さったお陰で即死にはならなかった。

大方、槍が突き出した瞬間回避しようとした結果だろう

まあ、それでも死ぬのは時間の問題だろうが。

「ガハッ！何故……だ……」

俺は見聞色の覇気で周囲を警戒していた。

なのに……何故……俺に気づかれずに……罘……を……仕掛けることができたんだ？」  
「簡単なことだ。」

お前の使う力を解析して、その力を未元物質で阻害して無効果しただけだ。  
そしたら後は簡単。

罘を仕掛けてお前等がその位置に来るように誘導するだけだからな」  
軍人はまるで化物でも見るような目で俺を見て、驚愕の表情を浮かべた。

「そんなことは……不可能……だ。」

あの高速戦闘中に……瞬時に……未知の力を解析し……罘を仕掛けるなど……人間の……演算速度で……できるわけがない！」

「それができるからお前は今そうなってるんだろ？」

拍子抜けだな。最初はもう少しやりごたえのある奴だと思ったんだが。

所詮超能力者<sup>化物</sup>のことを知らないただの無知な子供ということか」

俺はそう言って背に展開した三対の翼で切り裂いて止めを刺した。

「さて、敵は潰したし、床をぶち破って一気に7階まで行くとするか」

俺は未元物質で地下7階まで床を分解して直通の穴を開けてそこから地下7階まで飛び降りた。

地下7階はこれまでの研究所らしい造りではなく、何もかもが分厚い特殊合金製で収容所のような造りだった。

「さて、どんどん開放していくか」

俺が一番近くにあった扉から順に扉を未元物質で分解して開けて、中にいたガキ共を開放していく。

そして最後に残ったやけに嚴重にロックされた分厚い扉を破壊しようとしたところでさっき開放したガキ共の内の一人が服の裾を引っ張ってきた。

「どうした？」

「気をつけて。その中にいる人はここに来た『木原』って人に改造されてもともと強かった力をもっと強いものになっちゃってるから。」

暴走したらあなたでも危ないかも」

「…………『木原』……か……」

一応未元物質の膜で全身を覆つとくか。

俺は分厚い扉を原子レベルで分解して中へ入った。

そこには研究者がDNAの流出を防ぐ為髪を切らせずにいたのか、長く無造作に伸びた黒髪で目元が隠れた中性的な顔立ちの少年がいた。

「…………垣根……帝督か。」

何をしに来たの？

暗部組織への勧誘？それとも抹殺命令でも下ったのか？

まあ、どちらにしろ僕には碌な未来はないな。ハハハ

俺を知ってるのか。

つうことはこいつも不純物イレギュラーか…。

そいつは全てに絶望したとでも言うような表情で感情の籠っていない笑い声を上げた。

…むかついた。

こんな表情をして諦めてるこいつも、こいつをこんな風にした環境にも。

「どっちも不正解、大外れもいいとこだ。」

俺達がここへ来たのはお前等を助けるのこの研究所を研究者ごと消し飛ばすためだ」

そう言うと、少年の眼に少しばかり光が戻った。

「本当に、本当に僕達を助けて来たの？」

「ああ」

「でも、どうしていまさらになって上は僕達を助けになんて…」

「親船最中がスクールに依頼してきたからだ。」

大方、木原に改造されたっていうお前の能力を善行に活用しようとしてもしてんだろ。それより早くここを出るぞ」

「う、うん。わかったよ」

そうして俺とガキ共（20人弱）が奇跡的にまだ生きていたエレベーターで地上へ出ると、あたりには地獄絵図が広がっていた。

地面はドロドロに溶けてマグマとなり、辺りにはクレーターが多数、そしてバカでかい高さ約10m程の氷柱が幾つか地面に突き刺さり、聳え立っていて、地上から地下5階までをぶち抜く巨大な穴まで空いていた。

「ハア、やり過ぎだ」

「にやはは、今回の敵はちよつと厄介だったから一掃するために広範囲殲滅型の技を使ったからね」

右を見ると、樹がいた。

その姿は体に傷こそないものの、服はところどころ破れて素肌が見え、血の痕がところどころについていた。

大方、傷を負ったけど能力で治癒したってところか。

「珍しいな。お前が傷を負うなんて。

イレギュラー  
不純物でも混ぜたってたか？」

「混ぜたってたつていうか全員不純物だったね」  
イレギュラー

「どうりでこうなる訳だ」

俺は辺りの惨状を見ながら言った。

樹はそれに対して目を逸らして露骨に話のベクトルをガキ共へと変えた。

「それよりこの子達はどうするの?」

「こいつらは部屋が用意できるまでは第七学区にある冥土帰しのところへ預ける。」  
ヘンキャンセラ

ということだ。いつもの頼む」

「了解」

樹はワームホールを形成してここと冥土帰しの勤務先の病院の空間を繋げた。  
ヘンキャンセラ

「じゃあ、俺はガキ共を預けに行くから後始末は頼んだぞ」

「ええ、私が預けに行くからいとくんが後始末してよ」

「仕様がねえな。じゃあガキ共は頼んだぞ」

「まっかせなさい!さ!みんな行こっか!」

樹はガキ共と手を繋いでワームホールの中を通っていった。

さて、俺もさっさと終わらせて帰るとするか。

## 間話2 勇者、1000人の不純物と戦う

間話2 勇者、1000人の不純物と戦う

SIDE 如月

さてと、私も早く雑魚共を倒して子供達の救出に向わなくちゃね。

「悪いけど、瞬殺させてもらおうよ」

私は無数の魔法陣を辺り一帯に展開する。

「爆発は連鎖する毎にその威力を増す

『チェイン・エクスプロージョン』」

私は手近に展開させていた魔法陣を高密度の魔力を纏った拳を叩きつけて起爆させる。

するとその爆発は周囲一帯に展開していた魔法陣へ連鎖し、敵はそれによる無数の爆発に吞まれた。

「終わりっつと！」

「さあ、私も地下へ行こうつと」



「油断し過ぎじゃねえのか〜い。

お・嬢・さ・ん!」

キイイイイン!!

咄嗟に背後に展開した防御性魔法陣が刀による斬撃を防いで、辺りに甲高い金属音が鳴り響いた。

あつぶな〜。

魔法陣の展開があとちよつとでも遅れてたら背中を刀でバツサリいかれてたね。

「あれ〜? 殺つたと思つたんだけどな〜」

土煙が晴れてよく見えるようになった地上には何人か殺られた者もいたけれどそれでもまだ80人程残つていた。

「ねえ、もしかしてここにいる全員がイレギュラー不純物だつたりする?」

「That, s right!」

ここにいる全員が神に転生された特別な者たちだよ〜。

にしても〜、その不純物って呼び方を知つてゐるってことは〜君もそうだったりするわけ〜?」

「正確に言えば違うけど、まあ、君達と同じ転生者だよ。でも私が転生された理由は君たちと違って、君たち不純物を抹殺するためにこの世界へ転生されたんだだけね。」

まあ、不純物の抹殺と言っても抹殺する対象は選ぶけどね」  
「じゃあ俺たちには攻撃できないね。」

だつて俺たちちよ〜良い子だもん」

「残念だけどここにいる全員が抹殺対象だよ。」

ちなみに、会話中だからつて攻撃を止めるとでも思った？」

「何を『ドシユッ!』」

さつきまで話していた男が上空から降ってきた長大な氷柱に頭から貫かれて絶命した。

これは男との会話中に思考詠唱で唱えていた水魔法『アイシクルレイン』だ。

氷柱は一本だけに留まらず、幾つもの巨大な氷柱が降ってきて不純物達を蹴散らした。

残存勢力：63名

私は続けて短縮詠唱で二つの広域殲滅魔法を発動した。

「融解せよ『シユメルツェンヴェッター』」

断罪の裁きを『レイディアントシユラーク』」

全てを溶かし尽くす超高熱の嵐と天から降り注ぐ光の衝撃波が不純物達を襲う。

不純物達も各々の能力で対抗するも、その圧倒的なまでの破壊に為す術なく飲み込ま

れていった。

その結果、大地をも溶かす熱風により地面は溶けてマグマとなり、残った地面も天から降り注いだ光の衝撃波でクレーターだらけとなった。

残存勢力：2名

「あの猛攻の中を生き残るなんて凄い能力を貰ったみたいだね」

「どうやったのかはわからないけど、残った金髪と銀髪の双子の男は二人共無傷だった。」

「まあね。僕等兄弟は神より無敵の力を得たからね。僕にはたとえ神をも殺すほどの攻撃でも傷一つつきやしないよ」

「どんな能力を貰ったかは自分で調べてね」

金髪はその場から動かず、銀髪は上空10m付近に滞空していた私の方へジャンプしてきた。

銀髪はそれだけで私と同じ高度に達し、そのまま拳を打ち付けてきた。

私はそれを瞬時にアイテムボックスから取り出した鉄刀『鈍倉』ドゥンソウで受け流して、そのまま銀髪の胸を斬り裂いた。

だが、刀は胸に触れた途端止まり、傷一つつけることができなかつた。

な!?!どうして斬れないの!?!いくら前世で安売りしてた大量生産品だといっても人く



ということとは金髪能力は、自身を受けたダメージを自身から分離し、それを相手に押し付けて攻撃する。完全なる受け身型能力。

銀髪の方は斬撃を止めた時の感触と大ジャンプをしてたところから大方斥力操作ってところか。

本当…、厄介な連中だよ。

「まずは、銀髪から殺るかな（幸いまだ大雑把な能力の使い方しかできないみたいだし）」  
「ハッ！殺れるものなら殺ってみろってんだ！」

「それ、死亡フラグだよ」

私は柔やかな笑みとともにさっきの戦闘で千切れた服の破片を銀髪の首へ転移させて切断するとほぼ同時に金髪を『サープラス・グラビトン』で地面に叩きつけてから手足に氷柱を刺して縫い付けた。

「な!？」

「君はどんな攻撃だろうと分離させることができるんだよね。それがたとえ死であつても」

「な!?!あの攻防だけで僕の能力を見破つただと!？」

「だから、君は殺さずに封印することにした。」

この封印術は封印場所が極楽浄土だから一生帰りたくなくなって、最終的には廃人に



「俺は木原双極。『闘争』を司る『木原』にして、暗部組織『フレーム』の副隊長だ。

つつても、実質的にやあ俺が隊長なんだがなあ。

書類とかが面倒だから真面目そうなバカに面倒なこと全部押し付けた結果俺が建前上は副隊長つてなっただけでよお」

「まさか『木原』がいたなんてね。

「データにはそんな記録なかったんだけど？」

双極は嘲つて薄い笑みを浮かべ、

「当たり前だ。敵を少しでも欺いた方が潰しやすいからなあ。

「なにより、誤った情報を必死になつて手に入れてる所を想像するとあまりにも滑稽で笑いが止まらねえしなあ！」

双極は情報部が必死になつて『フレーム』の情報を集めてる様を思い浮かべて大笑いする。

「随分と小さな人間だね。木原双極。まるで小学生の悪戯を見てるみたいだよ」

双極はその言葉を聞いた瞬間ピタツと笑い声を止め、冷めた目つきで私を見据える。

「ああ？今なんつった？」

「小学生の悪戯を見てるようだって言つたんだよ。出来損ないの木原くん？」

「おおうけえい。余程愉快奇天烈な死体になりてえんだなあ？」

いいぜえ、ギネスも真つ青な変死体にしてやらアアアアア!!!  
双極が憤怒の表情で高速接近してくる。

「そうやって直ぐキレるとこも小学生みたいだよ?」

私は闇魔法『サープラス・グラビトン』で地面方向へ100Gもの重力をかけて目の前まで一瞬で接近してきた双極を地面へ叩きつける。

「ならその小学生に負ける奴は一体なんなんだろうなあ?」

「カハッ!」

私は突然謎の不可視の力に押されて100m以上も吹き飛ばされて先の戦闘で地面に突き刺さったままの氷柱に減り込んだ。

「無様だなあ。自分の攻撃を利用されるなんて本当に無様だあ」

双極は100Gもの重力をもともせず立ち上がった。

いや…、違う。

自身を押さえつけていた重力を何らかの能力で私へ受け流したのか。

チツ、…口の中が切れたのか。

口内からドンドン血が溢れてくる。

私は魔力を爆発させることで氷柱を崩して脱出した。

私は口内に溜まった血を吐き捨て口端を手で拭いた。



「……、あんたの能力は一体なんなの？」

「なあと、俺の能力は学園都市ではありふれた…、ただの念動使テレキネシトいだあ。

さっきお前の重力攻撃を受け流したのも念動力テラキネシスで重力を掴むようにしてお前の方に投げつけただけだあ」

「なるほど。でも良かったの？」

「自分の手札を晒しちやつてさあ」

「構わねえよ。その程度じゃあ不利にはならねえからなあ」

「そ、でも…、その驕りは命取りになるよ」

私は掌に大量の光子を収束させて一筋のレーザーを双極に放った。

双極はレーザーが当たったにもかかわらずダメージが一切なかった。

「ハッ…その程度の光で俺を焼けるとおもってんじゃねえぞひよっこがア！」

俺を焼きたきやあこれぐらいはやってみろオオオ!!」

双極は掌を満月とともに数多の星が煌く夜空へと掲げた。

その瞬間、視界が真っ暗になり、頭上に爛々と光り輝く光以外にも見えなくなつたと思うと、次の瞬間には視界を白が塗り潰した。

音の消えた世界で余波が辺り一帯を吹き飛ばし、そこに遅れて轟音が轟いた。

「ほう、幾ら夜で光が少なくても威力がカスみたいになつたとはいえ……」

双極が後ろを振り向き、所々服が消失し、火傷を負った私を視界に入れた。

「まさか、あれを直撃してさらに追撃を防ぐ為に空間転移する余裕があるとは思わなかったなあ」

「直撃って訳じゃないよ。」

当たる寸前にギリギリ防御性魔法陣を3枚展開したからね。

ホント、こつちこそ防御性魔法陣3枚でもこれだけくらいとは思わなかったよ」

私は全身の至る所に負った大火傷を治癒魔法で治癒しながら返答した。

会話中に治せるように急いで治癒させたから魔力の消費が激しいな。

こりゃあさっさとケリをつけないとヤバイかもね。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだがよお……」

お前、戦闘中に休みなんてものがあるって思うか？」

私は嫌な予感がして咄嗟に空間転移でその場を離れた。

すると、私がいた場所に直径10mほどの巨大なプラズマが落ち、大爆発を起こした。  
我思慮せず只々眼前ノ敵ヲ討チ滅ボス  
「そんなことはこれっぽっちも思わないよ！」

『神薙』

私は空気を薙刀を持つようにして掴み、そのまま双極に向けて薙ぎ払った。

大気の薙刀による斬撃は触れる物全てを消滅させながら突き進む。

双極はそれを念動力で自身を掴み放り投げて、マツハ5の速度で空気抵抗により負傷しながらもギリギリのところで緊急回避に成功した。

でも、それじゃあまだまだ甘いよ。

「なんだと!？」

直線上の尽くを消滅させながら突き進んだ神薙は空間すらも切断していて、双極の右腕は空間断層に巻き込まれて砕け散った。

「こんの小姑娘がアアア!!!」

右腕を砕かれて憤怒に染まった双極は念動力で上空の膨大な量の大気を掴み、踵落としと共に落としてきた。

『『エアクエイク』!』

私はそれを拳を双極が振り下ろした脚に打ちつけて巨大な振動波を発生させて相殺し、そのまま双極の脚を掴んで地面に簞え立つ氷柱へと投げ飛ばした。

双極はそのまま氷柱の一つに激突し、氷柱を崩して止まった。

私は双極が吹っ飛んだ方へと移動し、両掌を合わせた。

「六の支柱を支えとし、空間を断絶せよ『シャットアウト』」

すると、私の周りにある上空から見て六角形に簞え立っていた氷柱が光だし、その六つの氷柱からそれぞれ光のラインが出て六角形模様繋がり、さらにそこから対角線を

結んだ。

そして光のラインが一際強く輝いた時、六つの氷柱を軸とする空間を断絶する光のカーテンが展開され、全方向を囲む断絶の結界が張られた。

氷柱の対角線が走る地面にもカーテンと同じように光の膜が張られた。

「逃がさない……ってか？」

ハッ！笑わせる。テメエを殺さずして誰が逃げるかよクソツタレが！

双極は崩れた氷柱の山を念動力で吹き飛ばして立ち上がり言った。

「逃がさない為に張った訳じゃないよ。」

私が本気で戦うと周りの被害が凄まじいからね。

それを防ぐために張っただけだよ」

「ああくムカつく。」

俺はそういう周りを気にする『闘争』が一番嫌いなんだよ。

虫唾が走る！

『闘争』つてのは周りを巻き込んでなにもかもを破壊し尽くしてこそ至高だろうがア!!!」

「私は私が正しいと思っただけをやる。ただ…、それだけ！」

私は「『フィジカルスベック』と『フィジカルグレード』《身体強化魔法》で身体能力と身体強度を強化し、マッハ10という恐るべき速度で双極に接近し、その勢いのまま

鳩尾を手刀で貫き、腕を掴んで、そのまま上に思いつき振り上げた。

高速で振り上げられた双極の腕は千切れて、身体だけが高速で錐揉み回転しながら夜空へ吹っ飛んで行った。

私は大気魔法の応用で宙を駆けて、吹っ飛んで行った双極に追いつき、かかと落としを決めて地面に叩き落とした。

ガアアアアアアン！という硬質な轟音を響かせて地面に叩きつけられた双極は最後の力を振り絞ったのか、大気を集めて作った巨人の拳を上空にいる私に叩きつけてきた。

「これで終わりだよ。

『闘争』の木原」

私は空気を力強く踏み締めて、思いつき飛び出した。

音速を軽く越えた速度の中、私は半回転して脚を双極に向けた。

そして、双極の大気中の巨人の拳と私の脚が激突した。

私の蹴りは巨人の拳を霧散させ、そのまま双極に蹴りが直撃した。

双極の身体はそのあまりの威力に爆散した。

「…さて、子供達の救出を手伝いに行く前に傷を治しとくかな。

ていとくんは心配性だから、見つかったらまたいろいろ心配かけちゃうだろうし」

私は結界を解除してから身体中の怪我を『フルケア』で治した。

すると、丁度でいとくんが地下へと続く階段からたくさんの子供達を引き連れて上がってきた。

手伝うまでもなかったみたいだね。

「ハア、やり過ぎだ」

「にやはは、今回の敵はちよつと厄介だったから一掃するために広範囲殲滅型の技を使ったからね」

私は辺りの惨状を見てあきれて頭を手について溜息を洩らすでいとくんにそう言った。

でいとくんがこちらに視線をやると私の全身を見て心配と呆れと驚愕の3つの感情を孕んだような眼をした。

「珍しいな。お前が傷を負うなんて。

イレギュラー  
不純物でも混ざってたか？」

「混ざってたっていうか全員不純物だったね」  
イレギュラー

「どうりでこうなる訳だ」

でいとくんが溶解したりクレーターだれけになっている地面へと眼をやりながら言った。

ま、まあ、どうせ下部組織の連中がなんとかしてくれるでしょ！

……なんとかなるかなあ……これ……

私は「まあ、いざという時は私の魔法で直せばいいか」ということで結論付け、話のベクトルを子供達の今後についてに移した。

「それよりこの子供達はどうするの？」

「こいつらは部屋が用意できるまでは第七学区にある冥土<sup>ヘブンキャンセラー</sup>帰しのところへ預ける。

……ということではいつもの頼む」

「了解(？、？)ゞ」

私は『ゲート』でワームホールを形成して、ここと冥土<sup>ヘブンキャンセラー</sup>帰しの勤務先の病院の空間と

を繋げた。

「じゃあ、俺はガキ共を預けに行くから後始末は頼んだぞ」

「ええ、私が預けに行くからいとくんが後始末してよ」

「仕様がねえな。じゃあガキ共は頼んだぞ」

「まっかせなさい！ さ！ みんな行こっか！」

「あ、ちよつと待て。

これを持っていけ」

そう言っていていとくんはポケットから折りたたまれた紙を取り出して私に渡した。

「コレは？」

「それは研究所にあったその髪が長いガキについて書かれた書類を無駄な部分を省いて纏めた物だ。

それを冥土ヘウンキャンセラー帰しに渡してそのガキを診てもらえ」

「うん、分かった。

それじゃあ後始末よろしくね」

私は子供達と手を繋いでワームホールの中を通っていった。

いやあ、後始末やらずに済んで良かった。

コンピュータってのには未だに慣れないから情報を消す時苦労するんだよね。

それにしても、あの子に一体何があるっていうんだろ？

他の子の分はなくてあの子の分だけがあるってことはなにかがあるはずなんだけど

……。

まあ、それについてもさっきの紙に書いてあるだろうし、移動しながら見るとするか。

場所は移り冥土ヘウンキャンセラー帰しの勤務先の病院。

ワームホールを通ってきた私はワームホールに興奮する子供達を連れて



カエル医者のもとを訪れた。

カエル医者のある部屋の扉をノックして、返事が返ってきたので開けると、カエルに似た顔の老医師が椅子に座ってカルテを見ていた。

カエル医者は扉が開く音を聞いて、カルテを机の上に置いて椅子を回転させてこちらに向いた。

「おや? どうしたんだい? こんな夜遅くに大勢の子供達を連れて」

「この子達の入居先が決まるまでこの子達を預かってくれないかな?」

入居先の方は親婆（親船最中）が手配してくれるからさ」

「ああ、構わないね?」

「なにも聞かなくていいの?」

「聞く必要がないからね?」

僕はただ病室を貸し与えるだけなんだから。

それに、余計なことを聞いて、患者を救う側である僕が逆に患者を傷つけてしまうかもしれないからね?

それより君の方こそ大丈夫なのかい?

見たところボロボロのようだけれど」

「私は大丈夫。傷自体はもう能力で治したからさ。」

あ！それとコレ」

私はポケットからさつきていとくんから渡された紙を取り出してカエル医者へと渡した。

カエル医者は渡された紙を開いて見た。

「この書類によれば彼は『木原』に右眼を義眼に変えられてるみたいだからその安全確認とメンテナンスもしてくれと助かるんだけどいいかな？」

「もちろん。」

患者のためなら必要とあらばなんでも用意するとも」

「ありがとう。それじゃ私はそろそろ帰るよ。」

費用の請求は親婆にしてね」

私はにこやかに笑うカエル医者を背に自宅へと『ゲート』で帰った。

S I D E 三人称

学園都市第七学区に位置する窓のないビルと呼ばれるビルの中で二人の人物が話していた。

一人はビーカー型の生命維持装置に入った学園都市統括理事長アレイスター・クロウリー。

もう一人は白衣を着た二十歳ほどの男だった。

その男の身体にはラインが入っていて、そのライン上を一定間隔で光が走っていた。

「大事なレベル5を失ったが良いのか？」

「失ってなどいいさ。」

彼によつて脳の回収はもう済まされているからね。

能力を行使する脳さえあればその入れ物などどうでもいい」

「へえ、良くあの結界の中に気づかれずに侵入できたな。」

「一体どうやって入ったんだ？」

「彼のことは同じ『木原』である君の方が良く知っているとと思うのだが？」

「そうだな。無音ならその程度のこととは造作もないか」

「それより、君の方こそ良いのかい？」

『フレーム』は君の大事な玩具だったはずだが」

「大事だろうがそうじゃなからうが所詮は玩具に過ぎない。」

子供ならまだしも、大人は玩具を壊された程度じゃ怒らないものだ。

それに、貴様のプラン通りに動くのは癪だしな」

その発言を聞いてアレイスターは僅かに表情を変えた。

「君は常に私のプラン通りに動かないからもしかしてとは思っていたが。」

やはり、私のプランについて知っているのか？」

「いや、知らないな。」

それに興味もない。

俺が貴様のプラン通りに動かないことができるのはただ単純にこれまでのプランの内容から次に行われるであろう複数に枝分かれしたプランを予測しているだけだ」

「もしそれが真実だとしたら君はレベル5以上の化物だな」

「フン、俺には史上最強最悪の魔術師の方が余程化物に見えるがな」

ラインの入った男は去り際にそう言って窓のないビルから消えた。

『『木原』の中でも最上位に位置する君も、私とあまり大差はないと思うがね』

アレキスターは薄暗い窓のないビルの中で独り言ちた。

## 第七話 勇者、初登校する

突然だが、スクールは数多くのアジトを所有している。

それはアパートメントやマンションの一室だったり、第三学区にある個室サロンだったり、果てには大型ショッピングセンターの地下駐車場の壁の中にまである。

ちなみにそれらの清掃などをしているのは私のパシリことスクールの下部組織達だ。

私は今、そんな数多くあるアジトの一つであるとあるビルの一室でいとくとんと話していた。

「それでね、明日から高校に登校するんだけどさ、ていとくんも一緒に来ない？」

眼をキラキラと（魔法により物理的に）輝かせながら誘うとていとくんは興味なさげに断った。

「どうせ個別授業とは名ばかりの隔離授業を受けるだけだろ。」

そんなところ行くだけ時間の無駄だ」

「他の高校はそうなのかもしれないけど私の通う高校は大丈夫だよ。」

なんでも、とある先生達が『隔離授業なんてしてもなにも得られるものはないじゃん

！』とか『生徒が可哀想ですう』とか言つて上に抗議した結果、隔離授業はなくなつて高位能力者も普通に皆と混じつて授業を受けられるようになったらしいよ。

と言つても、そんなに賢い学校じゃないから高位能力者なんて片手で数えられるほどしか入学した事例はないんだけどね」

「へえ、中々良い先生がいんじゃないか。

…そうだな、そこなら俺もちつたあ暇潰しができるかな」

「ホント!?じゃあ早速下部組織に入学手続きその他諸々をさせるね!」

私はミニスカートのポケットから白色のiPhoneを取り出してLINEで下部組織に命令を送つた。

(あいつら完全に樹のパシリ組織になつてるな。

まあ、本人達も満更でもねえみてえだがな)

S I D E 上条

「不幸だ」

私こと上条当麻は絶賛頂垂れモード発動中で机に腕を組んで枕にしてうつ伏せていた。

何故俺がこんなにテンションが低いのかというと、今日は朝から不幸続きだからだ。

まあ、普通の不幸なら日常茶飯事でもう慣れてこんなにもテンションは下がらないんだが今回はいつにも増して不幸だった。

まず、朝、インデックスにお腹空いたんだよう！とお目覚めの噛みつきを喰らい、その後急いで登校の準備を終わらせて出かけようとすると、偶々床に転がっていた受話器を踏んで転び、後頭部を強打し、登校中には偶然ビリビリと遭遇しビリビリされ、ようやく逃げ切ったと思つた矢先、何故か地面に落ちていたバナナの皮に滑つてこれまた後頭部を強打、漸く学校に着いたと安心したのも束の間、野球部が朝練をしていたようで、バットで打たれて飛んできた硬球がこれまた上条さんの後頭部に直撃、このまま外にいると今度は金属バットが飛んできかねないと焦つた俺は急いで下駄箱のロッカーを開けると勢い余つてそのままロッカーの扉が取れてしまい常時ウエルカム状態に、という風にいつもにも増して過激な不幸だったのだ。

特に後頭部へのダメージが大きい。

そうやってうつ伏せていると誰かが話しかけてきた。

まあ、声で見当はついてるけど。

「なあなあ、かみやんビッグニュースやでえ。

なんと今日！このクラスに三人も転校生が来るんやって！

しかもその内二人が女子!!」

「さらに二人共可愛いらしいにやー、特に赤髪の方の女子は調査員が泡を吹きながらイナバウアーをするほどの美貌だったらしいぜよ！」

顔を上げてみると、そこには案の定俺の悪友である青髪とピアスが特徴の女の子なんでもいけちやう生粋の似非関西弁変態こと青髪ピアスと、金髪にサングラスと見た目は完全にヤンキーにも関わらずその実態は義妹に手を出しちゃう（性的な意味で）ようなシスコ軍軍曹である土御門元春がいた。

転校生ねえ。

つか三人って多くないか？

「美人かあ。管理人のお姉さんタイプの子だったらしいな」

「残念だったなかみやん。」

調査員からの情報によると一人は長髪の薄幸美少女でもう一人は凛々しい系快活美少女らしいにやー」

「かみやん、呉々もフラグは建てんようにな。」

やないとそろそろ肅清されるかもしれへんで？」

フラグ建てるなつつうけどフラグなんて不幸フラグと死亡フラグ以外建てたことないっての。

あれ？なんでだろ、自分で言っけて泣けてきた。



「つーかさつきからちらほら出てくる調査員って一体なんなんだ？」

「はあ、皆さん席に着いて下さるわい。」

「今日はまず転校生ちゃんを紹介をするのですよ！」

「転校生ちゃん、入ってきて下さるわい。」

「一体どんな子なんだろうなあ……って！」

「インデツ……いや誰だよ!？」

「私はインデペンデンス。ただのしがたない神父さ。」

扉を開けて入ってきたのは転校生ではなく、神父服を着た筋骨隆々の白銀の長髪をオールバックにした神父だった。

「いやいやいや誰エエエエエエ!!!??」

「え、ここってインデックスが出てくるところとこじやないの!？」

「インデペンデンスって誰!？」

「ちよつ、ちよつと誰ですか貴方は……！」

「ここは関係者以外立ち入り禁止なのです。」

「そんなことは知っているさ。」

「だが、私の筋肉がここに来なければならぬと煩くてね。」

「筋肉も静かになったことだし私はこの辺で退場させてもらおう。」

では、さらばだ!!」

インデペンデンスはそう言つて窓の方へと駆け出し、そのまま窓を突き破つて外へ飛び出た。

いやいやいやここ4階ですからアアアアア!!?

と思つて窓の外を見てみると、校門の方向へ走り去つて行くインデペンデンスが遠くの方に見えた。

あの高さから落ちて無事でしかも一瞬であそこまで走り去るなんて…。

もしかしてあいつも神裂と同じ聖人なのか？

「え、えーとじゃあ気を取り直して。

もう時間がないので自己紹介が終わつたら体育館に来てくださいね。それじゃ、転校生ちやくん、順番に一人づつ入ってきて下さ〜い」

扉を開き、転校生の一人が入ってきた。

俺は見知つた顔だったので「なんであいつが!？」と驚愕しただけだったが、俺以外のクラスメイトは違つた。クラス全員が彼女に釘付けになつた。

彼女は、しみ一つないスラツとした白く綺麗な長い足、くびれた絶妙なバランスの腰、適度な大きさの形の良い柔らかそうな胸、腰まで届くアホ毛が跳ねた赤い艶やかな長髪、炎のように赤い眼、アニメや漫画のキャラクターでさえ足元にも及ばないほどの整

い過ぎた顔、とまさに絶世の美少女とは彼女のためにあるんじゃないかと思う程の美貌と魅力を兼ね備えていた。

そうして彼女に見惚れて訪れた静寂の中、それを打ち破る声が俺達の鼓膜を揺らした。

言うまでもなく、声を発し、静寂を打ち破ったのは転校生である彼女だ。

「え、とく、私の名前は如月樹です。能力はLevel 4の幻想具現イマジンドラッグで、趣味は読書とゲームです。

これからよろしくね。皆」

その声は言葉に表現しようとすることきえ鳥澁がましいと思う程に綺麗な声で、彼女ー如月に見惚れていたクラス全員は更にその魅力に引き込まれた。

そしてまた、静寂が訪れた。

如月は自己紹介を失敗したとでも思ったのか、オロオロとし始めた。  
そんな中、一人の勇者が静寂を打ち破った。

「……よ……たあ……」

「え？」

ガタンツ！と突然青ピは席を立って叫んだ。

「美少女キタ——(???)——!!」

うっひよおおお!!!

「ヒイツ!？」

勇者かと思われた静寂を打ち破りし者の正体はただの性欲の化身だった。

青ピは謎の奇声を発しながらあまりにもキモい青ピに怯える如月へと走り寄った。

って危ねえ!!

「キメエんだよ!」

俺が助けようと席を立つ前に廊下から現れた金に近い茶髪の男は如月の前に出て、迫り来る変態を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた青ピは窓を突き破って外へと落ちていった。

まあ青ピなら大丈夫だな。

多分ギャグ補正とかかかんだろ。

グシャツ!とかいう音が聞こえたけど多分気のせいだな。

「俺は学園都市第二位の Level 5、垣根帝督だ」

「!キヤアアアアアア!!」

ぐああああああああああああああ!!

クソ!これが噂に聞くイケメンだけが引き起こせる現象、黄色いソニックブームか!!

爆発しろ!!

何はともあれ、無事？自己紹介を終えた俺達は始業式のために体育館へと向かった。

「私の……自己紹介……orz」

## 第八話 垣根、踏み入れし新たな領域

始業式を終えた私とていとくんは学校帰りに寄った地下街のゲームセンターにある太鼓の超人で遊んでいた。

「お前よく裏超人モードで良フルコンボなんて出せるな」

「いやいや、これぐらいでいとくんもできるでしょ」

「フルコンボはできてもオール良は無理だな。できる気がしねえ。『……地下街に外部からのテロリストが侵入しました！現在地下街にいる方は風紀委員の誘導に従い、速やかに地上へもどってください。繰り返しします……』」

「……?」

突然、私達の頭の中に声が響いた。

「……どうやら風紀委員がテレパシーで皆に伝えて回っているみたいだね。」

「……どうやらテロリストが紛れ込んだみたいだね」

「みたいだね。どうする?俺たちは介入せずに帰るか?」

「うーん、私は残って避難を手伝うよ。テロリストの攻撃でシャッターが降りて閉じ込められる人がいるかもしれないからね。それに不純物イレギュラーが暴れてるかもしれないし。だ

からていとくんは先に帰ってても良いよ」

「いや、お前が残るんなら俺も残ってアンチスキルの手伝いでもしてくるわ。

もし不純物イレギュラーがいたらアンチスキルじゃ対処できねえからな」

「分かった。…やり過ぎないでね」

「分かってるよ」

私達はゲームセンターを出て、ていとくんはアンチスキルの手伝いに、私は避難の手伝いをするために、二手に別れた。

「だいたいの方は風紀委員ジャッジメントの誘導もあつて避難できたみたいだね」

ゴシヤアアアアン!!! ガチャンツ!

凄まじい轟音が鳴り響いた次の瞬間、ブレーカーが落ちた時の音が聞こえて、辺りが暗闇に包まれた。

ワオ、照明が落ちて真っ暗になったね。

つてことは緊急時用の防犯システムが作動してシャッターも閉まっただろうね。

……何か嫌な予感がするなあ。

さっさと閉じ込められた人を外に避難させた方が良いね。

閉じ込められた人達を外へ出すために出口の方へ向かっていると、見覚えのあるツン頭と常盤台の制服を着た短髪が見えたので声を掛けてみることにした。白いシスターもいたからできれば声かけたくなくないんだけどね。

まあ流石にこの緊急時にお腹すいたんだよなどとほざいたりはしないでしょ。

「おーい、ヒーロー」

「如月!?!お前もここにいたのかよ!」

「うん。ていとくんと遊んでたのよ。」

それよりもヒーロー達も逃げた方が良いよ。テロリストが暴れてるみたいだからさ」

「暴れてるって、もうアンチスキルと交戦してるの!?!」

「うん、でも大丈夫だよ。アンチスキルのところにはていとくんが応援に向かったから

さ」

「ていとくんって誰よ?」

「ていとくんはLevel 5第二位の未元物質垣根帝督のことだよ。」

みこつちゃんも絶対能力進化計画の時に操車場で会ったでしょ?」

「あ!もしかしてあの時のホストっぽい奴!?!」

「そう、だから勝敗的な心配はしてないんだけど一つ問題があるんだよね」



「問題って?」

「ていとくんの攻撃の余波でこの地下街が崩れないかどうかってこと」

私が苦笑いしながら言うとう眼鏡をかけた長髪の女の子、風斬氷華（あだ名はメガネちゃんかな）と大罪シスターがええ!?!と云って驚き慌て、ヒーローとみこっちゃんが『全然大丈夫じゃねえ（ない）!!』とツツコミを入れた。

さすが漫才コンビ上条美琴、息があつてるねえ。

「ねえ、あんた今失礼なこと考えてない?」

なぜ分かった!?

「考えてないってば。」

だからその電気は仕舞つてね〜」

ヒュンツ!

「お姉様、まだ避難していませんでした!」

それに類人猿も」

私たちがコントをしていると風切り音と共にパ<sup>白</sup>ンダ<sup>井</sup>が現れた。

レポートで飛び回って閉じ込められた人達を避難させてるのかな?

「まあまあそんな怒らないでさ。」

今はみんなの避難が先でしょ?」

「…そうですね。」

では、まずはお姉様とこのシスターを外へ避難させますの」

「えっ？ちよ！黒子！」

みこつちちゃんと大罪シスターを連れてパンダが外へテレポートした。

それじゃ、私はこの先の出入り口で立ち往生してる閉じ込められた人達の避難を手伝うかな。

P r r r r r r r r r r r r r r r r

電話？

ポケットからiPhoneを出して画面を見ると、そこにはいてくとくと表示されていた。

なにかあったのかな？

「もしもし、何かあったのていとくん」

『ああ、どうやら学園都市に侵入したテロリストは三人いて、そのうち二人が不純物らしい。  
い。』

しかもその内二人はこの地下街にいて、もう一人の不純物イレギュラーは第23学区にある衛星管制センターに向かっているらしい』

「それは誰からの情報なの？」

『土のゴーレムを操るテロリストと交戦していた警備員アンチスキルの一人だ』

「交戦していた？」

『全員土のゴーレムにやられたからな』

「てことはていとくんはそのゴーレムを操る敵と戦いながら電話してるの？」

『いや、そいつは俺が一撃でゴーレムを吹き飛ばしたら勝てないと思ったのか粉塵に紛れて逃げやがったよ。』

だから今は衛星管制センターに向かつてる奴を倒す為に地下街を出て衛星管制センターへ飛んで先回りしてるとこだ』

「そつか。じゃあていとくんはそのまま衛星管制センターに向かった不純物イレギュラーを倒して。

こつちで地下街にいるテロリストは倒すから」

『分かった』

私は通話を切ってヒーロー達の方へ振り向いた。

「ヒーロー、テロリストの狙いはヒーロー達みたいだよ」

「な?! 本当かそれ!」

「うん。さつき連絡があつてね、褐色肌の女のテロリストの目的はイギリス清教と学園都市で戦争を起こさせることらしいの。」

その火種としてそのメガネちゃんやヒーロー、大罪シスターっていうある条件が

揃っている人物を狙ってるみたい」

まあ、そんな連絡受けてないけどね。

全部原作知識のおかげだし。

「クソ！どうにかして外へ出られればインデックスを助けに行けるっていうのに！」

「大丈夫だよ。私が外に出してあげる」

「でも、俺には幻想殺しのせいで異能の力は効かないんだぞ？」

「分かってるよ。まあ見せて。」

『サーチ』

私は自身を中心として球状に魔力を放出し、それにより地上の地理を把握した。

よし、上は建設途中のビルがあるだけみたいだね。

『『デリート』』

私は人差し指で真上の天井に向かって円を描いた。

すると、天井が円柱状に消滅して円状の穴が空いた。

『『モデリング【ラダー】』』

土が天井の穴へ向かって隆起し、土の梯子ができた。

「さあ、これで外へ出て。」

「右手は使わないようにね」

「分かった。ありがとうな」

「どういたしまして。」

それじゃ私はもう一人のテロリストを倒しに行くね」

「え!? テロリストって一人じゃなかったんですか?」

「違うよメガネちゃん。」

学園都市に侵入したテロリストは合計三人だよ。」

残りの一人はていといくんが相手をするからヒーロー達は心配しなくていいよ」

「そうですか…。分かりました。気をつけてくださいいね」

「うん、そっちなもね」

それじゃ、私はこの穴を塞いで地下街にいるテロリストを倒しに行くかな。」

場所は地上の様子を調べた時ついでに調べた限りじゃ地下街のさらに地下にある鉄道にいますみたいだし。」

私はさっきやったのと同じようにして真下に穴を開けて地下の鉄道へと向かった。」

S I D E 垣根

「やつと来たか。待ちくたびれたぜ糞野郎」

衛星管制センターに先回りして戦闘しても大丈夫なように衛星管制センター近くの

広い道路で待つこと数分、不純物イレギュラーのテロリストがやって来た。

その風貌はSPのような真つ黒なスーツを着た目つきの悪い20代の男だった。

「もう暗部が動き出したのか」

「さあな」

「まあ良い。第二位と言えど、俺の能力なら攻撃を通すことができるだろうしな。」

さつさと殺して衛星をジャックするとするか」

「お前の狙いは人口衛星『ひこぼし11号』をジャックしてそれに搭載されている軍用レーザーを照射して学園都市に大打撃を与えるってどこか。」

なんともチープな作戦だな」

「何とでも言うが良いさ。」

仮に失敗したとしてもローマ正教が学園都市に攻撃をしたってことに変わりはない。

それだけで俺達には意味がある」

「そうかい。」

まあ、そつちのことは知ったこっちゃねえ。

どうせどつかの野郎がコソコソと動き回ってくれるだろうしな。

とりあえず、俺はここでお前をブチのめすだけだ」

「やってみろ。第二位!!」

黒スーツが能力を発動したのか、周りの空間が歪んだ。  
なんなんだこれは？

空間操作系の能力で周囲の空間と断絶させて閉じ込めたのか？

ま、一応用心はしとくか。

黒スーツはまるでリアモーターカーのように浮遊しながら高速接近してきてその勢いのまま殴りかかってきた。

確かにスピードは大したもんだが動きが直線的過ぎてカウンターしてくださいって言うてるようなものだな。

俺は未元物質で作ったガントレットを付けた右拳でカウンターを極めた。

かのように見えたが何故かすり抜けて後頭部に強烈な衝撃が加わった。

俺は二撃目を防ぐために三対の翼を展開し、それを振り回すように回転しながら距離をとった。

(さっき殴ったのは光を操作して作った立体映像か?)

だが、光学操作系の能力ではなさそうだな。

さっきの移動は電磁力を利用したもので光学操作系の能力じゃまず不可能だからな。  
とりあえずいろいろ実験してみるか。

俺は翼を使い、光を回折させることによって太陽光を殺人光線へと変化させて黒スー

ツへと照射した。

だが、殺人光線は黒スーツに当たる瞬間、何故か拡散した。

「そんなものか？第二位」

「なわけねえだろ三下！」

俺は翼を弓のように引き絞り、一気に六枚全ての翼を黒スーツに打ち付け、続けて未元物質で黒スーツの周りの空気を毒ガスへと変化させ、さらに未元物質の粒子と反粒子を衝突させることで対消滅を起こして爆破した。

だが、それでも黒スーツは爆炎の中から悠々と出てきた。

「ヒントをやろう。俺は天災をも再現できる」

黒スーツは何もない虚空から赤い雷を落とすと同時に黒い靄のような剣を作り出し、切りかかってきた。

俺は雷を翼で防ぎ、斬撃は前方に未元物質の透明な壁を作ることで防いだ。

すると透明な壁に当たった黒い靄の剣は拡散することで壁を躲し、黒い槍となって俺の全身を覆う目には見えない未元物質の防禦膜ごと切り裂いた。

「があああああああ!!!」

クソ、こいつの攻撃は通常の物理法則に則ったものじゃねえってのか！

俺は瞬時に黒い靄の正体を解析し、二撃目の黒い靄の槍を未元物質でスポンジのよう



に吸収させて防いだ。

かなりのダメージを受けたがさっきの攻防でだいたいの能力の見当がついた。奴のさっきの言葉が正しいのだとしたら、奴は現象を操る能力だ。

それも、既存、未存の現象を発生、操作する能力でほぼ間違いないだろう。

今も周りに展開しているこの空間の歪みやさっきの黒い靄で作った剣なんざ既存の現象には存在しないからな。

あのリニアモーターカーみたいな高速移動も下がただの地面であるここじゃあ本来不可能だしな。

「その様子だと、どうやら俺の能力がわかったみたいだな」

「既存、未存の現象を発生、操作する能力だろ」

「8割正解といったところか。正確には俺が想像した現象を発生、操作する能力だ。既存未存問わずな。ま、どんな能力を使っているか分かったところでどうしようもないだろうがな」

「いや、能力さえ分かっちゃえば対処法なんざいくらでも浮かぶ。

最悪、全ての対処法が通じなくとも無限に未元物質を生産し続けて持久戦に持ち込めば勝てるしな。

だけど、今回は試したいことがあるからな。

お前にはその実験台になってもらおうぜ」

「なんだと？」

俺はベルトに付けられているホルダーからカードケースを取り出し、その中からルーン札を三枚取り出した。

「な!!まさか、魔術を使うつもりか!!」

能力者が魔術を使うと副作用が発生するんだぞ!

いや、それ以前にどこで魔術を知った!」

「これは若い姉ちゃんから道案内のお札に貰った本に書いてあったんだよ。

まあ、樹に教えてもらうまでは全く意味が分からなかったけどな」

それにしても、まさかあの時貰った本がこんな役立つ物だったとはな。

八月二十九日

「あのく、ちよつと道を探ねたきなのよ」

第七学区の公園のベンチでぼーっとしていると自分の身長よりも長い金糸のように綺麗な金髪にサファイアのような碧眼の姉ちゃんが道を尋ねてきた。

「ああ? 何処に行きてえんだ?」

「ちよつとセブンスミストというところに行きたきなのよ」

「セブンスミストならその大通りを右に歩いて行けばすぐ見つかる。

セブンスミストって書いてあつからすぐ分かるはずだ」

「おお！ありがたきことなのよ！

お礼にこれを差し上げるのよ！」

金髪の姉ちゃんはカバンから幾何学模様 of 赤い本を出して俺に渡した。

「なんだこりゃ？」

「ふふ♪いずれ貴方の役に立ちし物でありけるよ。

では、さようなら」

「ああ、じゃあな」

手を振って別れを告げ、見えなくなつたところできつき手渡された本をもう一度見てみる。

するとその本のタイトルにこう書かれていた。

『炎の魔術』

「炎の魔術？」

なんだこれ？あの姉ちゃん厨二病なのか？

ま、一応樹に見せてみるか。

あいつならなにか知つてるかもしれねえし。

転生者がいたぐらいだしもしかしたら本当に魔術なんてものがあるのかもしれないな」

「さあ、実験開始だ」

「フツ、バカが、俺はローマ正教の所属、つまり魔術のことも知っているんだよ。」

だから魔術では俺の想像現象は攻略できんぞ」  
オールフェノメン

「誰が魔術だけを使うっていった？」

俺がこれからやるのはそれの一つ先の力だ」

「何?」

「灰は灰に」  
AshToAsh

「塵は塵に」  
DustToDust

「吸血殺しの紅十字」  
SquamousBloodRoad

さらに未元物質を合成、異世界の法則を未元物質と融合させることに…ゴフツ…成  
 功」

詠唱と共に俺の手にある三枚のルーン札が燃えて炎剣となり、さらに未元物質と融合

することで、白く輝く光剣へと昇華する。

クソ、副作用がここまで酷いとはな。

能力者が魔術を使うと全身が破裂するって樹が言ってたが、針小棒大に言ってたわけじゃなかったみたいだな。

「フツ、確かにある程度強力にはなったようだが…。」

合成する魔術がその程度のものなら大したことはないだろうな」

「なら、試してみるか？」

「良いだろう。その虚仮脅しの魔術もどきごと私の最強の技で消し去ってくれる！」

黒スーツは両腕を俺へ翳し、この世に存在する全ての色が混ざり、けれども混ざり切らず、それぞれの色が独立したような言葉では表現しようのない色彩の光線を照射した。

その光線は周囲に様々な科学現象を発生させながら真っ直ぐこちらへ向かってきた。

おそらくあれはアイツが現時点で扱える全ての現象を一条の光線に収束させたものなんだろう。

確かに凄い技だ。

未元物質だけじゃあ防ぐ事は出来なかっただろうな。

だが…

「この融合能力を破るにはちつとばかり役不足だな」

俺は未元物質で視力を強化したことによりゆつくりと迫り来るようにみえる光線を魔術と超能力を融合させて創り出した光剣で斬り裂いた。

「な、なんなんだ……それは…。」

……ふざけるなよ。

俺が、俺の能力が負けるはずはない！

そうさ！超能力と魔術の融合がなんだ！！

そんなものよりも俺の能力は強い！！

「そうか、ならもう一度試してみろ。」

そのご自慢の能力と俺の融合能力。

どちらが強いのか」

「死ね!!第二位イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!!」

「これで終いだ。クソツタレ」

瞬間、俺の光剣と黒スーツが生み出した青白い炎のような剣が正面から激突し、その際の衝撃波で周囲の地面を砕き、吹き飛ばしながらも数瞬拮抗するが、すぐに黒スーツの炎剣は光剣に切り裂かれ、そのまま光剣から出た光の斬撃により黒スーツは塵一つ残さず消し飛ばされた。

黒スーツを消し飛ばした斬撃は100mほど地面を抉り飛ばして消滅した。

黒スーツを倒したからか、周囲の歪んでいた空間も元に戻った。

「はあ、クソツ。血を流し過ぎたな。クラクラする。」

「……どうやらこれも時間切れみたいだな」

右手に握っていた光剣は限界がきたのか、糸が解けていくようにして崩壊していき、空気に溶けて消え去った。

俺は崩壊した光剣を握っていた右手を眺めて溜息を吐いた。

「まだまだ使いこなせていない証拠か。」

ま、ぶつつけ本番でこれならギリギリ及第点つてところか」

俺は近くにあった衛生管制センターの壁に凭れるように座り込み、ポケットからスマートフォンを取り出して第七学区の冥土<sup>ヘンキョウセンター</sup>帰しが勤務する病院へ電話した。

「衛生管制センターに重症患者一名だ。早く来い」

とだけ言い、通話をきってスマートフォンをポケットに戻した。

ちよつとだけ寝るとするか。

流石に……疲れ……た……。

## SIDE 三人称

窓も扉もないビルの天井に無数の管が張り巡らされた一室にて男にも女にも子供にも老人にも囚人にも聖人にも見える『人間』がいた。

『人間』——アレイスター・クロウリーは目の前に表示されている滞空回線アンダーラインによつて撮られたある録画映像を興味深気に見ていた。

「まさか彼女と関わらせるといふ切つ掛けを与えることでここまで短時間で飛躍的に進化するとはな…。」

これも未元物質が持つ無限の可能性故か…。

それとも…垣根帝督という人間の可能性故か…

そう、アレイスターが見ていた録画映像とは第23学区衛生管制センター前にて行われた垣根と黒スーツの男——渋柿宗真の戦闘映像だったのだ。

「どちらにせよ、これでプランの大幅な短縮ができる」

「しかし、問題もあるのでは？」

アレイスターの入っているピーカーの横にまるで空気かのような影の薄さで立っていた黒髪黒目、美形でも不細工でもない、背も高くなく、かと言って決して低い訳でもない、中肉中背で、強いて特徴を挙げるとすればその圧倒的なまでの無個性さが個性と



言えるような無表情の男は自信の内に生まれた問題の可能性を確かめるようにアレイスターに確認をとった。

「君が言っているのは未元物質の無限の可能性のことか？」

それとも如月樹を始めとする転生者達のことか？」

「両方です」

「どちらも問題はないさ。」

未元物質の無限の可能性は今回のように幾らか方向性を定めることができ、転生者達は強大な力を持っているものの、所詮は『ヒト』。

「これまで通り必要ならプランに組み込み、支障をきたすようなら排除するだけだ」

「そう、上手くいくでしょうか」

「いくとも。」

この程度の差異で崩壊するほど…、私のプランは安くない」

そう言って、アレイスターは映像を地下鉄へと切り替えた。

「さて、垣根帝督は超能力と魔術の融合能力という新たな領域を見せてくれたが、その切っ掛けとなった彼女はいったいどんな力を見せてくれるかな？」

## 第九話 勇者、悪魔の母と対峙する

S i d e 如月

地下の地下鉄道へとテロリストを追って降りてきた私は眼前の光景に驚愕した。

地下道の壁面には悪魔がよく使う、アラビア文字によく似た文字がびっしりと刻まれていて、等間隔に陰陽術で使うような札が張られていたのだ。

それらはおそらく陰陽術式の結界と何か別の魔術を組み合わせたものなのだろうと思う。

なぜなら結界の中心の地面に大きな魔法陣が描かれていてそれと直結しているからだ。

あれはいつたい何の為の魔法陣なんだろう。

嫌な予感しかないね。

「あら、もう追っ手が来ちゃったんだ」

地下道の奥の暗闇から一人の女性が歩いてきた。

その女性は綺麗な茶髪のセミロングに碧眼でエルフのように耳がとんがった端正な顔立ちをしていた。



それとこれは禁断症状じゃなくて貴女への怒りを抑えてるの!!い・か・り・を!!  
あと私の名前はリリスよ!」

(リリスって淫魔だよね?)

つてことは結局変態ビッチじゃない。

ていうか地の文にまでツツコミを入れるなんて凄いつツツコミセンスだね。リリス

……恐ろしい娘!!?)

まあ、これ以上時間をかけるとヤバそうだからツツコまないけど。

その証拠に地面に描かれた魔法陣の光がさつきより僅かに大きくなってるし。

「それより、貴女はいったい何をしようとしているの?」

目的は何?」

「フっ、私の目的はあの頃から何も変わっちゃいない。

私の目的はイブへの復讐。手段は、イブの子達、つまり今を生きる全人類を皆殺しに

することと私の子供達を殺した神々を皆殺しにすることよ。

そして最後は自身の子を無惨に殺されて傷心のイブを惨殺する。

フフフ♪あの駄神共も皮肉な物ね。

自らの愚かな行いが原因で全てを失うっていうんだから。

私なんていう危険な存在を転生なんてさせなければ少なくとも人類が絶滅の危機に

瀕するようなことにはならなかったでしょうに」

「そんなこと、この私がさせると思う？」

「思わないわね。

でも、それがどうしたの？」

貴女から感じられる魔力からして相当な使い手だつてことは分かる。

だけど、私の前じゃ単純な強さなんて意味を持たないのよ。

それに、私は魔法陣が発動するまで時間稼ぎをすれば良いだけだから無理して貴女に勝つ必要もないしね。

そのための手段がこの結界と魔法陣。

この魔法陣は発動すると無数の悪魔我が子を魔界より召喚するゲートとなるのよ。

ただ膨大な量の魔力を使うせいでもうどうしても発動に時間がかかっちゃうのよねえ。

まあそこは龍脈の上に描くことで龍脈と私の魔力を同時に注ぐことで短縮したんだけどね。

もともとは10時間ぐらいかかるんだけどこれのおかげで1時間で済みそうだわ。

しかも念のために張っていたこの結界のおかげでここで戦えば15分ほどにまで短縮できそう。

この結界は結界に伝わった衝撃、魔力などのあらゆるエネルギーを全て魔法陣発動のエネルギーに回す効果があるからね」

「なっ、悪魔召喚をする気!?!」

普通ならいくら龍脈の力を借りたとしても万単位で人間を生贄に捧げないと魔界と現世を繋ぐ大魔術なんて使えないけど、こいつはそんな大量の生贄なんて用意していない。

ということはこいつは自分自身の魔力だけでその万単位の生贄分の魔力を持つているってことか。

この圧倒的なまでの魔力量と動機からしてリリスって名前のチート転生者じゃなくて私と同じように、神話や異世界からそのときのままの状態で転生された不純物イレギュラーみたいなだね。

魔力関係の転生特典を貰って膨大な量の魔力を手に入れたパターンなら普通は『無限の魔力』を手に入れるだろうし。

うんそれにしても同じ名称だとややこしいなあ。

よし!リリスみたいなパターンのやつは天然不純物ネイチャーと呼ぶことにしよう。

それにしても、リリス:アダムの元妻にして悪魔の母:か。

相手が相手だし結界のせいで派手に戦えないから今回は衝撃が逃げないような繊細

な肉弾戦で行くしかなさそうかな。

「……貴方がどんな目にあつたか知ってるし、それでどんな気持ちになつたかもだいた想像できる。

復讐なんて意味がないものだなんて綺麗事を言うつもりもない。

だけど、それでも私は貴女を倒してこの世界を、私の大切な人を、護ってみせる」

「ハッ、何がどんな目にあつたか知ってるよ。

言つておくけど貴女の知識が伝承に基づく物だというならその知識は半分不正解よ」

「どういふこと？」

「まず第一に私は性行為のことでアダムと揉めてなんていないし、いろんな悪魔と好き好んで性行為をした訳でもないわ。

私はそんな尻軽女じゃない。

その証拠に見ての通り私の足は伝承では神に蛇に変えられていたけど実際はそんなことはなかったしね。

まあ毎日夥しい数の我が子を産まされてその内100人を殺されてたつてのは本当だけだ」

「……伝承が所々間違っているつてのは分かった。

もしかしたら貴女は本当はいい人でイブこそが本物の悪なのかもしれない。

でも、だからといってそれが私がここで貴女の行いを見過ごしていい理由にはならない

私も、これ以上大切なものを失うのは嫌だからね」

「フフフ、まあいいわ。」

邪魔をするというなら消すだけよ」

私は一気にリリスの懐に潜り込みビルをも一撃で粉碎するほどの左拳の突きを鳩尾に叩き込み、血を吐きながらくの字に折れ曲がつて吹き飛びそうになるリリスの右腕を右手で掴み引き留めながらそのまま右肘を顎に叩き込み、止めに顔面に渾身の左ストレートをぶち込んだ。

その衝撃で右腕が引き千切れたリリスはそのまま吹き飛びそうになるが、足を踏んでリリスの背後に空間魔法【ボックス】で空間に固定した50cm四方の透明な立方体を展開させることで阻止した。

それにより、リリスの体はバキゴキグキツ！という骨が折れる音を鳴らしながら立方体に凭れるようにしてへし折れた。

「フフ、魔法陣にエネルギーがいかないよう注意しながら戦ってるようじゃ私を倒す前に魔法陣への魔力供給が完了しちゃうわよ？」

「なっ!？」



リリースは傷など最初っから無かったかのように、手を使わずに腹筋だけで血まみれの身体を不気味に起き上がらせた。

血飛沫を撒き散らしながら引き千切れた右腕も何事もなかったかのように再生していた。

あれだけのダメージを受けたにも拘らず瞬時に再生するだなんて…。

流石は悪魔の母と言ったところね。

「いつまで足を踏んでるつもり？」

リリースは私に右拳を鳩尾に叩き込み、そのままその莫大な魔力を開放させて大爆発を起こした。

私はそれを瞬時に防御性魔法陣を展開して防ぐが、十枚ですらまだ足りず、防御性魔法陣を貫通した爆発の衝撃が私を吹き飛ばした。

リリースは追い打ちをかけるように私の方へ右手を翳してまるで歌を歌っているかのような流麗な呪文詠唱をし、魔法を発動した。

「さあ、地獄の苦しみの一端を味わいなさい。

地の底で血に塗れ、己が全てを理不尽に奪われた永遠の苦しみを味わう悲しき咎人は血が固まり塞がった喉をその圧倒的憎悪の叫びによりこじ開け、その叫びを天まで轟かせた。

『一血反吐吐く叫び《ブラッディスクリーム》』

リリスを中心として発生した断末魔の叫びのような大音響が亡霊の幻影と共に莫大な衝撃波となつて襲いかかつてくる。

私はそれを詠唱破棄した風魔法『レーレ』で自身の周囲を真空状態にして無効果した。にも拘らず何故か全身の骨が軋むようなダメージを受けた。

クツ！やっぱり物理法則なんて軽々と越えて来るか！

『血刀「ブルート」』

『硬剣「ドウーラ」！』

リリスは魔法で赤黒い血のような色合いの刀を創造、私は鋼色のロングソードをアイテムボックスから取り出し、互いに同時に動き、ちょうど魔法陣の真上で私の上から叩き斬るように振り下ろしたロングソードによる上段斬りとリリスの刀の掬い上げるような下段斬りが激突した。

「クツ！」

激突の勝者は私だった。

私の斬撃は当初の狙いである頭から逸れはしたものの、ブルートの  
ごと右腕を肘の辺りから切り落とした。

だけど、何かがおかしい。

魔術主体のリリスが接近戦勝負に出たこともそうだけど、なによりいくら苦手な接近戦であろうとあのリリスがここまであっさりとやられる訳がない。

明らかに手を抜いている。

ただどうして？

いくら不死に近い超速再生能力を持つといえどその命令を下す脳が破壊されれば超速再生できずに死ぬというのに……。

いや、待てよ。

どうしてリリスは本来完全に逸らすことができた斬撃を頭から逸らすだけにとどめた？

頭以外の一部を大きく損傷する必要があったのか？

……まさか!?

「気づいたようね。

……ただ……、もう遅い!!」

さつき切り落としたリリスの刀の先が一人で動き出して私の脇腹に突き刺さった。

「あ、あ、あああああつ!!」

リリスは私が痛みで声を上げた隙を狙って切断された右腕を勢い良く振って流れ出ている血を私の口に入れて、私は思わずその血を飲んでしまった。

「フッフッフッフ」

これで貴方の運命は私の思うがままよ」

「クソツッ！ やっぱり…、これが狙いだっただのね。」

かつて神の理不尽な神罰により毎日100人の我が子を殺された貴女が海に身を投げ自殺したことを悲しんだ、貴女を説得していた3人の天使が、貴女を蘇生させると同時に授けた、これから生まれる我が子の運命を男なら8日、女なら20日、私生児なら一生操ることができると授かったという貴女自身の伝承を基に作った魔術の下準備である貴女の血を私に飲ませるといふ行為を達成するために態と苦手な接近戦勝負に出て、さらに手を抜いたのね」

「フハツハハハハハ！」

そこまで賢いと気味が悪いわねえ。

フッフ、貴女の推論は徹頭徹尾正解よ。

私の魔術『血脈の宿命』はさつき貴女が言った伝承を基にしたもので、私の血を飲ませることで対象を我が子とし、男なら8日、女なら20日間操るといふ術式よ。

ちなみに私の血に加え、私と婚姻関係にない男の血も飲めばその者の運命を一生操ることができるわ。

だから私の血を飲んだ貴女の運命は既に私の支配下という訳よ。

貴女はなかなか楽しかったわ。

でも、私は忙しいの。

だから、そろそろ『死んでちょうだい』

『断る!!』

パライイイイイーン!

薄いガラスが割れるような音と共に私に掛かっていたリリスの魔術が破壊された。

「なっ!! 『血脈の宿命』が打ち消された!?! どうして!?!」

『血脈の宿命』には弱点があるからよ。

それは天使がリリスの気まぐれで人間達が苦しまぬようにと渡した天使の名を刻んだ護符。

正確に言えばその護符に宿った天使<sup>テレズマ</sup>の力が貴女の弱点よ」

「確かにこの魔術の弱点は天使<sup>テレズマ</sup>の力よ。

ただど一人の人間が集められる程度の天使<sup>テレズマ</sup>の力で完全に打ち消せるほど私の魔術は安くないわ。

そんなことができるのはそれこそ本物の天使ぐらいか聖なる右を持つ者ぐらい。

人間でこの魔術を打ち破るのはたとえ聖人でさえ不可能よ」

「うん、貴女の魔術は確かに人間一人が集められる天使<sup>テレズマ</sup>の力程度で完全に打ち消せるほ

ど安くはない。

「だけどね、さつき貴女自身が言ったように人間じゃなかったら、天使ならば打ち消せるんだよ」

「ハッ！自分が天使だとも言うつもり？」

「天使の象徴とも言える輪も翼も無いの？」

「いや、天使であつて天使ではないかな。」

「だつて私は天使とファイアのハーフだからね純粋な天使じゃないから通常時は翼を消すことが可能つてわけ」

私は背に左右一対計二枚の翼を展開させた。

「フッフ…、アツハツハツハツハ！」

「なあんだ、天使といつても所詮は大天使程度か。」

「熾天使じゃないならなんとかなりそうね。」

「それにファイアだかなんだか知らないけどそのせいで更に天使の力が弱まっているだろうしね」

「残念、私は大天使でも熾天使でもないよ。」

「そもそも貴女のいた世界と私がいた世界は違うものなんだから天使だつて違うものに決まつてるでしょ。」

私の父さんは私のいた世界の天使の最上級、『アンジェラス』の天使長で、母さんは炎のように赤い眼と髪が特徴の私の世界の最強種族『ファイア』で史上最強と謳われた冒険者よ。

だから弱まるどころか『アンジェラス』と『ファイア』両方の良い所取りをして更に強くなってるよ」

「フツ、どちらにせよ、私がやることは変わらないわ。

私は魔法を発動してこの世界と魔界を繋げ、復讐を果たしてみせる！」

リリスの魔力が桁違いに膨れ上がったかと思うと、リリスの目が碧眼から黒眼に変わり、黒目の中心には緋く光る正位置のKENのルーン文字が刻まれていた。

確か正位置のKENはダイナミックなエネルギーや情熱って意味があったね。

てことはあれはあの膨大な魔力の象徴ってことかな？

魔力が膨れ上がったのは魔法陣へ供給している魔力量を減らしたからだと思うし。

若しくはあのKENのルーン文字が魔力の総量を上昇させているのか。

いや、おそらくその両方か。

「そんなことはさせない。」

貴女を倒して絶対に阻止してみせる！」

私とリリスは互いに右手を相手へ翳し、詠唱を始めた。

「天におわす、万物を天法の下に裁く法の神エレアよ。

深き闇に飲まれた復讐の鬼を聖なる断罪の光で撃ち貫け」

「闇の暗泥は神の光をも飲み込み、ありとあらゆるものを喰らい尽くす」

「『シヤオ・バルガルド』

『フェアティルゲン・アツペティート』!!」

私は何億何兆という数の光の矢を一束にまとめて放ち、リリスは黒や茶色、紫という暗色をごちゃ混ぜにしたような色合いの泥の濁流を放った。

光の矢と濁流は一瞬の間拮抗したがすぐに濁流が押し勝って光の矢は呑まれた。

でも、この程度で終わるほどこの魔法は易くないよ！

「爆ぜろー！」

濁流に呑まれた光の矢はその言葉を合図に起爆し、内側から濁流を吹き飛ばした。

その時に発生した莫大な音と光によって一時的に視覚と聴覚を失なつて隙ができたリリスに向かつて天使の力テレスマを高密度に圧縮して拳に纏つた一撃を鳩尾に叩き込んだ。

「ガハッ！」

リリスは体をくの字に曲げて、口から血を吐いた。

私はそこに追撃として左フックを叩き込んだ。

だけど、拳はリリスが霞のようになって消えたせいで空を切った。



「視覚と聴覚を奪われても魔力を周囲に放出していれば感知できるのよ!!」

周囲の空間が罅割れ、そこから無数の触手が伸びて体を縛る。

だが相性が悪かったようで、触手は体を覆う天使テレスマの力に焼かれて一秒と経たず焼失した。

それでも一瞬の隙は生まれてしまい、リリスの蹴りが腹にめり込み、そのまま境界まで吹き飛ばされてしまった。

「ハア……ハア……ハア……」

「ハア……ハア……ハア……」

一撃一撃に全力をこめた戦闘は短期といえど消耗し、天使テレスマの力はまだ余裕があるけれど体力があと一撃分しか残ってはいなかった。

だけど、あの様子だとリリスも魔力の残りは少ないみたいだね…。

次の一撃が正真正銘最後の激突になる。

だから、その前に…

「ねえリリス、貴女に一つ聞きたいことがあるんだけど」

「……………なによ?」

「どうしてアダムとイブへの復讐じゃなくてイブへの復讐と言ったの?」

伝承では貴女はアダムのことでも天使の説得にも聞く耳を持たないで正式に別れるほ

ど嫌っていたはずだけど」

「それは違う!!!」

リリースは私の言葉に端正な顔を歪めて激怒した。

彼女は一度目を閉じて、自身を落ち着け、ゆっくりと語り出した。

「私とアダムは確かに正式に別れたわ。

だけど、それはイブの策略に追い詰められた末に断腸の思いで決めさせられたものなのよ」

「イブの策略?」

「…あいつは私の子供達とアダムを人質にとったのよ。

アダムと別れなければ子供達とアダムを殺すと言ってね。

だから私はアダムに貴方のことが嫌いになったから別れましょうって嘘をついて別れたのよ。

まあ、結局別れたせいで神クズの怒りを買って、子供達はみんな殺されてしまったんだけどね。

……だから私は決めたのよ。

たとえ悪魔の母になっても、これが結果的にアダムを苦しめることになったとしても!それでも!!あの忌々しいクズ女に私と同じ思いをさせて、その末に殺してやると





リリスの拳より早く私の拳がリリスの頬を捉え、地面へと叩きつけた。

地面に叩きつけられたリリスは魔力が切れたのか、背から噴出していた翼も消え、眼ももとの碧眼へと戻っていた。

悪魔召喚の魔法陣も核となる術者が倒れたせいか、スウーと消えて自然消滅していった。

「やつと…、終わった…」

「いえいえ、まだまだ始まってすらいませんよ。魔法世界の勇者さん」

「ツツツツツツ!!」

背後に濃厚な殺気を感じた私は咄嗟にリリスの倒れている方向へ飛びながら空中で体を捻って背後を見た。

「流星は勇者。殺気には敏感ですね」

そこには黒いロングジャケットを羽織った艶やかな藍色の長髪をうなじで縛った空色の瞳の男が不敵に笑んで立っていた。

「あれだけの殺気をぶつけられれば一般人でも気づくわよ。」

それより、貴方は何者?」

「私は…いえ、私達はA Anti-Original O。」

原作を破壊し、新たな世界を築く組織ですよ」

「アンチ…オリジン…」

私は警戒心を高め、戦闘態勢に入った。

「御安心下さい。今回私はリリスさんを引き取りに來ただけで戦闘をするつもりはありませんから」

「はい、そうですかかって素直に渡すと思ってるの?」

「虚勢は張らなくていいですよ。」

境界がなくなつた今、ここで戦えば地下道なんて簡単に崩落し、その上にある地下街や地上にも被害がでます。

そんな状況下では貴女は全力で戦えないでしょう

何よりリリスさんとの戦いで消耗した貴女にはもう私と戦えるほどの余力は残っていないでしょう」

「それでも私は退くわけにはいかないのよ。

どんな勝ち目がない状況でも護るべき者がいる限り戦い続ける。

それが勇者つてもんでしょ」

「愚かですね。

ですがその愚かさは、嫌いではありません」

男の右眼の瞳が空色から紋様の入った血のような赤黒い色に変わった。

その瞳を見た途端、私は一体どんな攻撃を受けたのかも分からぬまま意識を失った。

S I D E : 三人称

「魔法世界の勇者。

枷が掛けられているにも拘らず、大した武器も使わずしてここまでやるとは…、相変わらず桁外れの戦闘能力ですね」

彼は地に伏す如月を見下ろしながら、彼女とリリスの戦いを一部始終見た感想を一人呟いた。

そう、彼はあの戦闘をずっと見ていたのだ。

原初の女にして悪魔の母にも、魔法世界を救った勇者にも気づかれずに。

「組織の一員としては、ここで危険の芽を摘んでおいた方が良いでしょうが、今回の仕

事はあくまでリリースさんの引き取りだけですし、彼女のことは放っておきますか」

男はそう言って、倒れているリリースを持ち上げて肩に担いで、なんらかの力を用いて地面に漆黒の闇沼を現出させた。

その漆黒の沼にはまるで死後の世界と繋がっているような不気味さがあった。

「勇者よ。私達の中には何の信念も持たない強大な力を持っただけの小悪党もいます。

ですから、敵をも助けるだなんて思わず、モンスターを狩るようにただ殺すことだけを考えなければいくら魔王を倒した貴女と言えどAOには勝てませんよ」

男は既に意識のない彼女にそう言い残し、沼の中へと消え去った。

第七学区、窓のないビルにて、『人間』アレイスター・クロウリーは一つのディスプレイを眺めていた。

それは地下鉄道にて行われた如月とリリースの戦闘を記録したものだだった。

「ふむ、まさか異世界には天使とのハーフまで実在するとはな。

いや、それよりも気を引くのは神話や伝承に登場するもの達がこの世界に力を持ったまま転生していること、そしてそれらの大半を手中に収めるAOの存在か」

アレイスターが見ているディスプレイは場面が変わり、自らをAOと名乗った人物を



映し出していた。

「A Oを利用すれば更なるプランの短縮が可能となるだろう。

プランへ影響する行動をとるといふ危険性はあるが、それも修正可能な範囲に収めれば良い話だ」

それに対し、まるで空気かのような影の薄さの黒髪黒目、美形でも不細工でもない、背も高くなく、かと言って決して低い訳でもない、中肉中背で、強いて特徴を挙げるとすればその圧倒的なまでの無個性さが個性と言えりような無表情の男——佐藤浩二（イレギュラー）は「不純物は単体、もしくはは小組織程度なら対処できるでしょう。

しかし、A Oはおそらく大組織です。

それも、下っ端ですらLevel 5第三位以下相当の力を所持しているほどの。

そんな大きな爆弾をプランに組み込んでも本当に大丈夫なのでしょうか」

「問題ない。如月樹を上手く使えば充分対処できるさ。彼女が動けば彼女が救った人々も彼女を護ろうと様々な形で動くからな。それにいざという時は私が直接手を加えれば済む話だ」

「……そうですね」

アレイスターはディスプレイを閉じ、別の新たなディスプレイを展開し、作業を進めていった。

## 第十話 勇者、全てを打ち明ける。

9月2日

気がつけば私は綺麗な湖畔にいた。

あれ？デジャヴユ？

こんな超展開前にもあつたよね？

「久しぶりだな。樹」

声がした方を見てみると、そこには案の定私を転生させた白スーツ姿の金髪碧眼の神、トールが湖面に立っていた。

「やっぱりここに呼んだのはトールだったんだね」

「ああ、そろそろ転生時に掛けたリミッターを外そうと思つてな」

「な〜んか思つたように力が出ないと思つたらそんなことしてたんだね。」

でもどうしてリミッターなんて掛けたの？」

「お前の力は強過ぎたからな。」

そのままの状態では俺が使つた湖型の転生門では安全に転生させることができなかつたんだ」

「湖型のつてことは、転生門って幾つかの種類があるの?」

「ああ。湖型と門型の二つがあつて、門型は主神クラスのみが使える特別製で、どんなに力が大きくても制限しないで転生させることができ、湖型は主神クラス以下が使うモノでその性能上あまりにも強大な力を持つ者をそのまま転生させると転生門に異常が現れて転生中の者の魂が破壊されたり記憶がなくなったり、世界にも歪みを生じさせてしまうんだ。」

所謂キャパシティオーバーつてやつだな。

だから一時的にお前の力を封じさせてもらったんだ」  
「なるほど。」

ならこれからはフルパワーを出せるようになるつてこと?」

「いや、それは無理だ。」

いきなりそうしてしまうとお前の身体が崩壊してしまうからな。だからリミッターを外す時間に制限を設けさせてもらった。」

こうして少しずつ身体を慣らしていつて、最終的には常にフルパワーを出せる状態にするつて寸法だ」

「そっか…。」

それじゃ、時間制限つてほしいどれくらいなの?」

「今の所一日30分つてとこだな。」

「だけど、時が経って身体が慣れればもつと長い時間リミッターを外すことができるようになる。」

「ちなみに制限時間になると自動的に制限がかかるようになってるから」

「30分か…。今は短いけどそのうち長くなっていくんだし問題無いか…。」

「ところでそのリミッターってどうすれば外せるの？」

「制限時間付きつてことは手動でしょ？」

「ああ。」

「リミッターはこの装置を使って解除することができる」

「そう言つてツールはズボンのポケットから腕時計のような物を取り出して私に投げ渡した。」

「それをキャッチしてよく見てみると、基本の形状は腕時計まんまで、本来時計盤がある場所にはデジタル式タイマーが組み込まれていた。」

「それは制限解除装置リミットブレイカーといつて、そのタイマーの側面にスイッチがあるだろう」

「腕時計のタイマーの側面を見てみるとそこには確かに小さなスイッチが一つあつた。」

「それを押せばタイマーが起動、つまり制限解除状態になる。」

「途中で止めたければもう一度スイッチを押せば止まる。」

起動時は盤面が赤に、停止時は緑に発光してるから分かりやすくいいだろう？

ちなみにもし発光を止めたかったらスイッチをカチカチつと二連続で押せば発光しなくなってもう一度二連続で押せばまた発光するようになる」

「うくん、確かに便利だけど腕時計型だと戦闘中にすぐ壊れちゃうんじゃない？」  
「その心配はない。」

なぜならその装置には神々の護りがかかっているからな。護りを掛けた本人である俺達神々の全力の総攻撃でもなければ傷一つ付かず、威力ではなく性質、例えば、球磨川オールフイクンの大嘘憑きで無かったことにすることもできないような代物だからな」

「エゲツないね」

呆れて苦笑いしかできないよ…。

「でも、それなら心配はいらなさそうだね。」

「ありがとう。こんな良いものをくれて」

「礼を言われるようなことはしてないよ。」

樹の力を勝手に抑えたのは俺達なんだからこれぐらいして当然だ」

本当、いい人達…いや、いい神達だよ。」

ん？なんだろう？だんだん周りの景色が霞んできた？

「そろそろお目覚めの時間みたいだな。」

最後に伝えておく。

「以前不純物イレギュラーが存在するだけで世界は壊れていくと言ったがあれには語弊がある。

正確には不純物イレギュラーがその力を悪用すれば悪い方向性に原作が壊れるんだ」

「でも以前不純物イレギュラーは不正ルートで転生したから世界に影響がでるんだって言ったじゃない」

「ああ、俺もそう思っていたがどうやらこの世界は俺が思ったよりも強かったみたいだ。俺が手を加えたつてのもあるだろうが…。」

まあそんな訳で不正ルートを使った転生による世界の歪みはなくなったからそれについての心配はいらねえ。

真に警戒すべきはAアンチオリジンOだ。

もし奴等の思惑通りに事が運べば原作は間違いなく崩壊し、世界は高い確率で破滅する」

「そっか。分かった。

それじゃ私はAOを潰せばいいんだね？」

「ああ。だが幾らお前でも一人で潰すのは不可能だ。

だから、焦らずに慎重に行けよ。

「お前が無茶すると心配する奴がいるつてことを忘れるな」

そうだね。ていとくんはああ見えてすつごく心配性で淋しがり屋だから私がいてあげないとね。

「うん、分かった。

じゃあまたね。トール」

「ああ、またな」

気が付くとベッドに寝かされた状態で真つ白な天井を見上げていた。

「知らない天井だ」

一度は言ってみたかったんだよね。このセリフ。

「起きて早々ネタに走ってんじゃねえよ」

彼の声がして寝ころんだまま顔を右に向けて見てみるとそこには全身包帯だらけのていとくんがいた。

「ちよっ！ていとくん!?!大丈夫なのその傷!?!」

私は慌ててベッドから降りてていとくんに駆け寄った。

「たいしたことねえよ」

「たいしたことなくないよ！」

…ん？魔力の残痕…？

ねえ、ていとくん。魔術使ったでしょ？」

ていとくんの身体に僅かに残っていた魔力の残痕を見つけた私は威圧感を出すために殺気を出しながら満面の笑みで尋ねた。

もちろん目は全く笑っていない。

「い…いや…、…はい、使いました」

「はあ、あれほど注意したのに。」

まあ、いいよ。許してあげる。

でも、これからは極力使わないようにね。

あれは諸刃の剣なんだから」

「分かったよ。副作用への対抗策を思いつくまでは極力控える」

「え、魔術使用の副作用への対抗策なんてできるの？」

「できないことはねえだろうな。」

クソムカつく木原によれば俺の未元物質には無限の可能性があるらしいからな」

「改めて未元物質のドチート加減を思い知ったよ」

「分かったらお前もとつとと寝ろ。」

「一応お前も怪我人だろうが」



「うん。そうする。」

心配してくれてありがとうね」

私が笑顔でそう言うといとくんは頬を赤く染めて照れながら

「心配なんざしてねえ」

といつて布団に包まって眠った。

まったく、可愛いなあていとくんは。

私はほっこりとした気持ちでベッドに戻り、再び眠りについた。

9月8日

私達は無事退院し、日常へと戻っていた。

朝起きて歯を磨き、準備を整えたら学校へ行つて授業を受けたり友達と遊んだりして  
過ごし、学校が終わって帰るとそこには本来いるはずのないいとくんがお迎え……  
うん、不法侵入だね☆

「よう、お帰り」

「うん！ただいま……じゃなあああい！！」

どうやって入ったとか今更聞かないよ。どうせそのチート能力を使って入ったんだ

ろうし。

でもね、不法侵入っていうのは犯罪なんだよ？犯・罪。分かってる!?

ていうか犯罪以前に女の子の部屋に無断で侵入するってのは常識的にどうよ」

「まあそう怒るなつて。」

次からは気をつけるからよ」

「はあ、しようがないなあ。もう。」

で、何の用なの？」

「俺に魔法と魔術について教えてくれねえか？それとお前や転生者についても」

げっ、私や転生者について隠し事があることバレてるし！

とりあえず誤魔化さないと。

「魔法と魔術についてなら教えてあげるけど、私や転生者のことは既に教えたでしょ？」

「部分的に、だろ。」

俺が教えてもらったのはこの世界にはあらゆる世界線のあらゆる時間軸からの転生者がいて、そいつらは皆途轍もない力や異世界の能力を持っていることと、そいつらの中でも不純物イレギュラーって奴らはそのほとんどが悪党でこの世界に存在するだけで世界が崩壊するつてことだけだ」

ああ〜やっぱりていとくんに隠し事は無理か〜。

仕方ない。ていとくんなら大丈夫だろうしこの際全部教えるか。

私の部屋には滞空回線アンダーラインは存在しないようにしてるからアレイスターにはバレないだろうし。

「分かったよ。全部教える」

そう言つて私は全てをていとくんに教えた。

転生者のこと、不純物イレギュラーのこと、原作のこと、私のこと、全て包み隠さず…。

「……………俄かに信じ難いが、お前がこんな真剣な場面で冗談を言うような奴じゃねえつてことぐらい知ってるからな、全て事実なんだろうな」

「シヨック……………だった？」

「いや、全く。」

原作という定まった運命があるとはいえそれは主人公である上条当麻を中心にしたものだからはつきり言つて俺にはあまり関係ねえからな。

それにその原作つてのは幾つもある未来の内の本来迎るべき正しい未来つてだけで絶対的な運命つて訳じゃあねえみたいだしな。

利用できそうではあるが、俺からしたらその程度の価値しかねえ。

それよりも俺はその魔法つてのを知りたくなつたな。

超能力と魔術と魔法、三つの異能の力を融合させたら更に凄いモノができそうだし魔

法の理論は超能力にも応用できそうだからな」

「シヨックを受けてないみたいで安心したよ。」

魔法を教えるのはいいけどハッキリ言つて魔法つていうものは超能力みたい才能次第だから必ずしも使えるようになるとは限らないよ。

仮に使えたとしても微々たる力つていうのも私の世界では珍しくなかつたし」

「つたく原作を知つてるならお前も知つてるだろう？」

「俺の未元物質に常識は通用しねえ。」

そして、その未元物質を発現させた俺の才能にも常識なんざ通用しねえんだよ。

だから必ず使える。いや、使いこなしてやる」

その時、私は一瞬だけポカーンとしていたと思う。

だって前世でもいろんな人と出会つてきたけど、こんなにも才能と自信に溢れて輝いてる人は見たことなかつたもん。

そうだね、ていとくんなら絶対に使える。使いこなせるよ。

「ふふ、分かつたよ。」

「ビシバシいくから覚悟してね」

「ああ、魔法も魔術もすぐにもものにしてやるよ」

魔法世界一の魔法使いにして最強の勇者が教えるんだから半端は許さないんだから

ね  
!

# 第十一話 勇者、魔法を教える。

SIDE 三人称

如月はリビングに置いてある机に垣根と向かい合うようにして座り、魔法の授業を始めようとしていた。

「じゃ、まずは魔力を感じる所から始めようか」

「え、今からやるのか？」

「どうせまだ夕飯までには時間があるからね」

「それもそうか。」

で、どうすればいいんだ？」

「こう、身体の内を血管のように全身を廻っているエネルギーを見つけ出して掌に集めてみて」

と、如月は身振り手振りを加えながら教えた。

(身体の内を廻っているエネルギー……ねえ。

……これか？とりあえずこれを掌に集めるイメージをしてみるか)

すると、垣根の掌に薄っすらと無色の靄が発生した。

感じとしてはストーブをつけた際に起きる空気の揺らぎを思い浮かべると分かりやすいだろう。

だがここで魔力を使用した際に生じる副作用が発生し、垣根の脇腹に血が滲んだ。

「わっ、ていとくん早く魔力止めて！」

そう言われて垣根は慌てて魔力生成を中断した。

如月は垣根の傷を回復魔法で治癒した。

「でも、こんなに早くできるなんて凄いよ！」

これだけで才能があっても二日は掛かると思ってたのに」

「へえ、てことは俺には結構才能があるってことか。」

樹もこんな一瞬でできたのか？」

「ふふん、まあね♪」

しかも、私は2歳頃には親に教えてもらおう前にもう魔法を使えたよ。

簡単な初歩中の初歩だけだね。

それより、魔力を感じる事ができたなら次は魔力について教えるね。

あ、先に言っておくけどこれから教える魔力は魔法を使う際に使用する魔力であって魔術を使う際に使用する魔力とは全く別物だからね。

魔法を使う時に使用する魔力はもともと身体の中にある魔力を引き出して使うけど、魔術を使う時に使用する魔力は生命力を魔力に精製して得るからね。

で、話を戻すけど魔力っていうのは科学で言うところのエネルギーでね、魔力を超高密度に圧縮するとマナっていう科学で言う分子にあたるものができるの。

ちなみにそのマナを構成する原子にあたるもののことを魔素って言って、これは通常魔素単体では自然界には存在しないんだ。

魔法世界でもこの世界でも自然界に存在するのは魔力とマナだけ。

それで、基本的な利用方法は魔力はそのままマナにならない、もしくは一部だけマナ化させる程度に高密度に圧縮して放ったり、単純に魔法のエネルギーとして使ったりして、マナは盾や剣などの武器にしたりと言った武器系の利用方法だね。

魔力についてはこんな感じだけど何か質問でもある？」

垣根は暫し瞳を閉じて俯いた。

先の説明を頭の中で反芻し、質問の内容を整理しているのだろう。

脳内整理を終えた垣根は瞼を上げて如月に質問をした。

「まず一つ目の質問だがマナを解離させて魔素を抽出することは可能か？」

「それはできないよ。」

マナを解離させると解離したマナは不安定になって周囲にある固体を無差別に魔素



へと強制変換して安定しようとして、解離して単体となった魔素は爆発して魔力になるの」

「……そうか。まあそれはそれで利用できそうだな。

それで最後の質問だが、マナは魔素が幾つどんな感じに繋がって構成されているんだ？」

「マナは魔素三つが共有結合で繋がって構成されてるよ。

それじゃ、質問タイム終了だけど、今のところ理解できてる？」

「当たり前だ、この程度Level 5なら余裕だっつの」

「ふふ、じゃあ次は魔法について教えるね。

魔法は大きく「属性魔法」、「陣術」、「結界術」、無属性魔法の四つに分けられるの。

まず、属性魔法は発動したい魔法と合致した属性に魔力を変換して、その魔力でイメージを構築すれば発動する。

変換できる魔力の属性は炎、水、樹木、大地、雷、風、光、闇の8種類で、それぞれ属性色というものを持っていて、さっきの順番通りに言うとう赤、青、緑、茶、黄、銀、金、黒となり、変換方法は単純に魔力を属性色に変えるイメージをすれば変えることができる。

次に、陣術は魔力、もしくはマナで魔法陣を描くことで色々な魔法を発動することができる。

これについては口で説明しても良く分からないだろうし種類も豊富だからまた今度詳しく纏めた本を渡すよ。

で、次は結界術だけど、まあ簡単に説明すれば陣術を結界専門に昇華させた魔法で陣の他に魔法的意味を持つ支柱とか龍脈を利用したりするね。

これもあとで法則性を記した本を渡すよ。

最後に無属性魔法だけど、これは使用方法は属性魔法と同様イメージが主で、違うのは魔力を属性魔力に変換せずそのままの状態で使用することだよ。

ちなみに、例を挙げるとすれば時空魔法や音魔法、精神魔法に錬金術とかがあるね。

それじゃ、質問ある？」

「その陣術つてのは予め魔力を通す性質の物質で札とかに陣を書いといて使用時に魔力を流して使うってことはできるか？」

「できるよ。その方法は魔法世界にもあったしね。」

魔力伝導率の高い物質には銀や金などの貴金属が多いけどたぶんていとくんの未元物質でも代用できるはずだよ」

「そうか。」

じゃあ次の質問だが魔法の効力を高めるにはどうすればいいんだ？」

「それはいろいろな方法があるよ。」

例えば、魔力の質と量と密度を上げたり、呪文を長く唱えたり、身体に陣を描いて自身の魔力の質と最大量そのものを上げたりとか」

「その呪文にも何か法則性はあるのか？」

「うん。だけどこれはそんなに難しく考える必要はないよ。」

ただ発動する魔法に関する魔法的な意味を持つ言葉を唱えるだけでいいからね。」

例を挙げればこんな感じかな。」

我、深淵の闇を晴らす光求む。」

光、邪気をも祓う力強さを持つ。「ホーリーライト」

如月が呪文を唱え終えると、如月が天井を指差すように掲げていた指先から淡く神々しい輝きを放つ光球が現れた。」

「どう、分かった？」

如月は指先の光球を消して尋ねた。」

「ああ、法則性も雰囲気も理解した。」

基礎知識は身についたろうから次は実践か？」

「正確には実践形式の基礎訓練だけだね。でも、今日はもう遅いからそれはまた今度ね」

と如月は立ち上がりながら言った。

それに対し垣根はさも当然かのように

「分かった。それじゃ夕飯楽しみにしてるぜ」

とほざいた。

如月は垣根のその言葉に一瞬思考停止したが、すぐに諦めた。

もうこのパターンには慣れっこだった。

と言うのもこれまでも垣根は幾度となく部屋を訪ねてきて『飯作って〜』とせがんで来ていたからである。

普通はどうやって住所特定したんだよと思うが、垣根は趣味と仕事でハッキングをしており、その腕前は持ち前の才能と頭脳を發揮し、グルの領域にまで達している。

そのため、垣根にとつてバンクから誰にも気づかれずにデータを盗み見ることなど赤子の手を捻るようなものである。

と言つても如月の住所を調べた時はゴールキーパー守護神に見つかつてしまったせいで少々苦勞したのだが。

「夕飯食べたらちゃんと帰ってね。」

流石にお泊りは許さないからね」

「ああ、夕飯期待してるぜ」

如月はその言葉に嬉しくなって赤くなった顔を見られないように後ろを向いてエプロンを付けてそのままキッチンに向かった。

## 第十二話 垣根、最終試験に臨む

9月13日

SIDE 垣根

この日、俺は学校をサボって、樹の部屋の中の一室を樹の時空魔法で改造した空間で全身を銀色の甲冑で覆われた一人の騎士と向かい合っていた。

なぜこんなことになっているかと言うと、事の始まりは今朝のことだ。

「今日は学校サボってね、ていとくん」

俺がいつも通り一緒に登校するために樹の部屋に樹を迎えに来ると開口一番そう言われた。

「あゝ、一応聞くけど理由は？」

「今日はいとくんに最終試験を用意したからそれに挑戦して欲しいの。」

でも今回の試験は下手をすると死んじゃうかもしれないから拒否してもいいんだけど…、どうする？」

樹の言葉から推測できるように俺は今までも幾つかの試験を受けてきていた。

その内容は樹が時空魔法に属する召喚魔法という分類の魔法で召喚した、音速を軽く越えた速度で動き回る猫の魔物に魔法を当てるといったものや、先と同様樹が召喚した身体がとてつもなく硬い巨大な亀の魔物を倒すというものだったり様々だ。

ちなみに、超能力者が魔法を使った際の副作用だがこれは魔術同様身体から血を吹き出すといったものだった。

これもいつかは克服しねえとな。

それはともかく  
閑話休題。

「そんなもん受けるに決まってるだろ」

「…分かった。それじゃあ準備ができたらいつものリビングにある扉から私の作った異空間に入って最終試験を受けておいてね。」

あと、今回の試験の内容と合否はその対戦相手がしてくれるから」

「ああ、分かった」

俺は試験部屋に入るために樹に背を向けた。

「それじゃ…、…いつてらっしゃい」

「…ああ、いつてくる」

俺は背後から聞こえてきた不安気な樹の声に首だけ振り返り、安心させるために微笑んで出立の挨拶をして試験の部屋へと入った。

ということがあつて俺は今、樹が創った所々地面が隆起しているサバンナで樹が召喚していた騎士と向かい合っている。

今回は内容は対戦相手から知らされるって言うたが、こいつがその対戦相手ってことでもいいんだよな？

「私の名は騎士王ナイト・オウ・ナイッ、全世界線の全ての騎士の力を扱う能力を持っている」

喋れたのかよ!!

入ってからずっと黙ってるから喋れねえのかと思つてたぜ。

「垣根帝督、今回の試験名は『限越死闘』」

勝利条件は私を倒すこと、敗北条件は貴公が死ぬことだ。



手段は問わない。

だが断言しよう。

超能力、魔術、魔法、貴公の持ち得る全ての力を使い、尚且つこれまでの限界を越えなければ私には決して勝つことはできないと」

ハッ、面白え。やってやろうじゃねえか。

S I D E 三人称

「悪いが、俺はまだまだ強くならなきゃならねえんだ。

だから、お前も俺の踏み台として越えさせてもらうぜ」

「その心意気や良し。死に物狂いでかかってくるがよい」

垣根は未元物質で体長10m程の白いカブトムシを合計30体創造し、騎士王へと向かわせた。

そのカブトムシ達は、原作新約とある魔術の禁書目録第六巻にて復活した垣根帝督が用いていたものと見た目は同じものだった。

そのカブトムシ達の原作との相違点はたった一発の砲弾が学園都市製の核シエルトーを粉々に粉碎するほどの砲の威力と一体一体が能力を使えるという点だ。

「そいつらは全員電撃使用の<sup>エレクトロマスター</sup>Level3で俺と同一の脳波を持っている。

つまり、そいつらは妹<sup>シスター</sup>達同様電氣的ネットワークで繋がっていて瞬時に細かい指示を出し合える上に演算能力も上がっていて実質一体一体がLevel4クラスの力を持つてゐることだ。

で、これに対して騎士王はどう出る？」

瞬間、カブトムシ達は騎士王を取り囲み、そのツノ型のスプリング式砲による全方位同時砲撃を開始した。

さらにカブトムシ達はそこに能力による電撃も加えた。

騎士王がいた地点がその圧倒的蹂躪により土煙で埋め尽くされていく。

しかし、一閃。

その騎士王が放ったであろうたった一閃で全ての砲弾と電撃が切り裂かれ、その延長線上にいた大量のカブトムシ達もまとめて切り裂かれた。

「次は私の番だ。」

参照、【ヨハネの黙示録第一の騎士】

能力は【射出】だ」

そう騎士王が言った途端、騎士王の全身を包み隠す甲冑が銀から白濁とした色へと変

化した。

騎士王は垣根へ手を翳した。

それを合図としたかのように地面が滑らかに隆起し、矢の如く射出された。

垣根はそれを2対の翼を繭のように変化させて防ぎながら残りの1対の翼で飛翔した。

無数の大地の矢はそれをどこまでもしつこく追尾する。

「チツ、うぎつてえんだよ!!」

垣根は翼を大きく振るい、空気の壁を生じさせて襲い来る無数の大地の矢を全て叩き潰した。

「では、こんなものはどうだ？」

突如、垣根を巨大な影が覆い尽くした。

「まさか!？」

垣根は咄嗟に上を向くと、そこにはおよそ直径20mはあろう巨大な隕石が見えた。

射出の能力により、騎士王が宇宙空間から射出したのだ。

「洒落になんねえぞオイ！」

垣根は莫大な量の魔力を副作用で血反吐を吐き、全身から血を流しながらも放出し、その全てをマナに変換した。

垣根は更にそこからマナを解離させて不安定な状態にし、その不安定なマナを隕石にぶつけた。

不安定なマナが接触した隕石はどんどん魔素へと強制変換されていくが全てを変換することはできなかつた。

だが、

「それで充分だクソツタレ」

垣根は未元物質と化合させて爆発を防いでいた初めに解離させていた魔素で隕石を覆うと同時に解離し、起爆させた。

魔素の爆発に吞まれた隕石は元々不安定なマナにより小さくなっていたこともあり、完全に砕け散り塵となった。

「参照【ヨハネの黙示録第二の騎士】。能力は【破壊】。

上ばかり見ていると足下を掬われるぞ？」

声が聞こえたと同時に言い知れぬ感覚に襲われた垣根は咄嗟に翼を羽ばたかせて右に回避した。

すると垣根が先程までいた空間を炎が飲み込んだ。

その炎は先の隕石と比べてもなお大きく、回避しきれずに当たった左翼が焼け落ちた。

垣根は未元物質で創った、この世界の物理法則が全く通じない翼を焼き尽くすというその現象に驚愕しながらも、左翼再構築の演算を済ませて左翼を再生させた。

破壊の炎の出処、騎士王を見ると、その鎧は先程の白濁とした色から荒々しい紅蓮へと変化していた。

「そつちこそ俺ばつか見ていていいの？」

「……ツ！」

空の彼方で光が見えたと思った瞬間、騎士王に無数の光弾が降り注いだ。

それは垣根が超高高度で隕石を魔力の応用で破壊した際に生じた魔力やマナで描いた巨大な魔法陣から発せられた魔法だった。

その魔法は一発一発が小隕石と同等の威力を持っており、それを雨のように降り注がせるといふ強力なものだが、その分難易度は高く、それを短期間学んだだけで実践で使いこなす垣根はやはり天才なのだろう。

だが、

それでも、

騎士王はそんな雨の中、平然としていた。

「参照、『ヨハネの黙示録第三の騎士』。能力は【制限】」

騎士王の鎧が荒々しい紅蓮から薄暗い夜黒へと変化していた。

『ヨハネの黙示録第三の騎士』の能力、『制限』は視認したありとあらゆるものを制限するとうものだった。

騎士王はそれにより、体表面に当たる隕石の雨一つ一つの威力を制限することでそれを完璧に防ぎきっていたのだ。

だが、逆に言えば視認出来なければ制限することはできないのだ。

「……………」

垣根はその強力な魔法さえもただの囷としてしか意味はないと分かっていたからこそ油断せず、その弾幕を防いで騎士王が油断しているその隙を突き、目に見えない分子レベルの未元物質を瞬時に集めて目を覆うことで視界を潰すことに成功した。

偶然にも弱点を突いて第三の騎士の能力を封じた垣根は止めとばかりに未だ光弾の雨に曝されている騎士王へ全方位から未元物質の槍を同時に射出した。

「参照、『ヨハネの黙示録第四の騎士』。能力は、……………【死滅】」

騎士王を貫かんと高速射出された未元物質の槍や目を覆い隠していた未元物質、空か

ら降り注いでいた光弾の雨は甲冑の色を薄暗い夜黒から死を匂わせる不気味な蒼白へと変化させた騎士王の体を覆うように現れた甲冑と同色の青白い霧のようなものに触れた途端、ボロボロと崩れ、死に絶えた。

騎士王の体から漂っていた青白い霧は突如爆発的にその勢いを増し、柱のように空へと昇っていき、上空の光弾の魔方陣を死滅させた。

空へと昇った青白い霧の柱は大樹のように枝分かかれし、そのまま蛇のような動きで垣根へ襲いかかった。

垣根は翼を全力で羽ばたかせて羽の弾幕を張りながら青白い霧から逃げるが、青白い霧はそんなものの障害にすらならぬとばかりに問答無用で羽の弾幕をボロボロに崩し殺しながら距離をドンドンと詰めてきていた。

「チツ、仕方ねえ」

垣根は副作用で血管がブチ切れていくのを堪えながら空間転移魔法を完成させ、騎士王の背後の上空に転移した。

そしてそのままダメ元で、辺りを見回して垣根を探している騎士王に未元物質製の長い純白のネジを大量に射出した。

それは先のように騎士王を覆っている青白い霧によって死滅すると思われた。

しかし、大量に飛来するネジを空気の流れて感知して振り返った騎士王はそれを青白

い霧で防がずに、右手に持つ刃渡り180cmのロングソードで弾いて防いだ。

それどころかさつきまで身体を覆っていた青白い霧は跡形もなく消え去り、甲冑も死を匂わせる不気味な蒼白から元の騎士然とした銀色に戻っていた。

(こいつ…、なんでいきなりあの厄介な青白い霧を消したんだ?)

あれなら確実に防げただけじゃなく俺を殺すことだって容易にできたはず…。

もしかして、一つ一つの能力に制限時間があつて、青白い霧は消したんじゃない、制限時間がきたせいで消えたのか?

だとしたら辻褄が合うな。

体感時間からしてあいつの一つ一つの能力の制限時間は大体3分つてところか。

何はともあれ、新しい能力に切り替える前に倒さねえとどっちみち勝機はなさそうだな)

コンマレベルの高速思考で騎士王の能力の弱点を見破った垣根は翼を全力で羽ばたかせて、未元物質を纏うことで空気抵抗を減らすことでマツハ5というバカげた速度を出して騎士王に迫った。

それにより新しい能力に切り替える間がなくなった騎士王は能力を諦めて自身の剣術で迎え討つことを決めた。

直後、騎士王のロングソードと垣根の翼が激突した。



ロングソードと翼が激突した際に生じた衝撃波は辺りの岩や木を吹き飛ばし、地盤すら割り、殺風景だったサバンナをより一層荒れ果てたものにした。

勿論、二人はその一撃では終わらず、常人なら目視すらできないような圧倒的な速度で移動しながら互いに攻撃を交わしていた。

ドガツガキグキュズガツゴツガンガンゴガツバキッドゴツキンキャキツゴバア!!!

垣根の翼が騎士王の剣を防ぎ、その隙に余った翼で騎士王に斬りつけ、それを騎士王が剣で受け流し、ビルをも一撃で粉碎するほどの回し蹴りを叩き込み、垣根はそれをしゃがんで躲しながら翼を鈍器のようにして回し蹴りによって背を晒した騎士王に叩きつけ、騎士王がそれを剣を背にまわして盾にして防ぎ、と互角の攻防を繰り広げていた。

だが、その互角の攻防は遂に終わりを告げた。

騎士王がダメージ覚悟で垣根を遠くへ蹴り飛ばしたのだ。

それにより垣根の鈍器と化した翼が当たるが、身体を逸らすことで直撃は避けていた。

そして騎士王はこのチャンス逃すまいと、高速で能力をダウンロードした。

「参照！【太陽の騎士】！」

新しい能力をダウンロードした騎士王は銀色の甲冑姿から、太陽のようなゆらゆらと



熱を遮断するために熱を一切通さない性質を持つ未元物質の翼で身体を一切の隙間なく覆い尽くすが、それでも尚、熱は翼越しに容赦無く襲い掛かり、垣根の皮膚を、眼球を、毛髪を、次々と蒸発させていった。

余りの激痛に悶え苦しみ、翼の中で暴れ回るが、それは自身の身が滅ぶのを促すだけで、痛みは引くどころかさらに激しいものとなった。

眼球を支える筋肉が熱で溶けてその力を失ったことでドロつと溶けた眼球が零れ落ち、暴れた時の衝撃で、熱で溶けて脆くなった右脚と左腕が千切れた。

本来その断面から噴き出す筈の血液は騎士王と周囲の世界が発する圧倒的な、理不尽なまでの熱量によつて赤黒い水蒸気と化す。

(クソ、俺は……、こんなところで終わる訳にはいかねえつてのに。

強くなって、いつも独りで戦おうとするアイツを助けるつて決めたのに……)

「……………い……………つ……………き……………」

熱により酸素が薄く、意識が朦朧とし、更に喉を焼かれたことで本来なら一言も発せない中で、垣根は自分を救ってくれた、垣根が常に側で護つてやりたいと唯一想う最愛の女性の名を口にした。

「まったく、お前が死んだら誰が樹を支えるっていうんだ。」

突然、声が聞こえたと思い顔を上げると、そこには綺麗な湖畔が広がっており、湖の上には白いスーツを着た金髪の男がいた。

そして何故か自分の周りを覆うように展開していた翼がなくなっていて、身体も傷一つなくなっていた。

「俺は……、死んだのか？」

垣根は立ち上がって、湖面に立つ男にそう問い掛けると、金髪の男は首を横に振って否定した。

「お前が死にそうだったから意識だけをこの空間に呼んだんだ。」

ちなみにここにいる間はお前がいた世界の時間は進まないから安心するといい」

「どうして俺をここへ呼んだ？」

「俺が何者かは聞かないんだな」

「聞く必要がねえからな」

「…単にお前に死なれると困るからだよ。」

彼奴の心の支えとなれるものはありとあらゆる平行世界、時間軸を見てもお前しかい

ないんだよ。垣根帝督。

だから、なんとしてでも生き残れ。こんなところでくたばったら俺は一生お前を許さないからな」

「ハっ、せいぜい神の怒りを買わないよう、足掻いてみせるさ」

そう言った瞬間、金髪の男の表情は驚愕に染まった。

「気づいていたのか」

「当然だ。俺を誰だと思ってるやがる」

あえて不遜な態度で言った垣根の真意に感づいた神はあえてその先を促すように

「ふっ、お前は一体誰なんだ？」

垣根は自信に満ち溢れた表情で、まるで自分を鼓舞するように、そして誓いを立てるように言った。

「俺は学園都市第二位の『未元物質』を操る超能力者にして、樹を支える最強の不死鳥……」

「垣根帝督だ」

金髪の男——神はその言葉に満足したように笑顔を浮かべた。

「もう大丈夫そうだな。」

さあ、さつさとあの騎士を倒して、樹に笑顔を見せてやれ」

神のその言葉を最後に、垣根の意識は再び沈んでいった。

「俺の力のほんの一欠片とはいえ、神の力をやったんだ。」

絶対に勝って、樹を喜ばせろよ」

（彼奴の心の支えとなれるものはありとあらゆる平行世界、時間軸を見てもお前しかない……か。）

最初はなつからこの場所樹の隣を誰かに譲るつもりなんざねえよ。たとえそのライバルが神であつてもなあ）

再び意識が浮上すると、またもや激痛に襲われたが、そんなものは今更気にならなかつた。

垣根は未元物質を体内で生成し、身体中の細胞一つ一つに馴染ませていった。すると、千切れた筈の右脚と左腕が再生した。

未元物質を身体に馴染ませることで未元物質も身体の一部とし、未元物質で体細胞を増殖させることで再生させたのだ。

分かりやすく言うと、身体を構成する物質である酸素や炭素、カルシウムに並び、新たに未元物質というものが加わったのだ。

本来なら原作の復活した垣根帝督の方法でほぼ完全ともいえる不死になれる中、垣根が態々こんな方法をとったのは、この方法なら人間のまま不死に近い再生力を獲得できるからである。

(彼奴の横に化物は似合わねえからな)

その方法で皮膚や毛髪など次々に再生させていった。

そして最後に零れ落ちていた眼球を引き千切って、新たな眼球を再生した。

そこから更に、全身を未元物質で包み込むと同時に、全身に馴染んだ未元物質を用いて、体内で呼吸が行えるようにした。

最初はただののっぺりとした人型の人形のような姿だったが、次第にその姿を変えていった。

のっぺりとした表面がパキパキと音をたてて割れていき、体表面を包むツルツルだつ

た未元物質はだんだんと刺々しいものへと変化していった。

そして最終的にはその姿は、ファンタジー物に登場する竜騎士のような刺々しい全身を包み込む鱗のような鎧となっていた。

その鎧は魔法と未元物質を融合させた物で、太陽の騎士の熱を完全に遮断することに成功していた。

さらに駆動鎧と同じ効果もあり、その身体能力は二重聖人であるアックアすら凌ぐものとなっている。

といってもまだまだ少し不安定で、完全な状態を維持できるのはせいぜい三分が限度なのだ……

(だが、それだけありゃあ十分だ)

垣根は背中に今までのものとは異なる様相の、硬質で刺々しいドラゴンのような翼を左右1対新たに展開し、その翼を広げることで周囲を囲んでいた未元物質の壁を粉碎し、散弾のように周囲に撒き散らすと同時に、さっきまでとは比べものにならないほどの速度で騎士王に接近して、油断していた騎士王の脇腹を右脚の前蹴りで蹴り飛ばした。

騎士王は反射的に踏ん張ってしまったがため、吹き飛んで隙を作ることにはなかったが、衝撃が逃げなかった脇腹はそのまま抉り取られてしまった。



だが、騎士王もただやられるだけじゃない。

脇腹の痛みなどないかのようなスムーズな動きで右手に持つ炎のロングソードで垣根を左脇腹から右肩に掛けて逆袈裟に焼き切ると同時に爆発を起こして爆風に乗って距離をとった。

が、騎士王が地に足を着けたその瞬間、地面を突き破って出てきた純白の蔓が騎士王に巻きついた。

「……………ツツツ!!」

その蔓は危険だと警報を鳴らす第六感に従って蔓を斬り裂いて飛び退いた次の瞬間、蔓の断面から斬り裂かれた蔓の欠片を繋ぐように光のラインが構築された。

蔓の欠片を結ぶ光のラインが構築したのは攻撃性の魔法陣だった。

魔法陣からは数百もの雷の矢が射出され、騎士王を襲った。

それと同時に垣根も騎士王の脚を地面から伸ばした蔓で足止めしつつ、挟み撃ちにするようにして背後から巨大なハンマーを模した手甲による奇襲攻撃を仕掛けた。

騎士王は雷の矢を右手の炎のロングソードを振るって炎の衝撃波を生み出して相殺し、足に絡みついた蔓を爆発的に炎を噴出することで吹き飛ばしながら垣根のハンマー型手甲による奇襲攻撃を左拳で手甲を砕くことで防ぎきり、そのまま垣根の頬を殴って頭蓋を粉碎した……筈だった。

「……ツツツ?!?!」

騎士王の拳は確かに垣根の頬に当たり頭蓋を粉砕したが、それによって生じる結果は脳漿を撒き散らすスプラッタな光景ではなく、まるで紙屑の塊を殴り散らしたかのような光景だった。

(分身だ?!?!確かに温度や魔力を感じられたというの?!?!)

否、そんなことよりも奴は一体何処に…)

騎士王が垣根を見失い、索敵すると、上空に巨大な生物反応があった。

見上げるとそこには巨大な純白の西洋の龍——ドラゴンがいた。

ドラゴンは炎のブレスを吐きながら襲いかかってきた。

「まさか、未元物質と魔法を融合させることでドラゴンをも再現するとはな」

騎士王はそれを見て昔を思い出した。

魔法世界にて、樹、否、魔法世界の勇者の召喚獣となる前の戦いの日々を。

騎士王はフツと笑い

「良いだろう。この勝負受けて立とう。私の誇りにかけて、真っ正面から何の小細工もなしに切り伏せてみせよう」

騎士王は心中で最大級の賞賛をしつつ、それに応えるように炎のロングソードを下段に構えた。



ていった。

垣根も翼とドラゴンの亡骸を消して、騎士王の後を追うようにして地面に着地した。

「じゃ、試験の合否を聞こうか」

垣根はサバンナの乾燥した地面に仰向けに倒れている騎士王を見下ろしながらそう尋ねた。

太陽のようなゆらゆらとした造形の朱色の甲冑姿から元の銀色の甲冑姿に戻った騎士王は地面に仰向けに倒れたままフツと笑い言った。

「ギリギリ合格……、と言ったところか」

そう言うのと、乾燥した地面に倒れていた騎士王の姿が朧げになり、消え、フと気配を感じて顔を上げるとそこには革鎧を身に纏い、両腕には銀色の龍の手のような手甲をした短い銀髪に綺麗なブルーサファイアのような碧眼を持つ精悍な顔立ちの男が岩の上に腰掛けていた。

「贅沢を言えばこの姿の私に勝って欲しかったが、まあ、それは酷というものか」

革鎧を纏った男はそう言って苦笑した。

「ハッ、さつきまでのはただの試験用のお遊びモードだったって訳か。騎士王さんよお」

「当然だ。アニメやゲームじゃあるまいし、幾ら魔法で関節部分に柔軟性を持たせているといっても、あんな全身甲冑なんて着てたら動きの邪魔になるだけだ。

だからさつきまでの私は能力の使用を含めても本来の4割程の力しか出してない。否、出せていない」

「あれで、4割かよ。」

王の称号は伊達じゃねえな」

「ああ、王は何があつても負ける訳にはいかない。故に誰よりも強くなければならないからな。」

それより、さつきとここから出て行ったらどうだ？

そろそろ樹も帰ってきている頃だろう」

「そうだな……。お前はどうするんだ？」

「私は召喚体だ。」

精霊界に戻るだけさ」

「そうか。じゃあな、騎士王」

垣根は身を翻し、出口へ向かった。

「また会おう、不死鳥の騎士よ」

騎士王はそう垣根の背に別れを告げるとユラユラと陽炎のように消えて行った。

垣根はそれを振り返らず手を振って応え、そのまま扉を開いて部屋へ戻った。

時は少しばかり遡り、垣根がまだ騎士王との死闘を繰り広げていた頃、誰もいない（部屋の扉から続く異空間にいる二人を除いて）家に玄関の扉の開く音が響いた。

帰ってきたのは当然の如く、家主である如月樹だ。

リビングへとやってきた如月はいつもの元氣瀉刺とした態度はどこへやら、少々不安気な様子で垣根が死闘を繰り広げている異空間へと続く扉の前で行ったり来たりを繰り返していた。

（どうしようどうしようどうしようお。やっぱりまだ無茶だったかなあ。敗北条件は死だなんて言わなきゃ良かったかなあ。

でもこうしないと意味がないし。でもそれで死んじやったらそれこそ意味ないよねえ。

それになによりていとくんが死ぬのは私が嫌！

でもこれからのことを考えるとていとくんにはできる限り強くなって欲しいんだよね。

ああ〜でもでも…)

「何やってんだお前」

「へ？」

如月が扉の前で右往左往していると聞き慣れた人のあきれた声が聞こえた。

声が聞こえてきた方向——異空間へと続く扉がある方を向くと、そこには如月が無事の生還を待ち望んでいた人物——垣根帝督がいた。

彼の無事な姿を目にした瞬間、さつきまで考えていたいろいろなことが吹き飛び、それらは涙へと姿を変えて頬を伝った。

感極まった如月はそのまま垣根の腹へ飛びつき泣きじやくつた。

「ていとぐう」ううううううん!!!

よがっただあああ。ツエツグ！無事で…、ホントに…：…良かったあ…」

垣根は突然のことに一瞬焦ったが、そこは流石の Level 5、すぐに平静を取り戻し、如月が落ち着くように黙って如月の頭を撫でた。

「悪い。心配かけたみてえだな」

「ううん、私こそあんな無茶な試験させてごめんね」

「お前が謝ることなんざ何もねえよ。」

お前のことだ、どうせこれから先の俺の身を案じてこんな無理難題な試験をさせたん

だろう？」

垣根の腹から顔を上げた如月は驚いたような表情になった後、俯き、落ち込んだような声音で

「…流石ていとくん。

全部お見通しだったんだね」

「そりゃ、お前が未来についてある程度知っているのを知っているからな。それぐらいの予想は着く」

垣根はそこで一旦言葉を切り、

「だからこそ、これからもそんな無理難題をぶちかましてこい。

その度に俺はそれを乗り越えて強くなってやる。

お前を護れるように、ちゃんと支えてやれるように。

俺はもう決めたんだよ。お前をずっと護り続けるってよ」

垣根は俯けていた顔を上げて潤んだ目で見上げてくる如月の目を見つめながらそう言った。

如月は一度目を閉じた。

もう一度開いた時、そこには先程までの弱々しい少女はおらず、いつも通りの凜とした光を宿す目をした勇者がいた。



「…ありがとう、ていとくん。

私もていとくんを護り抜くことができるほどの強い勇者になるよ。

護られているだけじゃない。

護り、護られる。そんな勇者に」

如月はそう言つて、垣根を抱きしめている腕に優しく力をこめて、垣根もそれに応えるように如月の背に腕を回し、そつと抱き締めた。

動き出した異世界からの来訪者達

## 第十三話 勇者、スカウトされる。

九月十日

今日は祝日なので学校もなく、ていとくんの修行も一段落したので、私は一人で外をブラブラと散歩していた。

ちなみにていとくんは「造りたいものがあるからゼフィを召喚してくれ」と言っていて私が召喚したゼフィと一緒に例の試験部屋に籠っている。

ゼフィというのは私が契約している召喚体の内の一人である。

本名をゼフィロスアークヒルズと言い、元剣帝であり、『剣の道だけでなく魔の道をも極めたい、しかしいくらヴァンパイアといえども限りある生の中では時間が足りな過ぎる』という理由で禁術を用いて不死者の王フーライフキングとなった。

不死者の王という称号は伊達ではなく、長い時の中で魔法だけでなく、死霊術、結界術、陣術、各種武術など様々なものを修めており、その技量は然る事乍ら、知識量もとてもない量を保有する。

閑話休題

今はちようどお昼時ということでクレープの屋台で照り焼きチキンとレタスのクレープとデザートにイチゴチョコカスタードクレープを買って近くに設置されていたベンチに座って食べていた。

ああ、やっぱりクレープは美味しいな♪

こういう惣菜クレープ？って言うのかな？は今までクレープはスイーツのイメージが強かったから今日初めて食べてみたけど意外と美味しかったな。

まあ、一番はやっぱりスイーツとしてのクレープだけだね。

特にイチゴシリーズのクレープは至高！

「とても幸せそうな表情で食べますね。そんなに美味しかったですか？」

照り焼きチキンクレープを食べ終え、デザートにイチゴチョコカスタードクレープを食べっていると、横に座っていた肩にかかるぐらいのストレートの藍がかつた黒髪の二十代半ばぐらいの女性が話しかけてきた。

「ええ、すつごく美味しいですよ。」

ところで、貴女はどなたですか？」

そう私が誰何すると、女性は『ああ、失礼。自己紹介が遅れました』と言い、懐から出した財布から名刺を取り出し差し出してきた。

「私、TOR芸能プロダクションでマネージャー兼プロデューサーをしている尾木清花おぎさやか」

と申します」

私は名刺を受け取り見てみる。

へえ、TOR芸能プロダクションって言ったら確かもうじき鳴護アリサが所属するところになるけつこう大きな芸能事務所だったっけか。

でもそんな人が私に何の用なんだろう？スカウトかな？

「私はとある高校一年の如月樹です。」

それで、私に何か用ですか？」

「ええ、単刀直入に言うとは実は貴女をスカウトしたいんです」

「スカウトって…、アイドルをや・ら・な・い・かつて感じですか？」

とちよつと巫山戯た感じに聞くと、

「いえ、アイドルだけではなくモデルや声優もや・ら・な・い・かつて感じですね」

とニヤけながらそう言ってきた。

ノリ良いなこの人。

にしてもアイドルにモデル…：かあ…。

…：まあ良い暇潰しになるかな。

あ、でも一つ聞いておかないと。

「それって私がやりたい時だけやることってできますか？」

「ええ、可能ですよ。

ですが最低一ヶ月に一度は何かの仕事をしてもらうことになりますか」

こんな我儘が可能だなんて懐が深いなあTOR芸能プロダクション。

「じゃあやります」

「ありがとうございます。

それでは今から一緒に事務所まで来ていただけますか？

色々な手続きや紹介などをしたいので」

「分かりました。では行きましょうか。

空間転移するのでじつとしていくくださいね」

私はそう言うのと、さつき貰った名刺に書かれていた住所へと空間転移した。

く第七学区TOR芸能プロダクション前く

「へえ、空間<sup>テレ</sup>移動<sup>ポータル</sup>能力者<sup>ター</sup>だったんですね。

あれ？でも空間<sup>テレ</sup>移動<sup>ポータル</sup>ってLevel4でも最大飛距離は50mほどでしたよね？

あそこからここまででは軽く見積もっても1kmはあつたはずですが…」

「私の能力は空間転移ではなく、<sup>イマジネーション</sup>幻想具現という簡単に言えば想像を具現化する能力の

Level 4です。

まあ、そんなことより早く入りましょうよ」

「あ、そうですね」

そう言つて尾木マネと私は事務所の中へと入つていった。

中に入つて階段を登り、通路を進んだ先にあつた扉を開けて中へ入つた。

「社長、新人連れて来ましたよ!」

中はよくある感じの普通の事務所のような様相で、部屋の奥にある机には社長っぽい人が座つて書類仕事をしていて、尾木マネの声に気付いて顔をあげた。

「おお!新人というのはそこにいる赤髪の彼女のことかね!?

これは凄い逸材だ。

髪はサラサラで枝毛など一つもなく顔もこれまで見たこともないほどの美形で肌もきめ細かくシミ一つない身体の肉付きも良い具合で胸も大きくそれでいて形も良い!腰周りには無駄な肉は付いておらずスラツとしており、かと言つて決して痩せすぎているのではなく適度に肉がついていて抱き締めるとさぞ気持ちよからう太腿もムツチリとしていて挟まれるとさぞ気持ちいいだろうことは確定的に明らか!何がと言わんがナニがとはぶべりゆふあつ!!」

「社長、セクハラ発言はやめてください。ぶつ殺しますよ?」

私を視界に入れた途端急に目の前に現れた社長が私の身体中を舐め回すように超至近距離で眺めながら息つく暇もなくセクハラ発言をすると尾木マネが切れて近くに（何か）あつた文鎮で思いつきりぶん殴つた。

文鎮でぶん殴られて吹き飛んで行く社長に止めと言わんばかりに尾木マネは手首のスナツプをきかせて吹き飛んでる最中の社長めがけて投げた。

尾木マネがぶん投げた文鎮は高速で社長の眉間に吸い込まれるように飛んでいき、それがクリーンヒットした社長は空中でさらに吹き飛んで後ろにあつた柵にぶち当たつた。

何で文鎮なんて置いてあつたんだろ？

「ご、ごめん…なさ…い…ガクッ」

社長は敢え無く気絶した。

まさか室内に入つて僅か数秒で事務所のトップが気絶するとは…。

ていうか良く気絶で済んだなあれ。

普通能力者でもない限りあんなの喰らつたら頭かち割れると思うけど…。

これがギャグパートか…。

「すみません樹さん。

悪いですが社長は可愛い方や綺麗な方相手だと常にあんな感じなので早く慣れてく

ださいね。

ちなみに呼び方は社長で構いませんよ。ハッキリ言つて社長の名前を覚えている人なんて一人もいませんし」

別に隠してる訳でもないのに社員の誰もがその名前を知らないとか不憫すぎる。

まあこの人はこういうキャラなんだつてことで納得しとくか。

その後、事務所の主なメンバーと自己紹介を終え、手続きも済ませた私は尾木マネに『ついでですしこのまま初仕事をしちやいましょう！なあに、ファッション誌のモデルつていう簡単な仕事だから心配いりませんよ』と言われたので……

第七学区のスタジオにて撮影中なう

「いいでいいで〜。

新人やゆうからどんな娘が来るのか楽しみにしてたんやけど、こりゃあ予想を遥かに上回る逸材がきたなあ。

カツコエエでえ樹ちゃん」



「あはは、ありがとうございます」

私は今、上は髑髏を主役とし、周囲をローマ字で彩ったロック調のTシャツの上にフォー付きの黒のジャケットを羽織り、下は黒地のシックなズボンといった完全にこれ男物じゃね？っていう格好でカッコイイポーズを取りながら黒髪の癖毛を軽く整えた感じにした20代前半ぐらいのカメラマンの熾城清明シシキアキラキヨキさんに撮影されていた。

なんでも熾城さん曰く、今女性の間ではこういう本来男物の服装であるものを着るのが流行っているのだそうだ。

「よし、それじゃあ最後に……」

ほれ」

熾城さんは徐に側に置いてあったカバンからあるものを取り出し、こちらへ投げ渡した。

ってあれは!?

「狐!!」

そう、熾城さんがポイツと軽い感じで放り投げてきたのは体長50cm×60cmほどの金毛の九尾の狐だった。

ってどうして熾城さんのカバンの中に狐が入ってるの!?!しかも九尾ってことはこの子って本人(本狐?)かは分からないけど確実にあの九尾の妖狐と関係ありそうだし!

でも可愛いから許す!

私は欲望の赴くままに狐を抱き締めてそのフワフワサラサラの身体を存分に堪能させて貰った。

パシヤパシヤパシヤッ!

私が狐のフワフワサラサラな身体にスリスリ頬擦りしているとシヤッター音が連続で聞こえた。

「やっぱり予想通り破壊力抜群の良い笑顔が取れたわ。

その子連れられてきて正解やったな」

「なっ!?何を撮ってるんですかあ!」

「何って九尾に頬擦りしてふにやつと顔を綻ばせてる樹ちゃんをに決まってるやん。

あつ、その赤面も戴き!」パシヤッ

だらしない顔になって狐にスリスリ頬擦りしていると撮られた私は恥ずかしくなつて抗議の声を上げるが、熾城さんはそれすら逆手にとつて私の赤面姿を撮つてきた。

「戴き!じゃありません!」

「まあまあ良いではないか良いではないか」。

「これも仕事の内やと思つて、な?」

うっ、そう言われると何も言えない…。

「まあその代わりと言っちゃあなんやけどその子をあげるわ。

良いもん撮らせてもらった分のボーナスやと思ってくればええよ」

「えっ！良いんですか!？」

「もちろん。その子も樹ちゃんにめっちゃ懐いてるみたいやしね」

腕の中の狐を見てみると、狐は私の胸にスリスリと頬擦りしていた。

かわええのう…。

「ありがとうございます！大事に育てますね！」

所変わり、場所は第七学区、とある公園。

そのベンチに力なく座り込んでいる薄い赤混じりの肩まで届く白髪に淡い紫の瞳を持つ一人の少女がいた。

S I D E  
???

はあ、やはり私の求めるモノはこの世界にもありませんでしたか。

世界が変わればそこに住む者も変わり、今まで見てきた自身の利益だけを考え、その為なら平気で他人を蹴落とす者や、自身と違うものを異物とし、迫害する者もいなくなると思っていたのですが……。

この世界に来る際に貰った能力を使えば他の世界に行くこともできるでしょうから他の世界にでも行くとしますかね。

いや、どうせ何処に行っても結果は同じですかね。

人間という生き物はどんなに周囲の環境が違っても本質の部分に違いはないのですから。

ならいつそのこと、全世界を破壊して私も一緒に死んで楽になりますか……

「どうしたの？何か悲しいことでもあった？」

頭上から突如聞こえてきた声に反応し、俯いていた顔を上げてその者を見ました。

するとそこには心配そうにこちらを覗きこむ、長く流麗な赤髪をポニーテールにした

麗人がいました。

「悲しいこと……、と言えば悲しいこと……ですかね。」

簡潔に言えば、ただ単に人間という愚かな生き物に辟易してただけですよ」

「……そっか」

そう言うのと、赤髪の麗人は私の隣に腰掛け、

「どうして人間に辟易していたのか教えてくれる？」

別に無理に話さなくてもいいけど、話せば少しは楽になると思うよ」

私はその人の炎のように暖かく、輝かしい瞳を見ると、自分でも何故だか分かりませんが、この人に話してみたくなり、今までのことを話し始めました。

「信じられないかもしれませんが、私には前世の記憶があるんです。」

前世では私は一般的な家庭に生まれ、貧乏ながらも楽しく過ごしていました。

しかし、何処で歯車が狂ったのか、いつからか家族は私に毎日のように罵声を浴びせるようになりました。

本人達は冗談のつもりで言ってるのかもしれませんが此方はその心無い言葉で傷つけられているのですから堪ったものじゃありませんよ。

そして高校でも、幸い自分が人間関係で悪い目にあうことはありませんでしたが私の友人が表面上は皆仲良くしていたにも関わらず、クラスの大半から影で虐げられている

というのを聞いて、人間という生き物の醜さを垣間見ました。

その他にも自分の地位向上と保守しか脳のない政治家や、災害地の復興支援募金と偽り私腹を肥やす詐欺集団、自分達と少し見た目や思想が違うだけで迫害の対象とする愚かな人民。

数多の醜い人間を見聞してきました。

そしてそれはこの世界でも変わりなかつた。

自己中心的で、偽善的で、打算的で、傲慢で、狡猾で、残酷で、非道で、残虐で。

自身の為なら世界がどうなろうと知ったことではないというクズまでいる始末。

真に心の底から他人を思い遣り、損得勘定なしで動く人間なんて一人もいませんでしたよ。

だから私は人間に嫌気が差したんです。

ありきたりな理由でしょう？」

「確かにありきたりな理由だね。

でも、ありきたりな理由だからこそ重大な問題でもある。

だって、ありきたりな理由ってことはそう思う人がたくさんいるってことなんだから。

でもね、私からしてみればそんなのは思春期で精神が不安定になっていることからかく

るただの悲観的な考えでしかないと思うよ?」

「……どういうことですか?」

「そのままの意味だよ。」

世界は悪と苦でみちている!だの人間はクズしかいない!だの。

そんなのは思春期で精神が不安定になるから悲観的になってそんな考え方になるだけなんだよ。

周囲が悪意に満ちてるっていうのならその悪意を逆に利用して善意を振り撒いて伝播させればいい。

人間に嫌悪感を抱くならその人とは関わらないで自分が嫌悪感を抱かない人間とだけ関わればいい。

なんなら世界に影響を与えられるような存在になって世界を変えればいい。

そう楽観的に考えれば世界はまた違ったものに見えてくるんじゃないかな?

まあ楽観的になりすぎてもそれはそれで問題なんだけどね。

何事もバランスが大事ってね」

と冗談っぽく言った麗人は慈愛に満ちた、まるで聖母のような微笑を湛えながらこう続けた。

「それにね、確かに人間には汚くて醜い者もいるけど、それだけじゃないんだよ。」

「助けて」っていうたった一言で他人の為に命をかけることができる人や、世界を護る手助けをするためにだけに自身の誇る強大な力を容易く放り捨てる人だっている。

だから、諦めるにはまだまだ早いと私は思うよ？

まずは自分がそんなお手本になるところから始めるべきじゃないかな？」

「貴女の口振りからしてそういう人たちは本当にいるのでしょうか…。

どうすれば、そんなふうになれますかね？」

「ふふ、私にはもうその答えが分かっているように思えるんだけど？」

「……………護るべき存在や譲れない信念を得ること……………ですか」

「さあね。

でも、それを得ることができれば世界が変わるっていうのを私は経験で知ってる」

赤髪の麗人はそう言ってベンチから立ち上がりました。

「世界を変えて幸せになるも世界を変えずに不幸になるも全ては貴女の選択次第だよ」

彼女はそう言っただけでベンチの足元で丸まっていた九尾の狐を連れて公園の外へと歩き始めました。

「私の名前は聖守羅です!!」

「貴女の名前は何と言うのですか!？」

気がつくとい私はベンチから立ち上がり、去り行く彼女の背にそう声をかけていまし



た。

振り返り一瞬瞠目した彼女は朗らかに笑い、

「私の名前は如月樹だよ。」

また縁があれば会おうね」

彼女は——樹さんはそう言うって後ろ手に振りながら去って行きました。

私はその背を見送りながら、噛み締めるように言いました。

「はい、また、いつか……」

既に見えなくなつた樹さんの去つた方向を見つめながら、私は静かに決意しました。

「私は変えますよ。自分が見る世界を。」

そしてそのための魔法名（信念）は……

s p l e n d i d e 7 0 2 .

意味は……、闇を照らし導く者。

貴女の言う通り、まずは自分なりに世界を変えてみようと思います。

悪意を善意に変えることで……」

## 第十四話 残骸争奪戦

p r o l o g u e

SIDE 三人称

く第七学区とあるビルの屋上く

9月15日 PM7:20

下はミニスカートの、上は晒して胸を覆い、その上から霧ヶ丘女学院の制服を羽織っただけという極めて露出度の高い服装の女子高生がスーツケースの上に座っていた。

「ふふふ、漸く手に入れたわ。」

あとは連中が計画通りに動くのを待つだけね」

「そんな単純に行くかねえ？」

霧ヶ丘女学院の女子高生の傍らに立っていた、引き締まった筋肉質な身体に白を基調とし、青色の蓮の花柄で飾った中華服を着崩した中国系チャイニーズの男がニヒルな笑みの奥に獰猛な獣の本能を覗かせる表情で言った。

「確かに学園都市の追手から逃げながら外部へ脱出するのは困難を極めるわ。」

でも、だからこそ世界最強の傭兵と名高い貴方を雇ったんじゃない。劉凱リゅうがい」

劉凱リゅうがいと呼ばれた中国系の顔立ちの男は「そうじゃねえ」と言い、相変わらずの表情で夜

の学園都市の街並みを眺めながら続けた。

「お前の言う通り学園都市の追手を退けながら脱出するのも困難だが、オレが言っているのはそれ以前のことだ」

「どういふこと？」

「つまり、これを狙ってんのは何も、学園都市側の人間だけじゃねえってこった」

くとある交差点へ

9月15日 PM7:50

完全下校時刻もとうに過ぎた頃、偶に車が車道を通る程度で人の気配がほとんどないとある交差点近くの歩道を常盤台中学の制服を着た茶色い短髪の少女が走っていた。

彼女は学園都市第三位の超能力者、通称超電磁砲<sup>レールガン</sup>であり、外部向けの各マスメディアに多数出演している、この学園都市で最も有名であろう少女、御坂美琴である。

(させない……、あの実験だけは……絶対再開させるわけにはいかない！)

御坂が先程監視カメラの映像をハッキングした際に突き止めた結標の居場所へ向かって走っていると、突然後ろから、

「ビリビリっ!!」

突然掛けられたあの少年がよく使う不名誉な渾名を呼ぶ声に立ち止まり後ろを振り

返ってみると、そこには案の定、絶対能力進化実験レベルシックスシフトを止めるため、その右腕一つで学園都市第一位の超能力者を倒し、御坂美琴とその妹達を救った少年が息を切らして立っていた。

「探したぞ、ビリビリ」

御坂は彼を見て安心すると共に動揺した。

また彼を私情に巻き込んで傷つけてしまうと思ったからだ。

「探したって……、なんで……なんでアンタがまた……」

「訳は全部ミサカ妹から聞いた。」

またあの実験が再開されようとしてるってことも、お前の後輩がそれに巻き込まれてるってことも」

「なっ！、どうしてあの娘達が……」

御坂は妹達シスターズから聞いたと言われ驚嘆した。

なぜなら妹達シスターズにはこの件について一切相談を持ちかけたりなどしておらず、残骸レムナントについてならまだ知りようもあるが御坂の後輩である白井黒子がこの件に巻き込まれたことに関しては本来なら知りようがないからだ。

しかし、これはカエル医者しか知らないことだが、妹達シスターズは最近オッドアイの中学生とその子と一緒にいる芯の強そうな鋭い眼差しの眼鏡をかけた高校生と仲良くなってお

り、件の情報はその少年等からもたらされたものだったりする。

「そんなことはどうだっていい。」

それより急ぐぞ、ビリビリ！時間がない」

「分かった。」

でも、この前みたいに無茶はしなでよ」

「ああ、善処するよ。」

そう言つて二人は結標達の居場所へとまた走り出した。

く第十学区少年院く

9月14日 PM9:10

「はあ、ちくしょう。」

早く刑期終えてシヤバの空気が吸いてえぜ。

何かしらの理由で出所させてくんねえかなあ」

オレンジの囚人服に身を包んだ若い男が寂れた個室の檻の堅いベッドの上で天井のシミを眺めながらそう呟いた。

そんなことを言つても世の中そんなに甘い訳がなく、そんなことが起こる可能性は万に一つもなかった。

……はずだった。

囚人服の男が檻の中でゴロゴロしていると、誰かが近づいてくる足音がした。

どうせ看守の見回りだろうと、目を向けず、ゴロゴロしていると足音が止まった。

それも、この檻の前で。

えっ、と思いゴロゴロ寝転がったまま体を仰向けにして視線を向ける、とそこにはノツペリとした縦に細長い奇妙な仮面にスマートな体型の駆動鎧パワードスーツを着た男とタンクトップ姿の筋肉隆々のゴリラ野郎が立っていた。

「初めまして、私は暗部組織『レイブン』の制御役です。

本日は貴方の勧誘のために足を運ばせていただきました。

と言つても拒否権はありませんがね」

「はあ!?!暗部組織だあ!?!」

一体何を言つてやがんだテメエは」

「詳しいことは後でお話ししましょう。

時間がありませんから今から急いで『レイブン』の研究室へ来てもらいますよ。  
イコールスピード  
絶対等速」

制御役の男は檻の鍵を開け、筋肉隆々のゴリラが中で仰向けのままポカーンとしていた絶対等速を肩に担いで連れていった。  
イコールスピード

「ちよっ!おいコラッ!離しやがれこのクソゴリラ!」

「わしの名前はクソゴリラじゃのうてベルゾレフハルドトスキーじゃ!!

つーか漢なら潔く大人しくせえ!」

「うっせえええええええええええええええええ!!!!

こんないかにもヤバそうな連中となんて関わってたまるかああああああ!!!!!!

つか暑苦しいし気持ち悪いんだよ!このクソゴリラが!」

その後も絶対等速はベルゾレフの肩に担がれながら喚き暴れ散らすもその甲斐虚しく連行されたのであった。

やはり世の中はそう甘くはなかつたのであった。

く暗部用輸送車内く

9月15日 PM 7:30

車内には4人の少女が2人ずつ向かい合うようにして座っていた。

「で、麦野。今回の任務は超何だったんですか?」

短パンにフードといったボーイッシュな服装の茶髪ボブカットの少女——絹旗最愛が対面に座る緩くウエーブのかかった茶髪の女性——麦野沈理に聞いた。

「ぶっ壊れた樹形図ツリーダイアグラムの設計者の演算中枢——残骸レムナントの回収だとか」

麦野は面倒臭気な表情でそう投げ槍に返答した。

その投げ槍な言葉に金髪碧眼の少女ーフレンドが驚きの声を上げた。

「えええく!? 樹形ツリーダイアグラム図の設計者って壊れてたの!?

「結構前に壊れてたらしいわよ。」

で、今回はそれを狙う不屈き者から残骸レムナントを奪ってこいつてなわけ。

「簡単でしょ?」

その言葉を聞き、フレンドは目をキラキラと輝かせた。

「ねえねえ! それ私一人に任せてくれない!?

「却下」

「えええくなんで?」

「お前あのクソ第三位と交戦した時のこともう忘れたつてのかあ? あああん?」

「あう、ごめんなさい(・ω・) ショボーン」

「ほんと、フレンドは相変わらず超バカですね」

「まったくよ。」

話を戻すけど、今回は4人全員で行動するから」

「超どうしてですか?」

私とフレンド、麦野と滝壺さんで別れて行動した方が超効率良くないですか?」



「私は麦野とがい」

ドガア!!

もう一々相手をするのが面倒臭くなったのか、麦野はフレンドの頭を思いつき殴り付けて気絶させた。

明らかに普通の人が人を殴った時に鳴る音と違ったがそこは気にする必要はない。

なぜなら全ては『麦野だから』で解決するからである。

「確かにいつもならそうするんだけど今回は4人一緒に行動しろって上から言われてんのよ。」

しかも4人一緒に行動していなかったら報酬無しとか言ってるから拒否権はないってわけ。

最大限の譲歩で私だけなら単独行動を許すとは言ってたけど、それも一時的なものしか認めないってさ」

「そうなんですか。」

でも、超どうして上はそんなことを超言ったんでしょうね。

ツーマンセルだどこっちが殺られるとでも判断したんでしょうか?」

「だとしたらあのクソムカつく制御役の女をぶち殺したいところだけど、十中八九そうなんでしょうね。」

それ以外に私達を纏めて行動させる理由が思い付かないし」

「と言うことは、今回残骸レムナントを超奪つて行つた奴等はレベル5クラスの力を持った超ヤバイ奴等つてことですか」

「さあねえ。」

まあ、何にせよ、私達に勝てる奴なんていないだろうけどね」

くどある地下室く

9月15日 PM 7:00

第七学区にあるとある喫茶店の地下にある、まるで高級ホテルのスウィートルームのような部屋に、5人の男女がいた。

「……はい、ですから貴女達はそれを彼に伝えた後は俺達に任せて病院でゆっくりしててください。それでは、また。」

で、波嶺さん、今回召集された理由は何ですか？

まあさつきさせられた電話の内容で大体のことは掴めましたですが確認のためにも一応お願いします。

他のメンバーにも伝えなくてはいけませんし」

そこにあるソファアに座る中学生ぐらいの黒の短髪に左目が黒、右目が琥珀色のオツ

ドアイの少年に、黒髪黒目の真面目そうな、メガネをかけた、芯の強そうな凛々しく鋭い目つきの高校生ぐらいの少年——宮路蓮太郎がスマートフォンスマートフォンの通話を切り、尋ねた。

メガネの少年に促されたオッドアイの少年——波嶺ナミネシユウ 柊は召集をかけた理由を話し始めた。

「皆を呼んだのは他でもない。

如月樹親衛隊、その初任務のためだよ」

「あああ、もうかいな。

できれば僕らが動かんでいいっていう展開になつてくれたら一番嬉しいんやけど。

やつぱりそうもいかんかあ。

連中ももうちよつと落ち着かれへんもんかねえ。」

その言葉に反応し、関西弁が特徴の黒髪の癖毛を軽く整えた感じにした20代前半ぐらいの男——熾城シジヨウキョウアキ 晴明が残念そうな声を上げた。

「それについては熾城さんに激しく同意しますよ。

ですが、私はこうも早くあの方の力になれることに喜びも感じていますがね」

と、肩ヒジリまで届く薄い赤の混じった白髪シユウに淡い紫の瞳の常に柔らかな笑みを浮かべた少女——聖守羅ヒジリシユウが言った。

「ハツハツハ！お前らホントアイツのこと好きだなあ。」

だぼつとした右太股に紅い龍の刺繍が施された白い中華風袴に綺麗な植物の刺繍が施された中華風の胴着姿の黒髪の男が快活に笑いながら酒瓶をラツパ飲みする。

「当然でしょう。」

それに私達は如月樹親衛隊なんですよ？

そんな私達が樹さんのことが好きじゃない訳がないでしょう。

それに樹さんのことが好きなのは貴方もでしょう。バツシユさん」

「まあな！

昔からの戦友なんだから当然だ」

わいわいがやがやと無駄話を始めたメンバーを前に話すタイミングを見失った波嶺はおずおずと手を挙げ、

「あの一、そろそろ任務について話し始めたいんだけど」

「これはすみません。」

どうぞ、話してください」

波嶺の控え目な自己主張に気づいた聖はいつも通りの柔和な笑みで非礼を詫び、話を促した。

「うん、ありがとう守羅。」

で、任務についてなんだけど、今回は残骸レムナントの破壊、そして残骸レムナントを狙って学園都市に侵入したA Oメンバーアンチオリジンの捕縛。

必要ならば垣根さんと樹さんのサポート。

で、担当は守羅が戦場操作及び司令塔兼監視役それと緊急事態時のサポート、清明、バツシュがA Oメンバーアンチオリジンの捕縛。僕が垣根さんの誘導及び緊急事態時の実働担当、蓮太郎が例の場所で彼女の護衛。

異論はある？」

「」「異論なし！」「」

「それじゃ、みんな、死なないでね」

「当たり前や」

「勿論です」

「当然でしょう」

「おう！」

「学園都市第十一学区」

9月15日 P M 7 : 3 5

闇夜に乱立するコンテナ群に3人の男女が紛れていた。

「案外簡単に侵入できたね」

深い茶色のダボつとしたズボンに白を基調に金で縁取りした服を着た金髪ツンツンの少年のような雰囲気を持つ少女が言った。

「油断すんなよアクロ。」

不法侵入を許したからアレイスターが来る確率は低いけど0ではないんだからな」

不良のような剃り込みを入れたオールバックの少年が金髪の少女——アクロをたしなめた。

それに対しアクロは樂觀的な表情で「ハ—イ」と元気良く返事をした。

その様子にオールバックの少年は頭を痛めたように右手で抑えて溜め息を吐いた。

「そんなIFにブルつてる暇があんならちやつちやと残骸レムナントの奪取に行こうぜ。ジェイルロード」

筋肉隆々の大柄な赤髪の男が面倒臭気に言った。

ジェイルロードと呼ばれたオールバックの少年は「そうだな」と言い、

「じゃあ、バラけて探すぞ。」

イフリートは第七学区南部、アクロは第七学区西部、俺は第七学区東部だ。」

「おいちよつと待てよ！

結標って奴が既に第七学区から出てたらどうすんだよ!」

その指示にイフリートと呼ばれた赤髪の男が異議を唱える。

それに対しジェイルロードは「問題ねえ」つといい、

「俺には原作知識があるからな、結標が第七学区から出ねえってのは既に知ってたんだよ。」

「ま、何にせよイフリートはバカなんだから考えるだけ無駄無駄。」

とりあえずジェイルロードの言う通り動いてたらしいのさ」

「な、テメエ誰がバカだつてえ!?!ああ!?!」

アクロの言葉に憤ったイフリートの周りに炎が舞った。

「落ち着けイフリート。」

アクロも一言多いんだよ。

無駄口叩いてる暇があんならさっさと行動しろ」

ジェイルロードに宥められたイフリートは「チツ」と舌打ちし、炎を納めて第七学区南部へと向かった。

「それじゃ、私も行ってくるよ」

アクロもそう言つて第七学区西部へと向かった。

「じゃ、俺も行くとしますか」

ジエイルロードは第七学区東部へと向かった。

とある高校学生寮の如月の部屋

9月15日 PM7:30

「ねえ、魔力制御の修行するだけなら別に自分の部屋ですればいいんじゃないの？」

態々私の部屋まで来なくてもさ」

樹はソファーに寝転んでダラーとしながら胡座をかいて魔力制御の修行をしている垣根を半目で見た。所謂ジト目というやつだ。

垣根はそんな視線で見られても気にしませんよーといった態度で魔力制御の修行をしたまま樹と会話する。

「いちいち自分で飯用意すのがめんどくせえんだよ。」

ここにいりゃあ樹が自分の分と一緒に作ってくれるだろ？」

「まあついでだしね。」

にしても、未元物質を身体の構成物質の一つとして定義することで身体に完全に馴染ませたって言うってたけど何か体に異変とか出てない？大丈夫なの？」

「ああ、一応冥土<sup>ヘウンキャンセラ</sup>帰しにも診てもらったが特に身体への害はないそうだ。」



強いて異変と言えば魔力を使っても副作用が無くなったことぐらいだな。理由は全く分からねえが。

まあ、これについてはメリットしかねえし深く考える必要はねえだろ」

「そっか、まあ害がないならそれでいいけど……ん？」

ポケットに入れていたスマートフォンが震えたので出して見ると、LINEの通知が来ていた。

ユーザー名を見たところどうやらスクールの制御役からのようだ。

アプリを開いて見てみるとそこにはこう書いてあった。

5/14(水)

偉大なる制御役様

結標淡希が護送中だった残骸<sup>レムナント</sup>を奪い、第七学区を逃走中です。

直ちに垣根帝督と共に残骸<sup>レムナント</sup>の回収に向かってください。最悪の場合破壊しても構いません。

それと、心理定規<sup>メジャーハート</sup>と過重圧帯<sup>グラビトン</sup>は別件で出払っているので今回は不参加です。

では、健闘を祈ります。

スクールの制御役は意外と自尊心が高いのだろうか？

それとも良い歳しておきながら未だに厨二病を患っているのだろうか？

メッセージを見た如月は「毎回思うけどこの人って意外と痛い人なのかなあ？」と思  
いながら返信メッセージを打っていた。

5 / 14 (水)

偉大なる制御役様

結標淡希が護送中だった残骸レムナントを奪い、逃走中です。

直ちに垣根帝督と共に残骸レムナントの回収に向かってください。最悪の場合破壊しても構い  
ません。

それと、心理定規メジャーハートと過重圧帯グラビトンは別件で出払っているので今回は不参加です。

では、健闘を祈ります。

現役モデル 如月

樹

了解。

振り込み先はいつも通りで。

返信メッセージを送信した後、スマートフォンをスリープモードにした如月は垣根に  
話しかけた。

「ていとくん、今スクールの制御役からLINEがきて、残骸レムナントを回収、最悪破壊してきて  
くれだつてさ。」

あと心理定規と過重圧帯は今回参加できないってさ」  
「分かった。」

じゃあ、早速向かうから準備ができしだい行くぞ」

「うん。それじゃ着替えてくるからちよつと待っててね」

如月はソファから起き上がって自室へと着替えに向かった。

自室へと入りドアを閉めたところで如月は「あつ」と、あることを思い出した。

「そういえばこの残骸事件で結標淡希が怪我をして機械を取り付けないといけないようになるんだっけ。」

うーん、どうしよう……。

あつ！ そうだ、ミサカ妹ちゃんに頼んでラストオーダーちゃんに一方通行さんにこの事を感付かせないように頼んでもらおう！ ついでに出ていこうとしたら止めるようにも言ってもらっておいた方がいいね」

そう思った如月はポケットからスマートフォンを取り出してとある人物に電話をかけた。

『もしもし、こんな時間にどうしましたか？ とミサカは尋ねます』

『悪いんだけどラストオーダーにウサギさんに残骸騒動について感づかれないようにしてって頼んでくれない？』

あと、外には出すなとも言っておいて欲しいの。

ウサギさんがこの件に関わるとちよつと不都合なことがあつてさ。

あ、もちろんウサギさんが動かない代わりにこの件は私達が責任を持つて解決するから安心していいよ』

『分かりました。伝えておきましょう。貴女には貴女の事情があるのでしようから、とミサカは大人の女な対応をします』

『ありがとう！ミサカ妹ちゃん！』

それじゃ、急いでるからもう切るね。バイバイ』

『はい、また、とミサカは別れの挨拶をします』

通話を終えた如月はスマートフォンを机の上に置いて着替えを始めた。

ジーパンに柄Tシャツの上に白のカーディガンというラフな格好に着替えた如月はリビングに戻った。

リビングに戻ると垣根は既に玄関で靴を履いて待っていたのですぐに靴を履いた。

「それじゃ行くっか」

「おう」

二人は玄関を出て夜の学園都市へと足を踏み出した。

結標一派、上条&御坂、スクール、アイテム、レイブン、如月樹親衛隊、A O、数多の勢力がそれぞれの思惑を持ち、残骸を中心に交差する時、物語は始まる。

第一五話 残骸争奪戦 Saint—rough—st  
one

9月15日 P M 8 : 1 0

月明かりや周囲のビルより漏れる光により照らされた薄明るい工事現場の鉄骨の上に二人の男女がいた。

一人は引き締まった筋肉質な身体に白を基調とし、青色の蓮の花柄で飾った中華服を着崩した中国系チャイニーズの男、劉凱、もう一人の女は、晒して胸を覆い、その上から霧ヶ丘女学院の制服を羽織った露出度の高い服装の女子高生、結標淡希だ。

二人は監視カメラが存在せず、頭上は青いビニールで覆われたここで、劉凱による人払いの術式を周囲に展開して時間を稼いでいた。

「外の彼等が準備を終える予定時刻まで残り1時間…か…」

結標は右腕に着けた腕時計で現在時刻を確認し、そう呟いた。

「このまま何も起こらず順調にいけばいいんだけど…」

「でも、そうはいかないみたいだぜ」

劉凱は工事現場の入口を見ながらそう言った。

「あら、そのようね」

そこには二人の少女少女がいた。

とある高校の制服を着た髪を整髪料でツンツンに尖らせたウニ頭の高校生、上条当麻と常盤台中学の制服を着た茶色い短髪の少女、御坂美琴だ。

「やつと見つけたわよ。結標淡希」

御坂は鉄骨の上に座り余裕の笑みを浮かべる結標を睨み付けながら言った。

「あら、恐い顔。女の子がそんな顔しちゃモテないわよ?」

「私はアンタと無駄話をしに来た訳じゃないのよ。」

私はその残骸レムナントをブツ壊しに来たんだから」

「あら、それは困るわ。」

これは私にとって救世主となる大事な物なのだから。

でも、かと言ってこれを守るために貴女と戦うというのも愚策だわ。level4とlevel5の間には圧倒的なまでの壁があるんだから。

だから、貴女達の相手は彼に任せることにするわ。

と、言うわけで後は頼んだわよ劉凱」

「ああ」

そう言って劉凱は鉄骨から飛び降りて二人と相對し、結標は何処かへと空間轉移し

た。

「んじや、始めようか。」

「精々楽しませてくれよ、第三位、ウニ頭」

「どうやら逃げられそうにないなこりやあ…。」

「御坂、まずはコイツを倒すことに専念するぞ」

「分かったわ」

.....

PM8:10

「おつうえ、…ハア、…ハア、…やっぱり自分自身の転移はキツイわね」

とあるビル内へ転移した結標は過去に空間転移を失敗し、片足を地面にめり込ませたトラウマからくる吐き気を堪えられずに嘔吐した。

「体調を崩してるとこ悪いですが…：隙ありですよ」

声が聞こえたと同時に右肩、脇腹、左太腿に風切り音と共にコルク抜きが刺さった。

「ぐうあつツツ！」

各部の痛みに跪きながらも周囲を見回すと、たくさん並べられていたテーブルの一つ



に常盤台中学の制服を着たツインテールの少女が腰掛けていた。

白井黒子、結標が昨日の夕方、レムナント残骸を奪うために襲撃した風紀委員だ。ジャッジメント

「ふふふ、私が貴女に負わせた傷と同じ場所を攻撃するだなんて、貴女結構根に持つタイプなのね」

「ええ、私としても、今回のことに関してはかなり頭にきていますの」

白井はテーブルから降り、跪く結標の前に立った。

「余程あの常盤台のエースに心酔しているのね。」

でも、そこまでして守る価値があるの？

レールガン超電磁砲が思い描く、身勝手で、おセンチで、絵空事しかない世界を「

「守りたいに決まっていますの。」

「どれだけ身勝手だとしても、お姉様は望んでいますの。私や貴女がこんなことをしないでいい世界を」

白井は今も残骸レムナントを破壊するために街中を駆けずり回っている愛するお姉様のことを

想いながら言う。

「お姉様は、その気になればコイン一つで全てを粉々に打ち砕くことができる。」

それでも『争って欲しくない』と、どんな絶望の中でも真顔で言える人なんですの。

…その想いを、私が蹴るとお思いですか！

……これから貴女を日常へ帰してさしあげますわ。

何処かで誰かが想い、この私が共感した通りに」

「ならば、貴女を倒してその想いを踏み躪れば、私の勝ちかしらね？」

白井は愛するお姉様のために、そして何より自身の掲げる正義の名の下に、一人の少女を日常へ帰すために。

結標は劉凱が超電磁砲レールガンともう一人の男を倒して、追いつくまでの時間稼ぎのために。

二人の少女は互いの思惑を胸に、再び相対した。

.....

P M 8 : 1 8

肌寒い風が吹き荒び、辺りのビルから漏れる光や月光により照らされているといえども、薄暗いといえる鉄骨が組まれた工事現場に断続的な稲光と共に雷鳴が鳴り響いた。「ハア……ハア……、なんで何度も直撃してるはずなのに効いてないのよー！」

御坂はかつて学園都市最強の能力者、一方通行と対峙した時と同等かそれ以上の焦燥感に駆られていた。

稲光と轟音の正体は御坂が劉凱に向けて放った雷撃の槍だった。

御坂の放つ雷撃の槍はlevel5の名に恥じぬ強力なものだった。

しかし、その雷撃の槍を持つてしても、劉凱には傷一つ付けることすら適わなかった。劉凱に当たった瞬間、雷撃の槍が周囲に弾けるようにして拡散するのだ。

「無駄だ、無駄。諦めろ。」

その程度の力じゃあこのオレにはかすり傷一つ付けられねえよ」

「なら、これならどう!」

御坂は磁力を発生させて周囲に散らばる砂鉄を操作し、砂鉄の竜巻を劉凱を中心に巻き起こす。

だが、そんな普通なら体がズタズタに引き裂かれる竜巻の中で尚、劉凱は平然としていた。

「つたくよお。」

こんなのは……、無駄だつてんだろうがよお!!」

劉凱が蚊でも振り払うような動作で右腕を振るうと、劉凱を襲っていた砂鉄の竜巻が内側からの圧倒的な力により、弾け飛んだ。

……いや、違う。

御坂の起こした砂鉄の竜巻を破壊したのは、内側からの圧倒的な力ごと破壊したのは

……

……一本の右腕だった。

「今だ！ビリビリ！」

イマジンブレイカー  
幻想殺し。

それがこの現象を引き起こし、今、劉凱の振るった右腕を掴むことで劉凱の能力を封じている上条の持つ能力だ。

御坂が砂鉄の竜巻で劉凱を攻撃するのと同時に、劉凱の視界が封じられている内に上条は劉凱の能力を封じた上で、必ず倒せる展開にするために劉凱の背後に回っていたのだ。

「ああ？（能力が使えないだ?!）」



劉凱は右腕を思いつきり上下に振って上条を地面に叩きつけ背中から思いつきり地面に叩きつけられた痛みで右腕の拘束が緩んだ後、右腕を振り払いながら左拳を上条の鳩尾に叩き込んだ。

地面を割る程の一撃は上条の意識を完全に絶ち、劉凱は勢いそのままに左腕を軸に右脚による後ろ回し蹴りでコインの側面を蹴り、御坂の放った超電磁砲レールガンの軌道を逸らした。

蹴りの勢いで体勢を整えた劉凱は真正面から御坂が知覚できないほどの速度で肉薄し、鳩尾に拳を叩き込んで吹き飛ばした。

聖人の力で鳩尾を殴られた御坂はそのまま気を失った。

この間、僅か1秒にも満たない。

これが、世界に二十人といない聖人が誇る圧倒的なまでの身体能力である。

「…学園都市第三位つってもこんなものか。」

この調子じゃあ科学サイドにはオレの好敵手足り得る奴との出逢いには期待できそうもねえな。

さて、嬢ちゃんどこに行くとするか」

劉凱は聖人としての圧倒的な身体能力を用いて目にも止まらぬ速さで工事現場から姿を消し、事前に打ち合わせていた結標の逃走先のビルへと向かった。

劉凱が立ち去った数十秒後、工事現場に横たわる二人の指が、微かに動いた。

## 第十六話 残骸争奪戦

turning point

t

PM8:24

とあるビル内にてツインテールの風紀委員、白井黒子、レムナント残骸を狙う露出度の高い服装の霧ヶ丘女学院生徒、結標淡希、二人の少女が闘っていた。

しかしその闘いには既に決着が着いていた。

白井黒子が結標淡希の攻撃により、テールや椅子の下敷きになるという形で。

しかし、下敷きとなつている胸から下の部分が動かせず、痛みで空間移動も出来ないが、押しつぶされてはいなかったのは僥倖だった。

劉凱とはここを合流地点としていて、無闇にここを離れる訳にはいかなかったので暇つぶしにでもと、結標はそんな身動きの取れない白井の下にしゃがみこみ、

「昔々、ある所に強大な能力者と組織があつたの」

と、突然訳のわからない話をし始めた。

「その組織は、莫大な利益を得るために、その強大な能力者のクローンを作ろうとした。



同じように、クローンもまた強力な能力を有していると信じて。

しかし、実際にはクローンの性能はオリジナルの性能の1%にも満たない、とんだ『出来損ない』であった。

ねえ白井さん。クローニング技術で生まれた子供は、遺伝子レベルで同じ骨格を持つ  
のよ。脳の構造だって、オリジナルと全く同じはず。にも拘らず得られた能力に差が出  
たのは何故かしら」

結標は問いかける。

しかし、白井はその問いかけを一笑に付した。

「く、だらない、仮説ですわね。学園都市の学校が、どんな風にランク付けされているの  
かも、ご存知ありませんの……？」

同じ人材でも育て方や環境の違いで開花の仕方は変わってくる。だからこそ、様々な  
能力開発理論が生まれ、学校にも名門校や優良校などのランク付けも生まれてくるの  
だ。

しかし、

「いいえ。作られた個体達は、学習装置などを用いて人工的にオリジナルと全く同じ才  
能開花を迫られた。

それでもやはり結果は迫い着かなかつた。

同じ脳を使って、同じ結果が出ないのなら、“単純な脳構造以外の項目”が能力開発に関わっているとは思わない？　そして、その項目を見つけ出す事ができれば、人間の脳以外の演算装置だって、能力を扱ってしまう事になってしまわないかしら？　つまり、とそこで結核はその話の核心を口にした。

「能力の発現に、人の脳を使う必要なんてあるのかしらね？」

超能力とは、量子論的な考えを飛躍させたものだと言われている。

『自分だけの現実』という、意図的に『枠』を歪めた演算機能と判断能力を使って現実の観測を行う。そして、その結果に応じて極めてミクロな世界の確率を不自然に変動させる事で何らかの現象を生み出すのが超能力である。

ミクロな世界の『観測者』は人間の頭であり、故に人間の頭を適切に操作し、ミクロな世界を観測させれば、ミクロな世界を歪めることができる。例えば、『常識的現象』が『99%存在』し、『超常現象』が『1%存在』する時には、普通の人間が観測すると99%の確率で『常識的現象』が現れ、『超常現象』が現れる確率はわずか1%でしかない。

しかし、能力開発などで頭を操作された人間は、『1%の存在』でしかないはずの超常現象を本来の確率を無視して無理やり現れさせることができるのである。そしてミクロな世界の歪みが、タイムトラベル物の創作物の設定で有りがちな『バタフライ効果』の

ように、マクロな世界にも影響を及ぼし、マクロスケールでの超常現象、本来ありえないはずの歪んだ現象を引き起こす。

この、操作された人間の頭の中にある『超能力を発生させる何か』を『自分だけの現実』パーソナルリアリティと呼ぶのであるが……。

「ねえ白井黒子さん。貴女は私が失望してしまうような人間至上主義じゃないわよね。『頭脳』なんて呼ばれるものは人間以外にだつてくつついてるでしょう？」——ほら、

例えば『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』、とか」

「ま、さか。演算機器が、わたくし達と同じような能力を発現すると？ 貴女、本気でそんな事を考えてますの？ それは機械に心があるというのと同じレベルの寝言ですわよ」

白井の言葉に対して、結標はムキにもならず、

「ええ。機械は所詮、機械。そもそも情報処理の方向性そのものが現象の観測とは大きく外れているもの。だけど、予測することはできる。あらゆる現実を完全に再現する究極のシミュレートマシンを使えばね。ねえ、白井さん。貴女は初めてその能力を手に入れた時、どんな気分がしたかしら？」

結標は語る。

「私は正直恐ろしかったわ。この能力で何ができるか考え、怯えて。実際にその通りの

結果が出てしまい、さらに脅えて。私はね、白井さん。この手に力がある事がこの世の何よりも怖かったの。他愛のない想像通りに人すら殺せてしまっただろうこの力が。だから、私は問いかける。人間以外に超能力を扱える個体は存在するか否かを」

結標はそのキャリーケースを大事そうにそつと触れた。

「例えば、イルカは海のヒューマンと呼ばれ、蟻の社会には厳格な規律と秩序がある。超能力は人間の特権なんかではないはず。ではなぜ、人間でなくてはならないの？ 私はそれが知りたい」

そのために、『残骸』<sup>レムナント</sup>から新しい樹形図<sup>ツリーダイアグラム</sup>の設計者を作り上げる。

それが彼女達の計画であった。

「あなたはそのために樹形図<sup>ツリーダイアグラム</sup>の設計者を？」

「ええ。いくら価値ある残骸でも、私一人では創り上げられないわ」

だから、技術をもった仲間が必要だったの、と結標は白井の問いに答える。

「どう、白井さん。あなたにだって、その力で人を傷つけてしまったことがあるでしょう？ 私にはそれが分かる。私と仲間にならない？ そうすれば——」

「お断りですわ」

白井は迷うことなく即答した。

「分かってないの？ もしもヒト以外のものに超能力を宿せるとしたら、私達だって空

間移動能力者なんて怪物にならずに済んだじゃない。そもそも私達は、こんな危険な能力を持たなくても良かったはずなのに——」

「馬鹿馬鹿しい。どんな可能性を示された所で、わたくし達の能力が消えてなくなる訳じゃありませんの」

白井の言葉に、結標は黙った。

「すでに能力者になってしまったわたくし達に、他の可能性を提示した所で何になりますの？　そもそも、能力が人を傷つける、何て言い草がすでに負け犬してますわよ。……力が怖い？　傷をつけるから欲しくない……？　口ではそう言いながら！　人にこんな怪我を負わせたのはどこの馬鹿ですよ！　自分達の行いが正しいか否か知りたければわたくしの傷を見なさい！　これがその答えですわ!!」

能力に意思はない。人を救う道具にもなれば、他者を傷つける武器にもなる。

それは力を扱う能力者自身によって決まるのだ。

白井は、自分を床に押しつけてるテーブルや椅子を押し上げ、立ち上がる。

「結局あなたの言っていることは、“周りは平凡、自分は特別”などという見下し精神まるだしの汚い逃げでしかありませんわ！　今からその腐った根性を、たたきのめして差し上げますの！」

今の白井黒子を支えるのは確固たる信念。開いた傷口から溢れる血で服も身体も汚

れていても、泥臭く立ち上がる。

そばにあった電気スタンドを握りしめる。

白井は一步ずつ、近づいていった。

「ひっ!？」

結標は後ずさる。

その白井の姿は、まるで彼女の言っていることこそが正しいと証明しているように思えた。

「(こ、こないで……)」

結標はその時、震える手で隠し持っていた拳銃を取り出し、構えた。

白井が床を蹴り飛び出したとき、銃声が鳴り響いた。白井は床に倒れる。彼女のポケットから、御坂のコインが飛び出し、手放した電気スタンドが割った窓から転がり落ちていった。

一方で、結標はただ無言の沈黙のままに結論を出す。

全ての元凶。自分の周りで、今まで誰かが傷ついたのは。

目の前の彼女を、拳銃で撃とうとしたのは、紛れもなく自分自身だ。

自分こそが……怪物だ。

「は、ア……ア、がつ。ガアアアああああああああああああああああああああああ

あああああああッ！」

床に座り込み、両手で頭を抱え、結標は絶叫する。

周囲の空間が歪み、彼女の座標移動が暴走する。

しかし、その暴走した能力は窓から侵入してきた一人の男によって強制的に止められた。

その男は、引き締まった筋肉質な身体に白を基調とし、青色の蓮の花柄で飾った中華服を着崩していた……。

「……劉……凱……」

劉凱は床にしゃがみ込み、劉凱を見て呆然としている結標の下まで歩き、腰をかがめて顔を近づけて結標の頬を右手でむぎゅつと掴むように挟み込んだ。

そのせいで、緊張感のない変な顔になった結標に、

「つたく、何暴走してんだよ嬢ちゃんよお。」

んなことしたら周りに居場所を知らせることになる上にテメエも死ぬかもしれねえんだぞ。

自分が望んで手に入れた能力ぐらい完全制御しやがれ！

自分の能力ごとくにふりまわされてんじゃねえぞコラア!!」

その言葉を聴いて、結標は目が覚めるような感覚に陥った。

『自分が望んで手に入れた能力ぐらい完全制御しやがれ!』

そうだ、何を思い悩む必要があった。

全て、幼い頃の自分が望んだことじゃない……。

制御できずに周りを傷つけたのは、……自分が不甲斐ないからじゃない。

『テメエの能力ぶぞくひんごときにふりまわされてんじゃねえぞコラア!!』

そうだ、何を思い悩む必要があったんだ。

能力なんて…、自分の付属品でしかないのに……。

こんな付属品ごときに今まで振り回されてたなんて、……我ながら情けないわ。

そもそも、能力を手に入れてしまった今、新たな選択肢を創り出したところで。

そんなものは白井さんの言う通り、何の意味も無いじゃない……。

……白井さんや協力してくれた皆には、悪いことをしちやったわね。

結標は頬を掴む劉凱の手をそつと放して立ち上がる。

今度は、人を傷つけるためではなく、人を、……護る、……その第一歩を踏み出すために。



自分の不始末ぐらい自分で片付けたいけど…、今の私じゃあ力不足…。  
だから…

「劉凱、依頼内容を変更させてもらおうわ」

「いいぜ、元より俺の依頼主は嬢ちゃんだ。金も既に貰ってるしな。嬢ちゃんの望むとおりに動いてやるよ」

「ありがとう。」

「それじゃあ、貴方はー」

その時、下からは閃光が、上からは純白の人間大の砲弾がビルの一室を襲った。

「ー私を全力で守って」

最後まで手伝ってね、劉凱。

「了解だ」

劉凱は猛獣のような表情を浮かべ、突如飛来した人間大の純白の砲弾に拳を叩き込んだ。  
だ。

「テメエが嬢ちゃんを狙うってんなら、オレが相手してやるよ。メルヘン野郎」

「ちっ、また面倒そうな野郎だな」

二人の闘いを背後に、白井は床の一部を破砕した見覚えのある閃光を見て叫んだ。

「来ては行けません！お姉様！つて……へ？」

結標は下に超電磁砲レールガンとツンツン頭の少年を見つけると、白井の襟首を掴んで持ち上げたかと思うと、悪戯っぽく笑い、そのまま白井を下にいる二人へと放り投げた。

「ほうらっ！ちゃんとキャッチしなさいよっ！」

「んなあああああにするんのですのよおおおおおおおおおおおおおとおおとおおとおおとおおとおおっ!!!」

白井が超電磁砲レールガンがぶち開けた穴から落ち、下にいたツンツン頭の少年にキャッチされるのを見届けた結標は、今までの冷たい人を馬鹿にしたような笑みや挑発するような笑みではなく、心の底から出た暖かい笑みを浮かべ、

「ごめんなさい。」

それと、……ありがとう。」

結標はそう言うと、後ろの鬨いに巻き込まれないように、他の場所へと空間移動した。それを見て下の二人は焦った。

「ちよっ！どうということよ！待ちなさいっ！」

「追うぞー！ビリビリー！」

「待っててくださいのー！」

二人が結標の後を追おうとすると、上条にお姫さまだっこされている白井が二人に制止の声を掛けた。

「…もう、…大丈夫ですよ。」

彼女を追う必要はもうありませんわ」

「どういふこと？」

白井は先程見た、彼女の笑顔を思い出しながら、

「彼女にはもう残骸レムナントを使ってどうしようもないという気はないということですよ」

白井は二人に向かってそう笑顔で言い、その笑顔を見た二人は顔を見合わせた後、互いに『仕方ないな』という風に笑った。

「じゃあ、帰ろうか。俺達の元にちしようの世界へ」

## 第十七話 残骸争奪戦

## Beacon of th

e | f i g h t

P M 8 : 3 2

「うっ、急がないといけないっていうのに…、このトラウマはどこまでも足を引つ張つてくれるわね」

結標は先のビルから約1kmほど離れた廃工場や廃ビルが建ち並ぶ、スキルアウトの溜まり場となっている掃き溜めアウトスポットと呼ばれるエリアの細い路地で、廃ビルの壁に手をついて休んでいた。

「にしても、これどうやって破壊しようかしら。」

私の能力じゃあ100%再利用不可能な程破壊することはできないし、たとえ地中奥深くに転移させても学園都市の技術力なら容易に掘り出せるでしょうし…、困ったわね」

「じゃあよ、それをこっちに渡してくれねえか？俺ならそれを100%再利用不可能な程破壊することができるからよ」

結標が声のした方、細い路地の出口に視線をやると、そこには短い黒髪をオールバックにし、両サイドに剃り込みを入れ、額の左側と右頬に傷のある、どこかの学校の制服を着崩して学ランのボタンを全て外して着ている不良のような高校生ぐらいの少年が手をこちらへ向かって出しながら歩いてきていた。

彼女は知る由もないが、彼—アンチオリジンージェイルロード—はA Oの構成員の一人で、レムナント残骸奪取任務において部隊長を任されている程の男だ。

一見ただのどこにでもいるようなごく普通の不良に見えるが、その少年からは何か異質なモノが感じられた。

一瞬でも気を許せば、その瞬間命を刈り取られるかのような、そんな死神と対面しているかのような感じが。

「悪いけど、素性も分からない貴方にはいどうぞと軽々しく渡せるものじゃないのよ」

結標は気丈にそう返すが、その額には冷や汗が見られた。

ジェイルロードは溜息を吐き、『残念だ』といい、

「大人しく渡せば命までは取らなかつたつてのに」

ジェイルロードの失望したかのような声音が聞こえた時には手を伸ばせば届く距離にジェイルロードがいて、その右手を結標の顔へと伸ばしていた。

結標は言い知れぬ危険を感じ、咄嗟に自身を座標移動で転移させてその手から逃れよ

うとするが、何故か演算は完璧にできているにも関わらず、能力が発動しなかった。体をひねって回避しようにももう回避不可能なところまで死神の手は迫っていてそんな暇もなかった。

結標は反射的に目をつぶった。

瞬間。

ボンツという破裂音と共に腹部に衝撃を感じ、結標は後方へと吹き飛ばされた。

強かに腰を地面に打ち付けると思いきや、何故か着地点に見えない、まるで空気のクッションのようなものがあり、緩やかに腰を地面へつけた。

「へ?」

「いやあ、ギリギリ間におうて良かったわ」

目を開けると、そこには 黒髪の癖毛を軽く整えた20代前半ぐらいの陰陽師のような格好をした若い男——熾城清明しじょうきよあき——が立っていた。

「ちっ、邪魔が入ったか」

不良のような風貌の少年は眉間に皺を寄せ、忌々しげに舌打ちをする。

しかし、一瞬何かに気づいたかのように目つきの悪い眼がピクつと動いたかと思うと、薄い笑みを浮かべた。

熾城はジェイルロードのその仕草を不思議に思うが、彼が周囲に展開している索敵用

式神には何の反応もないので、ハツタリかと思つた。

しかし、その一瞬の読み違いが熾城の行動をワントンポ遅らせた。

気が付いた時には既に上空200m地点から豪炎を纏つた悪魔リーイフリートーが猛烈な速度で熾城達のいる細い路地に急降下してきていた。

今から避けるのは不可能だと判断した熾城は即座に結標の近くへ移動し、周囲に防御結界を張つた。

直後

防御結界に聴覚が一時的に麻痺する程の轟音と共に途轍もない衝撃が加えられたと同時に、結界外が真っ赤に染まつた。

「これは貰つていく」

防御結界に覆われたこの空間内にいるはずのない人物から声をかけられ振り返ると、そこには気絶した結標と残骸レムナントの入ったアタッシュケースを持ったジェイルロードがいた。

ジェイルロードの背後の防御結界に穴が空いていたことから、恐らく何らかの方法で結界に穴を空け、後ろから油断していた結標を気絶させて残骸レムナントを奪つたのだろう。

「逃がさへんで！」

熾城は人型に切り取られた白色の紙を陰陽術で青、赤、黄、白、黒色の閃光とし、ジェ

イルロードへと放った。

しかし、ジェイルロードはそれを右手で振り払うかのようにして五色の閃光をかき消し、

「イフリート、コイツが追ってこないように始末しておけ」

と、命令を下した。

直後、莫大な衝撃がガタがきていた防御結界を破壊し、炎を纏ったイフリートが現れた。

「あまり長居はしたくねえから瞬殺させてもらおうが異論はねえよな」

「ちっ、下手こいてもうたなあ」

ジェイルロードの姿を探すが、一瞬イフリートに気を取られた隙に逃げられたように、目視ではもちろん、索敵用式神でも見つけることは適わなかった。

「まあ、逃走したジェイルロードの行方は守羅ちゃんがもう捕捉しとるやろうから……」

探しても見つからないものは仕方ない、と自分はジェイルロードを追うことを諦めて仲間に任せることにし、まずは目の前の敵を撃破するために気絶して倒れた結標を背に、右手人差し指と中指の間に札を挟んで構えた。

「僕はこの娘を護りながらコイツの相手でもしときますかね」



ジェイルロードは闇に包まれた暗い路地をアタツシユケースを片手に小さな声で誰かと話しながら走っていた。

彼が耳に付けた超小型通信機からは彼のもう一人の仲間であるアクロの快活な声が聞こえていた。

『無事残骸<sup>レムナント</sup>を奪取できたみたいだね』

「ああ、現在追っ手をイフリートが足止めしている。

お前も敵の目を引き付けるために適当なところで目立つ様に暴れてくれ」

『りょーかい』

通信がブツツという音とともに切れ、路地の曲がり角を曲がった瞬間、視界が死を匂わせる青白い閃光で埋め尽くされた。

「ーッツツ!?!」

ジェイルロードは咄嗟に右手を目の前に翳すことでその青白い閃光を打ち消すことができた。

が、

「ゴハッ!」

背後から凄まじい衝撃が遅い、前方へと吹き飛ばされてしまった。

背中 of 痛みを我慢して前回り受け身をとることで衝撃を殺すも、掌にアタツシユケー  
スの硬質な質感がないことに気付いた。

『しまった！』つと思ひ振り返るも、既に襲撃者は残骸レムナントの入ったアタツシユケーと共に  
姿を消していた。

「クソツッ！油断した！」

ジェイルロードは眉間に凄まじく皺を寄せた恐ろしい表情で耳につけている超小型  
通信機 of スイッチを入れ、アクロとイフリート兩名へと繋げた。

「悪い、残骸レムナントを奪われた！」

青白い閃光が襲ってきたから恐らく相手はアイテムの連中だ。

だが、そこから誰かの手に渡るかもしれないねえからとりあえずお前らは見かけた奴は手  
当たり次第潰していけ！」

『おーけー。まっかせといて！』

『次んな失態しでかしゃがったらテメエから灰にするぞ！』

「ああ、分かってる」

ジェイルロードは通信を切り、夜空を見上げた。

「まずはテメエからだ。中華野郎」

見上げた先には満月を背に頭からこちらへ向かって空気を蹴って加速しながら急降

下してくる、だぼつとした右太股に紅い龍の刺繍が施された白い中華風袴に綺麗な植物の刺繍が施された中華風の胴着姿の黒髪の男がいた。

「垂降蓮華」

互いに右腕を引き絞り

瞬間

莫大な衝撃波で周囲の廃ビルを破壊しながら、二つの拳が激突した。

## 第十八話 残骸争奪戦

The | t | r | u | t | h | i | n |

f o g

P M 8 : 4 5

第七学区が一望できる高層ビルの屋上で、肩まで届く薄い赤の混じった白髪を夜風になびかせ、左手に能力を用いて立体映像のようにマップを表示させ、そこに映るいくつかの光る数字を眺めながら聖はスマートフォンを耳に当て、波嶺に状況報告をしていた。

「現在、熾城さんは結標さんを守りながら侵入したA Oメンバーの一人と交戦中です。交戦相手は雰囲気から言って恐らく悪魔なので少々手こづるでしょう。」

奪われた残骸レムナントの奪取に向かったバツシユさんも残骸レムナントを奪っていった少年と交戦中で、残骸レムナントはバツシユさんが交戦する前にアイテムによって奪取され、現在掃き溜めアウトスポットから第二十三学区へ向かって移動中です」

『わかった。聖は引き続きそこから全体の監視をしつつ、みんなのフォローをしてあげて』

「分かりました」

聖は通信を切り、再び学園都市全域の監視を再開した。  
すると

「これは……」

左手に表示させている立体映像マップに突如紫色に光る③がかつて上条当麻と神裂火織が戦った、第七学区のスクランブル交差点に現れた。

そのマップは青、黄、赤、紫の四色と1〜5の数字で敵の危険度を表し、先述した順に危険度が高くなっていく。

つまり、青の1が最も危険度が低く、紫の5が最も危険度が高いということだ。

レベル5目前という結標をなんの抵抗もできないまま殺す寸前まで追い詰めたジェイルロードが黄色の⑤、熾城と交戦中の悪魔であるイフリートが黄色の④であることも、相手の異常なまでの強さが窺い知れるだろう。

「まずい……、けど……」

しかし、その紫の光点の近くには、緑色に光る☒の表示があった。

緑は味方を表し、そして数字は1〜10の十段階でその強さを表している。

つまり、

緑の☒とは

その者が最強の味方であることの何よりの証左である。

ビルから漏れる光や街灯に照らされる中、如月はさつきから見えている爆発や火柱の方へ向かつて走っていた。

走りながら如月は眼前の光景について考察していた。

（さつきから掃き溜めの辺りで立て続けに爆発やら火柱が見えるけど音は聞こえないんだよね。

それに残骸事件ではそんな爆発や火柱が上がるようなことはなかったはず。

AOの連中が侵入して残骸を狙ってるのかな？

だとしたら交戦してるのはたぶんAOの連中と学園都市の暗部組織だろうからAOの誰かが風紀委員や警備員が来るのを防ぐ為に最低限の結界を張って音だけでも遮断してるってことかな。

この調子じゃ、結標のところにAOやらなんやらが残骸を奪取しに行つてそうだな。念の為にいとくんを結標のところに向かわせたんだけど、正解だったみたいだね）

「にしても、おかしいな。もう着いていてもおかしくないぐらいには走ったつもりなんだけどなあ。

逆探知の可能性があるからできれば使いたくなかったけどしょうがない」

如月は一度立ち止まり、全方位へ魔力の波を放った。

すると、一定距離まで行った魔力が全て何らかの力で乱された感覚があった。

「まさか、幻術か結界の中にも閉じ込められた？」

「正解です。ここは私の有幻覚により構築された、外界より隔絶された世界ですよ」

声が届かぬと同時、深い霧が発生し、その中から黒いロングジャケットを纏い、艶やかな藍色の長髪をうなじで縛った空色の瞳の男が不敵に笑んで立っていた。

そして、その男の両手には以前会った時には無かった異形の指輪がはめられていた。

「貴方は……」

「これは失礼。そういえば以前お会いした時は自己紹介をしていませんでしたね」

男は恭しくお辞儀をし、

「私はA<sup>アンチオリジン</sup>O 参謀総長、名をクロードⅡセイクトウエルと申します。以後、お見知りおきを」

と名乗った。

それに倣い、如月も警戒しているためお辞儀はしないが、「如月樹よ」と名乗り返した。「にしても、ヘルリングをこの世界に存在できる六個全て持つてくるなんて随分気合が入ってるね。

今回は全力で私を殺しに来たって訳？」

そう、如月の言う通り、クロードは左右の人差し指、中指、薬指にそれぞれ三つずつヘルリングをはめていたのだ。

クロードは笑い声を押し殺しながら、それを否定した。

「それも面白そうですが、残念ながら違いますよ。

今回は単純に貴方の足止めが目的です。

今回の事件に貴方に介入されると色々と不都合があるものですから」

如月はその言葉を聞き、訝しげな表情になる。

「面白そう、ね。

貴方、本当にそう思ってる？

どうにも私には違うように思えるんだけど。

だって、本当に殺す気があったのならあの地下道の時に数秒と掛からずに殺せたはず

なのに、貴方は殺さなかったじゃない」

「フッフ、貴方と殺し合うことが面白そうだというのは紛れもない本心ですよ。

それと、あの時は貴方を殺せという命令がなかったから殺さなかっただけですよ。

今と同様にね。」

クロードが身に付ける六つのヘルリングのうちの一つである、水晶クリスタル軍勢スクエアドゥラが藍色に

輝いた。



次の瞬間、辺り一面のアスファルトが罅割れ、その下から水晶で出来たゴーレム、鳥、狼、熊など様々な形の怪物が如月を包囲するように現れた。

「さあ、まずは小手調べです。」

先に言っておきますがそれらはタダの水晶人形ではなく水晶軍勢により作られた特別製で、生半可な攻撃では傷一つつけられませんよ」

如月は静かに刀身が薄氷の如く薄く、刀身越しに向こう側の景色が見えるほどにも関わらず、絶対に折れることも欠けることもない神刀、『薄氷之絶』をアイテムボックスから取り出し、右前に半身になって前傾姿勢になり、左手で鞘を持ち、右手で刀の柄を握って居合の構えをとった。

「なら、生半可じゃない攻撃を加えればいいだけ」

水晶の軍勢が如月に向かって攻撃を開始した。

水晶による飛び道具型の攻撃は前衛の水晶体に当たっても吸収されるらしく、後衛の鳥型が水晶羽の弾幕を張る中、前衛の熊や狼、ゴーレム達は弾幕に度々当たりながらも気にせず襲いかかってきた。

「二刀流居合【垂渦】」

如月は後数寸というところまで敵の攻撃が迫ったところで体捌きを用い、剣を抜いたことすら、最初っから剣など抜いていないかのように錯覚するほどの高速で抜刀しマナ

を含んだ渦型の斬撃を発生させて水晶体達の攻撃を防ぐと同時に前衛の敵を全て切り刻みつつ巻き上げ、一時的に身動きを取れなくし、

アマネダチ  
「【周断】」

その隙に【垂渦】を放って直ぐ納刀した薄氷之絶をもう一度超高速で抜刀し、大量のマナを波状の斬撃に乗せた飛ぶ斬撃を全方位に向けて放った。

その飛ぶ斬撃はいとも容易く水晶体達を切断し、それだけに留まらず、周囲の有幻覚で形作られたビルごと切り裂きながらクロードの目前までたどり着いたが、クロードは瞬時にさらに高純度の水晶体を生み出し、それを防いだ。

「幻影の宴はまだまだ始まったばかりです。存分に楽しんで下さいね」

## 第十九話 残骸争奪戦 The Freeshoot

er

PM8:47

アウトスポット  
掃き溜めの、左右を建物に囲まれた道幅の狭い道路を一台の黒のワンボックスカーが走行していた。

ワンボックスカーの中では四人の少女が会話していた。

麦野沈利、絹旗最愛、フレンダ<sup>II</sup>セイヴェルン、滝壺理後のアイテムメンバー四人だ。話題は今回の任務についてだった。

「以外と超ちよよかったですね。もっと超手こずると思っていたのですが」  
絹旗が肩をすくめてそう言うと、それに反応したフレンダが胸を張って、

「結局私が提案した奇襲作戦のお陰って訳よ！」

と言った。

それに対し、

「と言ってもアンタは提案しただけで作戦自体を考えたのは私で実行したのも私と絹旗





めていた。

「滝壺さん、敵の大体の位置は南南東で超あつてますか？」

絹旗はビルの壁に背を預けながら横にいる滝壺に尋ねた。

「うん。そこから二つの反応がする」

「よつし、そうと決まれば早速行くつて訳よ。」

スナイパーなんて障害物の多いこんなところじゃ全く怖くな

「フレンダ超伏せてください！」

絹旗がフレンダの言葉を遮つて無理矢理頭を抑えて伏せさせると、ちようどさつきまでフレンダの頭があつた位置を弾丸が背後のビルを突き破つて飛んできてそのまま向かいのビルも貫通してどこかへ消えた。

「いいい一体なんなのつて訳よおおおおお!!」

「超狼狽える場合じゃありません！急いで広い道に出ますよ！

さつきは超偶々微かな音で分かつただけで殆ど勘です！

次も避けられる保証なんて超どこにもありませんよ！」

絹旗は狼狽えるフレンダの手を引いて滝壺と共に大通りへと出た。

「さあ、超走りますよ！」

絹旗はそう言つて二人を連れて走り出した。

「ん？何か後ろから変な音しない？」

ドゴツゴガツという破砕音が聞こえ、後ろを振り返ると、何かが廃ビルを高速で破壊しながら進んでいて、それはカーブを描いてこちらへ向かってこようとしていた。

「あれは…まさか……、さっきの弾丸？」

理解した瞬間、絹旗は自身の動に従って横に飛んだ。

すると、絹旗の脚を僅かに抉って弾丸が通過した。

「ツツツ!!？」

絹旗は榴弾砲すら防ぎきるオフエンスアーミー窒素装甲に守られている自身の身体に傷を付けたことに

驚きながらも、敵の能力によるものだろうと冷静に判断し、二人に「二人は超気にせず走ってください。弾丸は私が超なんとかします」といい、周囲を警戒しながら再び走り出した。

（超普通なら弾丸が掠ったならば切り傷状の傷が超できるはずですが、あの弾丸に受けた傷は切り傷状ではなく抉れていました。

ということはあるの弾丸は超無回転で飛んできたってことになりましたが一体どんな能力を使えばそんなことが…。

まあ、何はともあれ、あの弾丸は一見何をしてても超防ぐことはできそうに見えませんが、弾丸自体には何かしらの特殊な加工や能力付加は超施されていないようで、私に被

弾した弾丸の側面はボロボロに削れていたのが超辛うじて見えました。

それなら防がずに弾丸の側面に衝撃を与えて弾丸自体を超破壊すればいいだけです。弾丸の攻略法を見つけた絹旗は走りながらも前後左右あらゆる方向から飛んでくる弾丸を誤って前面に接触しないよう注意しながら殴りつけて破壊し、狙撃手のいる廃ビルへと急いだ。

アウトスポット  
掃き溜めにある、周囲のビルと比べても一際高いとある廃ビルの最上階に二人の男女がいた。

先程アイテムを狙撃した者達だ。

しかしそこでは狙撃銃を構えたまま慌てふためいているボーイッシュな茶髪の少女をもう一人の革ジャンを着た青年が宥めているというなんとも暗部らしからぬ気の抜ける光景が広がっていた。

「うわわわわ、ど、どどどどどうしよう天牙。あの娘達このビルにたどり着いちやっただよ  
!？」

天牙と呼ばれた青年はハアと溜息を付きながら少女に言った。

「落ち着け優月。」



もう忘れたのか？

この狙撃はこっちの居場所を知らせて誘き出す為のもんだろうが。

このビルにたどり着いて良いんだよ」

それを聞いて優月と呼ばれた少女は少し落ち着いてきたようだ。

「そういえばそうだった。僕としたことがうっかり忘れちゃってたよ」

天牙は内心で “なんであんな真剣に聞いてて忘れるんだよ” と思つたが、もうじき麦野を除いたアイテムメンバーが侵入してくるのでその言葉を飲み込み、本題に戻ろうと口を開いた。

「それよかこっちからが本番だ。

アイテムの連中は俺が相手をしてあいつらが持つてる残骸レムナントを奪取する。

お前は陰に隠れてサポートを頼む。

相手になるべく何が起こってるか気づかれない為にもちやんと隠れとけよ」

「了解であります！

敵に見つからないよう陰に隠れつつ全力でサポートいたします！」

優月はおちやらけた雰囲気ですら敬礼をした。

天牙はそれをガン無視して背中を向けて適当に “おう、まあ頑張れ” と棒読みで返事をして階段を降りていった。

そして優月もその後を慌てて追いかけて行った。

「狙撃手がいるとしたらこの廃ビルしかないっぼいわね」

「超そうですね。超遠距離の弾丸を操るならどうしても上から俯瞰する必要がありますからね」

絹旗達三人は狙撃手がいるであろう、周囲の建物と比べて一際高い廃ビルの前にいた。

「罨が仕掛けられていると思うので私が先陣を切りますね。」

フレンダは滝壺さんを超守りながら罨を見つけて知らせてください」

「分かったわ」

そうして一行は絹旗を先頭に右後ろにフレンダ、そしてその左後ろに滝壺という順で並んで廃ビル内を進んでいった。

## 第二十話 残骸争奪戦 Lethal Weapon

PM9:09

絹旗一行は絹旗を先頭に、蛍光灯等の人工灯の一切が機能していない、闇が支配する寂れた真つ暗な廃ビル内を懐中電灯で照らしながら進んでいた。

「止まって」

絹旗の斜め後ろを歩いていたフレンダが静止を呼び掛けた。

フレンダは絹旗の前に出てしやがみ込んだ。

「やっぱり罍が仕掛けてあつた訳よ」

フレンダがしやがみ込んだ先に細い透明な糸が張られていた。

トラップの仕組みを調べるためにどうなつてるのかと糸の先を見てみると、右の壁近くに乱雑に積まれた段ボールの一つにクラツカーが紛れるように固定されていた。

糸はそのクラツカーの紐に繋がっていて、引つかかるとクラツカーが鳴る仕組みになつていた。

「なにこれ？もしかして新手の指向性爆弾？つてそんなことないわよね。

どつからどう見てもただのクラツカーだし」

フレンドはしゃがみ込んだまま段ボールに紛れているクラツカーを眺めて首を傾げた。

「……フレンドちよつと超離れてください」

フレンドは絹旗が何かに気づいたような表情をしていたので取り敢えず言われるがままに絹旗の後ろへ退った。

絹旗は脇に落ちていた瓦礫を拾ってその糸目掛けて軽く放つてみた。

瓦礫は放物線を描いて糸の上に落ち、瓦礫の重みで引つ張られた糸はクラツカーの紐を勢い良く引いた。

瞬間、ドガガガアアツツツ!!という凄まじい轟音と共にクラツカーから飛び出た紙吹雪が散弾銃のように廃ビルの壁を突き破り、それだけに留まらず、横にあつたビルも5 mほど削り取っていた。

その光景を前に一行は三者三様のリアクションをとっていた。

滝壺は目を見開いて驚き、絹旗は「やっぱりですか…」と小さく呟き、フレンドは驚いて尻餅をついていた。

「な、ななな何?!何これ何?!」

「さっきの狙撃弾と超同じですよ。恐らく敵の能力で貫通力が超高まっているのでしょ

う」

「いくら能力で貫通力を高めたからってただのクラツカーでこんなことができるものなの?」

「ええ、これは私の超推測ですが敵の能力は対象を等速直線運動させるものだと思うんです。

あの狙撃弾から念動力の可能性も超考えましたが、それならこんな罠は張らないでしょうし。

ですからただのクラツカーだろうとその能力を付加することで、形状を超留めている限り、ある一定の距離までは間の障害を超破壊しながら進み続けたのでしょう」

「ならどんなにしょぼそうな罠でも気を抜かずに対処していった方がよさそうね」  
「超そういうことです。」

「さあ、時間がありません。狙撃手に超逃げられる前に急ぎましょう」  
「その必要はねえよ。」

こつちもあんま時間ねえからよ、さっさと制圧して残骸レムナントを奪いたいんだわ」

突然声が聞こえた方を懐中電灯で照らすと、そこには首にチョーカーのような機械を付けた大学生ほどの男が歩いてきていた。

「貴方が狙撃手ですか」

「ああ、暗部組織レイブンの餓狼天牙だ」

「ここにくるまでに超あつたトラップは貴方が？」

「いや、そりゃあ俺の仲間がやったやつだろうな。」

俺の能力はトラップ作成にはむかぬえし」

「自分から聞いたというナンですが随分と超余裕ですね。些かアイテムを超舐めすぎでは？」

それ抜きにしても三対一のこの状況で正面から勝てると超本気で思つてンですか？」

三対一の正面対決という状況下でなお余裕を感じさせる態度にアイテムを舐めてると思つた絹旗は僅かな憤りを感じていた。

「思つてるとも、第四位の腰巾着共が粹がるなよ。寿命を縮めるぞ？」

その一言が決定打となり、絹旗は勿論フレンダも憤慨した。

「どオやら超死にたいよオですねこのクソ野郎は。」

「もお！あつたまきた！」

こいつで吹っ飛ばしてやるって訳よ！」

フレンダが怒りのままにスカートの裾から小型ミサイルを取り出したところで滝壺が何かに気がついたのか珍しく大きな声で叫んだ。

「フレンダ、それを放っちゃだめ！」

「へ？」

しかし、滝壺の制止の声も虚しく小型ミサイルは既にフレンドの手を離れていた。

小型ミサイルは空中で尻に仕込まれた推進剤を爆発させ、凄まじい勢いで餓狼に向かつて突き進んだ。

が、

餓狼が右手を軽く振るつたのに合わせて小型ミサイルは方向転換し、逆にフレンド達の方へと向いた。

「二人とも、超私の後ろへ！」

絹旗は二人の盾となるように前へ出てこちらへ向かってきた小型ミサイルを殴り壊した。

それにより小型ミサイルは爆発するが、オフエンスアーマー空素装甲のある絹旗は勿論、前に出て自身を盾としたため、二人も無事だった。

しかし、先の爆発で懐中電灯が壊れてしまい、廢ビル内を照らすものは小型ミサイルが残した弱々しい炎だけとなり、餓狼の姿は見えなくなった。

パスパスツ

餓狼がいた方の闇の中からサブレッサーを付けた拳銃の発泡音が聞こえたと体感的に同時にそれとは正反対の絹旗達が来た方向から全員の腹を銃弾が貫いた。

「な……これ……は……。ど……して……」

着弾の影響か、意識が朦朧としながらも自身の腹を見てみると、そこには小さな注射器のような矢——イコールスビード拳銃型麻醉銃の矢が刺さっていた。

「俺の能力は絶対等速。」

その能力は掌で触れたモノを俺が能力を解くか、対象物が壊れない限りあらゆる障害物を紙のごとく貫き進み続けると言ったものだ。

だからお前のミサイルを防げる程の自動防護膜を貫き、着弾と同時に能力を解くことで麻醉弾を当てることが出来たってわけだ。

ちなみにミサイルの軌道を曲げたり狙撃弾や麻醉弾の弾道を操ったのはもう一人の仲間の能力だ」

「超……騙さ………れ……て……いた……て……こと……ですか」

「騙される方が悪い。それが暗部のルールだ。」

敵が一人と油断したこと、敵の言葉を鵜呑みにしたこと、挑発に乗り、冷静さを欠いたこと、なにより自分の能力を過信したこと、それがお前らの敗因だ」

その言葉を最後に三人の意識は途絶えた。

その時、タイミングを見合わせたかのように餓狼にだけ聞こえる音声で餓狼の脳内に響いた。



「つと、ギリギリだったな」

餓狼は首に付けたチョーカー型の機械の電池を交換するためにズボンのポケットから2本の単三電池のようなものを取り出してさっきまで入っていたものと交換した。

これはEqu. acceleratorといい、今回の戦いに必要になると依頼人に貰ったものだった。

詳しい構造、仕組みなどは分からないが役割としては外部演算補助装置のはたらきをしているようだった。

これにより、本来level3だった餓狼はlevel4相当にまで能力強度を引き上げていたのだ。

しかしこれはバッテリーの消耗が激しく、十分でバッテリーが完全に切れ、先のように専用の単三電池型大容量バッテリーを交換しなければならなかった。

閑話休題。

「これで後はこれを依頼主クライアントの遣いに届けるだけだな」

餓狼は気絶しているフレンダに近づいて残骸を回収した。

ふと、まるで戦闘機が風を切るような音が聞こえた。

なんだ、と思い餓狼は窓越しに外を見てみた。

すると、夜のため見えにくいだが確かに何かはこちらへ高速で迫ってきているのが見え

た。

「クソツ！補正は頼んだぞ！」

餓狼はホルスターから拳銃を引き抜いて高速飛行物体に向かって能力を発動しながら4発の弾丸を放った。

放たれた4発の弾丸は窓ガラスを割り、物陰に隠れている優月の補正を受けて、正確に高速飛行物体へと向かった。

しかし、弾丸が外れたのか、それとも破壊されたのかは分からないが高速飛行物体は尚も、少しもスピードを落とさずにこちらへ向かってきて、遂には廢ビルに激突し、壁を破壊しながら目の前へと降り立った。

その際、瓦礫が飛んできて右手に持っていた拳銃を弾かれて、拳銃は崩れた壁から外へと落ちてしまった。

目の前に降り立ったそれは人だった。

下は黒の長ズボン、上はタンクトップと白衣を纏った金髪のツンツンヘアを後ろに流した筋骨隆々の男だ。

しかしその男の眼は機械的で緑色の光を灯しており、白衣のしたから除く両手は機械そのものだった。

おそらく彼は…

「サイ…ボーグ…」

「俺の名は木原双極だ。」

今はお前ら暗部の人間にはH s S K | 01 った方が分かり易いか？」

木原双極、否、H s S K | 01 は優月が隠れている方向を一瞥してそう言った。

「チツ、気付かれてるか）俺らよりも更に深い闇に潜むお前が一体何の用だ」

「なに、俺は上の命令でそれを回収しにきただけだ」

H s S K | 01 は餓狼の持っている残骸レムナントを指さした。

「上つてのは具体的には誰だ」

餓狼はそう尋ねながら僅かに半身になつてH s S K | 01 にバレないように腰の後

ろに隠していたレディースの拳銃に手をかけた。

「お前らが知る必要はねえよ。」

強いて言えばテメエらとは別口だ」

「そうか」

餓狼は手を掛けていたレディースの拳銃を一気に引き抜いた。

しかし、H s S K | 01 に向けてオフエンズイマー窒素装甲をも撃ち貫く銃弾を放とうとした手は視認

すらできない速度で接近したH s S K | 01 に手首を掴まれて阻止された。

「最初ハナっから気づいてんだよ。」

この新しい眼は優秀でな、筋肉の微細な動きまで読み取って先読みすることができるんだよ。

科学の野郎は確かこれは『前兆の感知』つてのをを科学的に再現したものだとか言つてやがったな。

まあアレとコレじゃあ齎す結果は類似していても本質は全く違うんだが。

ま、そんなことはどうでもいいか。

取り敢えずコレは貰うぞ」

そう言つてH s S K—01は餓狼の手から残骸レムナントを奪い取つた。

(クソツ、このまま抵抗しなくても死、コイツに挑んでも死なら俺はコイツに挑んで少ない希望を掴みとつてやる！)

餓狼はまずは能力を発動してH s S K—01に掴まれている右手を振り上げること  
で破壊し、隙を作ろうとした。

「甘えよ」

しかし、H s S K—01はやはりそれを見切つており、振り上げられる前に手を離して能力を発動して念動力で餓狼を壁へ叩きつけた。

「ガッ」

餓狼はあまりの衝撃に気を失いそうになるが、ここで気を失つたら死ぬという意志の

力でなんとか持ち堪えた。

しかし、背中から強く壁に叩きつけられたためか、四肢は一時的に麻痺して動かなかった。

それでも、視界の端で隠れていた優月がこちらへ来ようとしているのは見て取れた。餓狼はそれを麻痺して碌に身体を動かせない中、意志の力で無理矢理右手を動かして制した。

優月はそれを見て何か考えがあると思い、餓狼の下へ向かわずにそのまま隠れた。

(そうだ、それでいい。)

優月が死んでしまえば何もかもが終わる。

幸い奴は優月の存在に気づきながらも隠れているだけで支援もしないからと無視している。

付け入るとしたらもうそこしかない!

「一々殺すのも手間が掛かるからな。

少々楽をさせてもらおうか」

HSSK-01はそう言つて突入時に開けた大穴から外へ出て、背部にある機構から10mはあろう無機質な純白の翼を出した。

その翼は未元物質で加工された物質を用いて造られたものだ。

H s S K | 0 1 は翼を羽ばたかせて滞空し、空中で両手を広げた。そして段々と両手の間隔を狭めていく。

すると、H s S K | 0 1 の両手が狭められていくのに比例し、両手の中の大気が球状に歪んでいった。

遂には最初、ビル一個分もあつた大気の歪みは直径 1 0 c m ほどの球体となつた。

「吹き飛ばし」

H s S K | 0 1 は大気を圧縮した球体を廃ビルに放ち、壁面に接触したところで能力を解除して圧縮した大気を一気に解放した。

遮るものがなくなった大気は急激な勢いで元に戻ろうとし、その影響を受けて廃ビル諸共周囲一体を吹き飛ばした。

それはさながら大気の爆弾だった。

周囲一体は粉々に粉碎され、瓦礫の山となつていた。

これでは生存など不可能だとは思われるが、H s S K | 0 1 は一応センサーで生体反応を検索してみた。

能力で誤魔化している可能性も踏まえて数通りの方法で調べてみたが生体反応は感知されなかつたので H s S K | 0 1 は残骸レムナントを手にした場を去つた。

「ふう、どうやら行ったみたいだよ」

瓦礫の山を崩し、その中から5人の男女が現れた。餓狼と優月、そして気絶しているアイテムメンバアの三人だ。

5人があの大気の爆弾から助かったのは偏に優月のお陰だった。

優月は自分たちに向かう大気の爆弾の流れを操り、攻撃を逸らすと同時に着地のためのクツションにしたのだった。

そしてその後は瓦礫で姿が見えないようにし、センサーの流れを操ってセンサーに反応しないようにしたのだった。

「ありがとう、お前のおかげで助かった」

「お礼は良いよ。僕だってあのサイボーグから守ってもらったんだからおあいこだよ。」

それより、これからどうする？」

「そうだな。残骸レムナントの奪取or破壊は成功してもしなくてもどっちでもいいサブミッションだったからこれはもう諦める。」

あの化物が出張ってきた時点で勝ち目は欠片もねえからな。

だからメインミッションであるこいつらの護送に専念する」

餓狼は気絶しているアイテムメンバー三人を見ながらそう言った。

「分かった。それじゃあ車を調達してくるから天牙はその間身体を休めながらこの子達の見張りをしてて」

「分かった。悪いな」

「気にしない、気にしない」

優月はそう言って子供っぽく笑いながら車を調達しに行った。

「さて、あのクソゴリラ、殺されてねえだろうか？」



## 第二十一話 残骸争奪戦

rank | SSS

PM8:49

アウトスポット  
掃き溜めと呼ばれる、何時しか人が居なくなり、スキルアウトの溜まり場となっていた地域。

今は人払いの術式により関係者以外無人となったその一角、左右を人気がない寂れた建物で囲まれた、車二台通るのがやっとという程度の道に一人の男が刀身だけで2mはある幅広の大剣を肩に担いで立っていた。

2mと少しという巨漢に、獲物を屠るために研ぎ澄まされた筋肉、幾多もの死線を乗り越えた末身についた気迫。その男、ベルゾレフⅡハルドトスキーを一言で形容するならば『鬼』というものが適当だろう。

その男の前方には建物の壁面をガリガリと削りながらこちらへ直進してくる一台の車があった。

「うむ、手筈通りじゃのう。

小僧も中々いい仕事をするでないか」

ベルゾレフⅡハルトトスキーは予定通りことが運んだことにより緩んだ頬を引き締め、向かい来る車を両断せんと大剣を上段に構えた。

車は建物の壁面をガリガリと火花を散らして引き摺りながら迫り来る中、その天井を破つて三人の少女が車外へ飛び出し、路地を通つて餓狼達のいる方向へとこちらの計画通りに向かつてくれた。

（車外へ飛び出したのは三人。）

情報によればアイテムの構成員はたしか四人じゃったか。

なれば残ろうは後一人。飛び出した者等は絹旗最愛、滝壺理后、フレンドⅡセイヴェルンであったからリーダー格である麦野沈利というLEVEL5の嬢ちゃんかワシの相手か。これも計画通りじゃな。

ここまで計画通りじゃとこの計画を提案してきた、依頼主の遣いだとかいうあの小僧が恐ろしく思えてくるのう。

で、次は『車から原子崩しマルチダウナーを撃つてくるだろうからそれを雷属性の技で防ぐ』、だったか）

『あの小僧』と言われていた少年の言っていたとおりに車から三条の原子崩しマルチダウナーの閃光が放たれてきた。

通常なら不意打ちの原子崩しマルチダウナーを目視で対処するなど不可能に近いが、今回は計画によ

り前もって予測していたため、ベルゾレフはすぐに反応し、雷属性を付加した大剣の腹を向け、扇のように横薙に振り回して軌道を逸らし、勢いそのままに回転して、遠心力を味方に付けた大剣の腹で莫大な衝撃波を起こして麦野沈利がいるであろう車をぶっ飛ばした。

車は天高く舞い、そして地上に激突すると同時に爆発、炎上した。

勿論のこと、中にいた少女もそれに巻き込まれ、死亡した。本来ならそんな運命を迎えるだろうが生憎、長い間暗部の深い闇の中を生き抜いてきた彼女にそんな常識は当てはまらない。

辺りに立ち込める砂煙と爆煙を引き裂いて、天から雨の如く、幾条もの閃光がベルゾレフへと降り注いだ。

拡散支援半導体で拡散された原子崩しだ。

ベルゾレフはそれを雷属性が付加された大剣で薙ぎ払い防いだ。

彼女は原子崩しを放つと直ぐに後部座席を消し飛ばして脱出し、タイミングよく衝撃波で砂埃が起こったのでそれに紛れて下方射出した原子崩しを推進力に大ジャンプし、上からベルゾレフを奇襲したのだった。

未だ煙が立ち込める中、閃光が射出された角度から麦野の大体の位置を割り出したベルゾレフはジャンプして4 m程上にいた影を雷を纏った右足で蹴り抜いた。

影は凄まじい速度で弾かれ、地面へと叩きつけられた。  
 「幼いたいけ気な乙女に随分派手にやってくれるじゃない」

ベルゾレフは着地と同時に風魔法で立ち込める煙を全て吹き飛ばした。  
 開かれた景色の中に麦野は平然と立っていた。

「あれだけの攻防ができる嬢ちゃんはどこに幼気さがあるというんじや？」  
 言った瞬間原子崩しメルトダウンが照射された。

ベルゾレフはそれをなんでもないかのようエンチャントに、雷を付加した拳で払った。  
 改めて弾かれた原子崩しメルトダウンを見た麦野は思わず浚面を作った。

「にしても、蹴りを盾のように伸ばした原子崩しメルトダウンで防いだのは流石に驚いたわ。

ワシが嬢ちゃんメルトダウンの攻撃を逸らしたのと同じ原理じやな？

おまけに吹き飛ばした勢いも原子崩しメルトダウンの逆噴射で殺すとは……戦い慣れとるのう。  
 じゃが、唯一の攻撃手段を完封された状況でワシに勝てるかのう。

大人しく投降してくれるならワシも楽なんじやが」  
 「ハッ、誰が大人しく投降するかよ。

暗部で長い間生きてんだ。対策ぐらい講じてる」

麦野はそういつて手に持っていたバッグから肘まで覆う柔軟性のある機械的なガン  
 トレットを取り出して装着し、バッグを投げ捨てた。

「ほう、このワシを相手に接近戦か。あまりオススメはせんもう。

ラビット・スイッチ  
【瞬時切替】」

ベルゾレフはアイテムボックス内にある装備と瞬時に切り替える特殊技能ラビット・スイッチ  
【瞬時切替】を使い、大剣を仕舞って、アイテムボックス内の無骨なガントレットを換装した。

「手加減はするが油断はせんぞ?」

三条の閃光がベルゾレフの右足、胸、頭を狙って放射された。

ベルゾレフはそれを全身から闘気を放出するが如く、雷属性の魔力の衝撃波を放出して防いだ。

「言つて早々油断してんじゃねえよクソゴリラ」

閃光に紛れて接近していた麦野はガントレットの前腕後部に備えられたブースターメルトダウンから原子崩しを放出して超高速の右フックを叩き込んだ。

拳のミサイルとでも形容できる強烈な右フックを喰らったベルゾレフは左方の建物を破壊しながら吹き飛んだ。

さらに、麦野はベルゾレフが吹き飛んだ方向の左右のビルをベルゾレフがいる方が大きくなるように原子崩しメルトダウンで斜めに切り裂くことで自重に耐えきれず滑り落ちた瓦礫による追い討ちをかけた。

「うむ、もう油断はせんわい……死んでくれるなよ」

瓦礫の下から声が聞こえた次の瞬間、まるで瓦礫が噴火するかのように吹き飛び、そこから全身に雷を纏ったベルゾレフが猛烈な勢いで飛び出し、麦野を思いつきり殴った。

「冒険者にはF〜SSSまでランクがある。その上にX、XX、XXXとあるんじやがぁりや例外じや。」

とにかく、ワシはその冒険者でSSSランクの位を持つてたんじや」

「何訳分かんねえこと言つてんだ電波ゴリラ！」

麦野は怯まずに原子崩しマルチダメージでブーストした拳を打ち返す。

「そしてウチの制御役とやらによるとSSSランクはこの今の学園都市の兵力で換算すると……」

「LEVEL5全員分に相当するらしいぞ」

ベルゾレフは打ち返された拳を高密度の魔力で強化した額で受け止めることで麦野を一瞬怯ませ、そこでできた一瞬の隙に麦野の頬に右フックをキメた。

全身に雷属性の魔力を纏い神経伝達速度を飛躍的に上昇させたベルゾレフの一撃を受けた麦野は威力を逃がすようにガントレットのブースターを噴出させて自身を回転させ、そのまま遠心力の乗った裏拳をベルゾレフに打ち込んだ。

その裏拳は学園都市製の強化コンクリートの壁をも打ち砕く程の威力を秘めていたが、ベルゾレフはそれを直撃しても一瞬首を右に向かされる程度で、気にせずに麦野にボディーブローを叩き込んだ。

麦野はボディーブローがヒットしたと同時に下向きに原子崩しを少しだけ噴射して威力を殺し、そのまま少し上にいる麦野の顔の方を向いているベルゾレフの顔面に向けて至近距離から極大の原子崩しを叩き込んだ。

流石にこのレベルの原子崩しは全身に纏っている雷程度では防ぎきれないので、両腕に纏っている雷を追加して、顔の前でクロスして防いだ。

しかし、流石に完全に防ぎきれず、両腕に装着していたガントレットは表面が溶け、原子崩しを防ぐ際に生じる反作用により、地面に押し付けられた。

原子崩しを防いだ両腕もあまりの反作用の強さに痺れていた。

「ぐっ、やるのう」

地面に着地し、一足早く次の一撃の準備に移っていた麦野はフルパワーでブーストさせた必殺の一撃を、隙ができたベルゾレフの腹に叩き込んだ。

「LEVEL5全員分に相当するとかほざいてた割に大したことねえなあ！

死ね！クソゴリラがア！！」

「粹がるな小童！」

麦野の必殺の一撃を、強固な防護壁を展開する防御魔法『プロテス』を無詠唱で三連続展開して防ぎきった。

ベルゾレフは攻撃を防がれてできた僅かな隙を逃さず、麦野の腹に膝蹴りを極め、そのまま常人が確実に気絶する量の三倍の電流を流し込んだ。

「グアアガガググガガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

麦野は高圧電流により痺れた喉から獣のような断末魔を轟かせ気絶した。

「まったく…、こんな苦戦させられるなら態々徒手空拳に合わせず大剣で相手をすれば良かったわい。」

相手の実力を正確に測りきれんとはワシもまだまだじゃのう」

ベルゾレフは表面が溶けたガントレットをテキトウに放り、気絶した麦野に念のため、依頼人から支給された麻酔を打った。

「それにしても此奴に放った攻撃は全て常人が気絶する程度の電流を伴ったものだったというのに、痙攣すらせず、拳句の果てに常人なら致死量である電流で漸く気絶とは…化物じゃな。」

「……本当に人間か？」

ベルゾレフは麻酔の入っていた注射器を電撃で消し炭にしながら、捕まったエイリアンを見る科学者のように気絶した麦野をジロジロと見ていた。



そこにタイミングよく黒のワゴン車が現れ、ベルゾレフの前で止まった。

助手席の窓が開き、窓辺に肘を着いた天牙が顔を覗かせた。

「ご苦労さん。さっさと用済ませてアジトの医務室に行きてえから早くそいつ連れて乗れ。」

残骸は<sup>レムナント</sup>面倒な奴に奪われたから回収は中止だ」

「なんじや、奪われたのか情けない」

ベルゾレフは後部座席のドアを開けて気絶した麦野を乗せながら軽い落胆の声を吐く。

「相手がHSSK—01なんだから仕方ねえだろ。」

あんな化物と真正面から対峙できんのは『レイブン』の中じやテメエぐらいしかいねえつつの」

「ほう、アレと対峙して無事とは主等も悪運が強いほう。」

アレは開発途中の現段階ですらLEVELE5の2位以下を軽く凌駕するというのが」

後部座席に腰を据えたベルゾレフは先程とは打って変わって感嘆の声を上げた。

「優月がいなけりや死んでたがな」

「なんじや、女の子に助けて貰うとはやはり情けないほう」

「事実なだけに余計うぜえんだよクソゴリラ！」

「なんじやと！クソ坊主！」

「まあまあ二人とも落ち着きなつて。」

ベルゾレフはいい歳した大人なんだからそんなことで怒らないの。

天牙も女の子に助けられたからつて気にしすぎ。

仲間なんだから助け合いは当然でしょ？」

「う、ぐぬぬ…済まぬ」

「……ちつ、悪かつたよ。」

次は俺が護つてやるからな優月」

「うん！私も天牙を護つてあげるね」

（空気が甘いのをう）

『レイブンの3人と気絶した『アイテム』メンバーを乗せたワゴン車は第十五学区へと

向かって走り抜けた。

第二十二話残骸争奪戦Adult responsibility  
of the child

PM9:05

騒音が聞こえる。

爆発音に酸で何かが溶けるような音、何かを砕く破碎音、ゴロゴロという落雷のような音も絶え間なく聞こえる。

何故私はこんな騒音の中眠っていた……？

そうだ、確か残骸<sup>レムナント</sup>を狙う男に後ろから気絶させられたんだった。

耳を澄ませて周囲の音で状況を推測しようとするが、色んな音が混ざり過ぎていて一体何が起こっているのか音だけでは判別できなかつた。

疲労のせいか重い瞼を開け、周囲の状況を改めて確認してみると、そこは地獄絵図だった。

天からは雷の雨が降り注ぎ、大地からは地表を割いてマグマが噴き出し、巨大な蛞蝓ナメクジが酸を吐き、それと対峙する巨大な炎を纏った犬が能力を用いて？爆破していた。

しかし、周囲がそんな天変地異にも等しい有様となつていながらも何故か結標の周囲だけはまるで区切られているかのように綺麗で、逆に不気味さを感じさせた。

「一体……何が起こっているの……？」

「お、やっと目え覚めたみたいやな」

聞き覚えのある関西弁が聞こえて後ろを振り返ると、そこには陰陽師の格好をしたクセツ毛の男がいた。

「貴方は…確かさつき助けてくれた……陰陽師？」

クセツ毛の男は「まあ、間違つてはないけど」と苦笑いで呟いた。

「僕は熾城清明しじょうけいめい。ただのカメラマンやよ。

今は訳あつて副業中つて感じやな。

そんなことより君、早よ逃げ。

此処に記された所に僕等のアジトがあるからそこで待つといて。

そこやったら安全やからさ」

熾城はそう言つてアジトの場所を記した地図を渡した。

因みにその地図には端に右下の角が伸びた五芒星が描かれており、術者と術者が承認した者以外が触れたり、見たりすると発火するようになっていた。

「悪いけど断らせてもらうわ。」

私は残骸レムナントを破壊しなきゃならないから逃げる訳にはいかないわ。

残骸レムナントを持ち込んで悪用しようとしたのは私なんだから。

自分が招いた事態ぐらい自分で解決してみせるわ。

いや、解決しなきゃならないのよ。自分のためにも」

結標は確固たる意志の宿つた眼で熾城を見つめた。

「それなら心配せんでええよ。」

残骸レムナントはこつちでなんとかするからな」

「だからこれは私がやらないと……」それに」

熾城は結標の言葉を遮り、彼女を危険から遠ざけるためにあえて冷たい言葉で非情な

現実を突きつける。

「残骸レムナントを破壊するゆうことは周囲をこんな風にした奴等と戦うゆうことやで？」

こいつらだけじゃない。

君が知つてるような浅いところやない、深い闇に浸る暗部の連中もや。

そんな化物が跳梁跋扈する中、レムナント骸を破壊できるって本気で思ってるんか？」  
「それ……は……」

結標は周囲の地獄のような景色に目をやり、あまりの惨状に目が揺らいだ。

「はつきり言わしてもらうけど、もし君がこのままレムナント骸を破壊しにいったら高確率でレムナント骸の破壊すらできんと死ぬで。」

責任感じて最後まで貫こうとする精神は好感もてるけど、君の命を捨ててまでやるもんじゃない。

命は皆平等に1個しかないんやから大事にし」

揺らいだ目は遂には俯き、見えなくなつた。

しかし、俯いていた時間はそんなに長くはなかつた。

次に顔を上げた時、結標の目は揺らいではいなかつた。

真つ直ぐと熾城と目を合わせ言つた。

「……………信じて……いいのね？」

「そこは君の判断に任せる」

そう言つて熾城は朗らかに笑つた。

「……………分かつたわ。」

悪いけどレムナント骸の処理は貴方達に任せるわね」

「ああ、任せとき」

結標は座標移動ムーブポイントを使って、地図に描かれたアジトへ向かった。

（あの娘はまだ弱いからな……。先の事を考えたら情けないけどどうしてもあの娘を頼らなアカンから、せめてその時までには僕等が責任持つて面倒見んとな）

「それが大人つてもんやろ。」

なあ、イフリート」

熾城は上空の赤い光点レッドポイントに向かって語りかけながら、人差し指と中指に魔力を灯し、頭上に魔法陣を描いていく。

「宇宙空間まで吹き飛ばしたのによく生きとるわ。」

やっぱどここの世界でも悪魔はタフなんやなあ」

頭上に描いていく魔法陣はどんどん複雑かつ奇形になっていく。

「これでダメ押しや」

魔法陣は完成した。

円で縁取った五芒星を星図に見立て、星図内には数多の星座が描かれていた。

そして、中心の、本来なら北極星が位置する場所には黒い光点があった。

「宇宙。始まりは爆発。

なれば終わりは何か。

爆発。否。収束。否。崩壊。否。それは闇。闇に飲まれ、光は潰える。『黒の極点』  
魔法陣の中心に描かれた黒点が広がり、星座を全て飲み込んだ時、魔法陣は消え、上空にあった赤い光点を飲み込むように突如闇が現れ、大空を闇が覆い尽くした。

これで最低でも行動不能にはなるだろうと思っていたが、大空を覆っていた闇に異変が生じる。

「……………まじか」

闇から僅かな赤光しゃつこうが盛れた。

光は闇を引き裂き次々と漏れゆく。

「……………」

熾城の頬を一筋の冷や汗が伝った。

しかし冷や汗に反して熾城の口角は上がっていた。

遙か上空の闇から聞こえるハズのない声が聞こえた。

粉塵などの雑味のない、純粋な炎のみによる爆発は大空を覆っていた全ての闇を破壊した。

「凶ニ乗ルナ。人間風情がツツツツ!!」

闇より出でたイフリートはその様相を変貌させていた。

人の原型はなく、全身は赤褐色になり体長も4 m程に肥大化していた。頭には振くれ



た2本の黒い角が生え、目は強膜が黒く、瞳は炎のような煌々とした灼眼となっていた。背には一對の黒い蝙蝠のようである、ドラゴンのような硬質さの翼を持ち、臀部からは赤黒いマグマのような色彩の硬質な尾が生えていた。

今ここに、本物の悪魔がその力を解き放った。

神話に語られる、天使に並ぶ強大な力を。

だが、異世界の天才陰陽師はそれを見て……

晒っていた。

「くくく、こりやあ久しぶりにおもろい戦いになりそうやわ。

君に敬意を表して教えたるわ。

官位従四位下・播磨守、安倍氏初代当主安倍晴明。

それが僕のほんまの名前や」